

ライザのアトリエ～
たつた一つの魔法の言
葉～

自給自足すらできなかつた敗北者

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

——これは少年少女の出会いと別れ、成長を描いた物語：それに加わる一人の青少年
年の物語でもある——

1／28 追記

拙いですが、モチベーション維持の為に挿絵を描きましたのでよかつたら見てやつ
てください

レシピ——爆粉うに より『ハチミツを頬張るライザ』

ライザのアトリエにハマつて二次を探すも圧倒的に作品が無く絶望して、自給自足し

ようにも文才の無さに絶望した敗北者の最後のあがき——そうだ、作者が先駆者（踏み台）となり、ライザ二次を書いて、なんとか他人のインスピレーションを刺激して、他人に書いてもらおう——

お願ひしますライザ二次増えてくださいなんでも（ry

目次

序幕

序幕

第一幕

初戰鬪

新たな出会い

真打は遅れてやつて来るもの

葛藤と決意

第二幕 まずは一步の始まり

一路み出す

初めての鍍金術

番外編 在りし日の記憶

レントのキズ／アガーテの優しさ

逃げてたワケ

レシピ3 草刈り鎌

光の軌跡

レントの頼み

爆粉うにの実力

.50

レシピ2——グラスピーノズ

レシピ 1 ━ 爆粉うに

22

番外編——在りし日の記憶 3

15

番外編——在りし日の記憶 2

104

93 79

59 41 28 20

1

226 205 191 179 169

レシピ4	——	フラン	——				
笑み	——						
自己把握	——						
最後に踏み出す	——						
ゲーム風ステータス集（第二幕終了時）	308	295	275	260			
第三幕 変わりゆく人々							
一人前として	331						
レシピ5	——	薪割り斧	——				
レシピ6～8	——	簡易木材、簡易石	——				
材、海草土	358						
タイトルコール	375						

誓い	——						395
柵を解き放つ	——						
クラウディアの頼み	——						
賭ける	——						
レシピ9	——	インデュービタブリン	——				
ク	——						
確執	——						
笑み再び	——						
意固地	——						
カイルの頼み（レシピ10——おいしい練り餌）	469	455	441	423	414		
	483	497	513	497	527		

最後の課題

競争開始

竜（ドラゴン）

閑話　クラウディアの戦闘力「前」

588

閑話　クラウディアの戦闘力「後」

604

閑話　道具の見直し「前」（レシピ

617

11　　躍動シロップ）

閑話　道具の見直し「後」（レシピ

636

12　　レヘルン）

ゲーム風ステータス集（第三幕終了時）

646

初期プロット

（※ネタばれ注意）

656

序幕

——此の戦いは何てことない当たり前のものを守る……あたし達だけの戦い……

ザ
ザ
ア
・
ザ
ザ
・

波の音が聴こえる…

暑い陽射し、美しく透き通った浜辺の中を一人の女性：いや、まだ大人へと成長しきつてない少女が憂鬱気に入歩く：

この美しい景色も、十数年此処で暮らしてきた少女にとつては既知に溢れた代わり映えのしない詰まらないものにしか見えない：

しかし、思春期で好奇心の塊と言つていい彼女にとつては若干致し方ない事ではあるのかも知れない。

故に、少女はこの代わり映えしない日々を心より変えたいと焦がれていた。

彼女の名は「ライザリン・シュタウト」通称「ライザ」

何てことない農家の一人娘である。

此処はクーケン島、ラーゼンボーデンと言う特産物など何もない、何てことない村
く、青春の物語である

「——それでね！お父さんが毎度「麦の気持ちを考えろ」って言うから、つい「あたしは麦じやなくて人間だよ！」って答えちゃつたら————」

「分かつたよ、どうせ母ちゃんの方に怒られたんだろう？怒るとおつかねえからなあ…ミオさんは」

「そんなことより見てよホラ！少しは意味が分かりそうな図入りの本があつたんだよ！」

「何よ！そんなことって！あたしにとつては————」

一つの小さな円卓を囲んで少年少女の騒々しい声が小さな部屋に響く

一人は赤毛に偉丈夫、精悍な顔つきながらも幼さを残しつつ将来は益荒男になりそうな少年

彼はまたかと言わんばかりの呆れた顔で少女の話を聞く、彼の名は「レント・マルスリンク」このメンバーで一番の常識人かつストッパーでもあり、そのお人好しさから来る苦労人でもある。

もう一人はおどおどした雰囲気に小柄でどこか可愛らしくもある顔つき、金髪でそばかすと大きな丸眼鏡が特徴の少年

今は新たなる本への興味か、あるいは気心知れた友達しか居ないからか、おどおどした雰囲気は鳴りを潜め、新たなる未知を見つけることによる興奮で頬を若干染めている、彼の名は「タオ・モンガルテン」小心者で人付き合いが苦手、しかしながら強い信念を持ち本への情熱をささげる村の変わり者である。

そしてもう一人がこの部屋の主――の娘である「ライザ」親に怒られた不満を吐き出すように友達へと愚痴るのであつた。

ここはライザの家の屋根裏部屋、少年少女ら4人の活動拠点であり、彼彼女らの小さ

な聖域である

「大体タオあんた、また新しい本を地下から持つてきても書いてある字が分からないんじや意味ないじやない」

「しようがないじやないか、ひいじいさんが読み方をじいさんに教える前に亡くなつちやつたんだから…」

「それでもなんとか解読しようと食い下がる執念には感心するよ：つておい、折角の本が汚れちまつてるじやねえか、どうしたんだよこれ？」

「ああ：来る途中でボオスとランバーに見つかってさあ：足を引っかけられたはずみで泥の中へドボンと…」

「全く！あいつら～～～！威張り散らすだけならまだしもしつこくしつこく嫌がらせしてきて～！」

「そりやあ村の生命線である水源を握る有力者のお坊ちゃんだからなあ：村にいるやつで逆らえるのはいねえよ…」

「うぐぐぐぐ…やめやめ！こんな話！今日集まつたのは島の話じやなくて島の外への冒險計画の為でしょ！もうすぐ乾季も来るこの季節だからこそ一番の冒險日和なんだから！」

「自分で愚痴を始めたんだろうが（じやないか）…」

そう言つて男二人は同時にため息をつくのであつた：

「それはそと、島の外といえど今日が外から商人が来る日だつたんじやないか？」

「そうだね、村中その話で持ちきりだよ、確か野菜だか何かを商いに来るんじやなかつたかな…」

「外の商人ねえ…あたし達も見に行つてみる?」

「は?」「え?」

「その商人の到着を、あたし達も見に行くのよ!…どうせ手続きとか挨拶とかで永遠と船着き場にいるんでしょ!」

「えええーっ!?た、対岸に本当に渡るの!?そ、そんなの聞いてないよ!」

「何言つてんのよ!…今日集まつた目的は?島の外への冒険計画の為でしょう!島の!外への!!」

「あー…ライザに火がついちまつた…これはマジで島の外に行かねえと後を引くぞ…」

「冒険計画なんだから計画からじつくりと立てないことには——」

「船着き場に行つて！こつそり船を借りて！対岸に行く！——以上!!」

「諦めろ、タオ——こうなりや腹をくくるしかない」

「さあ！だらだら話してる暇も惜しい！冒険に行くわよ!!」

「ま、まつてよライザー！それにカイルはどうするのさ——。」

「大丈夫！大丈夫！きっとクーケン港へ行きがてら合流できるから！——きっとたぶん」

「おいおいおい……マジで初っ端から無計画じゃねーか……」

そうして少年少女らは家から飛び出し、冒険の序幕をはじm——
「待ちなさい！ライザ！またレントとタオにカイルまで巻き込んでろくでもないことしようとしてるわね！」

「げつ！お、お母さん！ま、まだ何もしてない…よ？じゃああたし用事があるからー・レント、タオ早く行くわよー！」

「ミオさん失礼しまーす」「しまーつす」

「あつ！コラーー・お父さんの農作業を手伝いなさい!!」

こうして母親の怒りの声を背に受けながらも少年少女らの冒険が本当に始まるのであつた――――――

ライザの家があるラーゼン地区からまっすぐ南に下ったところにこの島の中心ともいえるボーデン地区がある――――――こは町でも一番人口が集まる場所であり中心にあ

る水が出ない大きな噴水が目印でもある

「小舟♪♪小舟♪♪小舟があれば♪♪対岸までひとつ飛び♪♪」

「ライザ、なんだそのやる気がそがれそうな変な歌は…それに簡単に言つてるが対岸に渡るための舟を借りるだけでも無理難題に近いぞ」

「そうだよ！特にアガーテ姉さんにだけは見つからないようにしないと…」

「護り手の中でも、特にあたし達にうるさいからねえ…まあ大丈夫、大丈夫！いくらこの狭い島と言えどそうそう簡単に見つかったりなんて――」

「――ああ、それで構わない、船着き場の手配は終わっているな？」

「モリツツさんの指示で、過剰なまでに…商いは第一印象が大事だのなんだので張り切つてます」

「ふん、こんな片田舎の村に第一印象もなにもないだろうに…まあ、これも来客をもてな

す一環か…」

——噂をすれば何とやら、キリリとした目に艶のある黒髪、軽鎧を身に着けた妙齢な彼女こそライザ達が話していたアガーテ姉さんである、この島一番の剣の使い手であり護り手でも特にライザ達悪ガキを目にかけ叱る、お目付け役もある。

故にライザ達は普段の行いから来る自業自得ではあるが今ここで見つかってしまうのは明白であつた：

「ねえ、ライザ船着き場がどうこうって聞こえたよ、まずい、まずいよ…」

「確かに、護り手は島の警備が仕事だし：アガーテ姉さんが船着き場にいるのも当然だよな…」

「島の外への冒険もいきなり頓挫かあ…」

「うぐぐぐぐ…諦めてなるものか！こうなつたら奥の手を使うしかないわね！」

「奥の手？ そんなものあるのかよ」

「もう諦めて帰ろうよ～」

「イヤー！ このまま帰つたらお母さんに怒られるだけだもの、それならせめて冒険しなきやあたしの丸損じやない！」

「どういう理屈だよそれ？」

「こつちよ二人とも！ アガーテ姉さんに見つからないように静かに急いで！」

「ど、」に行くのさ？」

「こんな事もあるうかと、この前家の近くに秘密の船着き場を見つけたのよ！ まさしくこの日のためにあつたのよ！」

「はあ…？ なら何で最初つから――――」

「いいから早くいくわよ！」

——場所は変わってライザの家から北東に進んだところにある七色葡萄の雑木林を抜けるとソレはあつた——

「ふふーん♪どう？ 我が秘密の船着き場の感想は？ ちやーんと小舟もあるでしょ？」

「あ、ああ…あるにはあるな随分とボロつちい小舟が…道理で最初からこつちを使わなかつたのか…」

「こんなオンボロで本当に対岸まで行けるの…？ 途中で沈没したりしたら嫌だよ…」

「どうか此処、秘密も何も島のおっさんどもが釣りの時に使つてる場所じやねーか…」

「ああ…だから小舟が最低限のオンボロしかないんだ…」

「あー！もう！男二人で何をグダグダと冒険なのよ、冒険！今行くと決めなきや、何も始まらないじやない！それにカイルなら喜んで賛成してくれるわよ、あんた達と違つて！」

「いや、まあ…それはそうなんだが…」

「そのカイルも結局合流できずに置いてきたのはライザじやないか…」

「う、うぐ！…いや、だつてクーケン港に行けたら会えると思つてたんだもん…」

「お前さてはカイルが漁の繁忙期に手伝いに使つてる小舟を目当てで合流しようとしてたな…」

「そ、そんなことより！まずは対岸に渡るところから冒険は始まるのよ…」

「誤魔化したな…」「誤魔化したね…」

「——村の連中が行かない場所に挑んだり、街道を辿つて先の先まで進んだり、みんなが怖がつてる街道の西側を行つたり…」

「えええっ！あ、あの辺りは禁足地じやないか!?危ないだろうし怒られるだろうし：絶対にダメだよ!!」

「なーに言つてんのよ！冒険つてのはそういう場所をあえて踏み越えていくから冒険つて言うんでしようが…それに！北の山の果てに輝いて見えるあの塔にだつて…行けたら面白そうじやない？」

「!!」

「そう思うでしょ、レント？」

「——ああ…そうだな…冒険して、強くなつて…俺の実力を村の奴らに認めさせる…」

それが…俺の夢だ！」

「ああー…レントにまで火が着いちやつた…これは僕も行くしかないのかな…」

「——分かつたら行くわよ！ 大いなる冒険の旅へ！ いざ！ しゅっぱーーつ！」

何てことないあたしは今日、遂に一步を踏み出す…

当たり前の生活にないものを探めて——島の

外へ!!!

「——というわけでレントあんたが一番ガタイがいいんだから舟漕ぎ任せたわよつ
！」

「ええ!? おいおいそりやないぜ、せめて交代とか——
「僕は知つての通り肉体労働は得意じやないからね——」

序幕 完

こうして少年少女らは遂に初めて島の外へと踏み出すのであつた

第一幕 「向こう」への予感

初戦闘

——秘密の船着き場を出た一行は、クーケン島を真っすぐに北上して小一時間、島と陸を繋ぐ船着き場があつた。

このまま北上すれば街道があり、商人が行き来する広大な「ライム高原」へと開ける、船着き場からライム高原一帯を通称「旅人の道」と呼ばれている。

「んー……やつと着いたわねえ……」

「いやライザお前、船の上で寛いでいただけじやないか…」

「噂の商人さんは…まだ来てないみたいね…」

「無視かよ…まあ、いいや、それでどうするんだ？商人が来るまで隠れて待ってるか？」

「何をのんきなこと言つてんのよ、商人を見に行こうとは言つたけど一番の目的は違うでしょ！」

「…何だっけ？」

「もう！島の外への冒険だよ！冒険!!折角だから冒険をしなきやね！」

「冒険つて言つたつて…どこに行く気なんだ？このまま街道を辿つて北上か？」

「うーん…それもいいけど、街道を辿ると護り手の誰かと鉢合わせしそうだしなあ…お母さんにバレる可能性が…」

「――あ、あそこ！あそこから森へと入れそうじやない？行つてみようよ！」

そう言つてライザが目を向けたのは船着き場を正面に見て東側、岩々の隙間を縫うように細い道が続いている――奥には木々が見えることから、ライザの言う通り森へと繋がつていそうである。

「——あそこは……たしか、前にカイルが小妖精の森とか言つていたような……ほら、カイルが稀に薬草を取りに行つてるとか言う……ま、初めての冒険にはおあつらえ向きかな」

「ええ……本当に行くの？ やっぱやめようよ……きっとろくでもない目に合うよ……」

「そんなの行つてみなきや分からぬじやない！——大丈夫、大丈夫！ 早速冒険だ——！」

——外から見ただけではわからなかつたが、少し森の中へ入るとそこは翠緑：いや最早緑が濃すぎる深緑の木々が生え、木の根元には身の丈の倍程もある大きなキノコが群生しているクーケン島にはない別世界となつていた。

「こ、ここが小妖精の森……こんなに船着き場から近いのに村の人は誰も入らないんだ

よね…」

「そ、そ、う、怯、える、な、よ…、船、着、き、場、の、す、ぐ、横、の、森、だ、ぞ？…、ど、ど、う、せ、弱、い、魔、物、し、か、出、な、い、さ…」

「ば、冒、險、の、第、一、歩、か、ら、そ、ん、な、ん、じ、や、先、が、思、い、や、ら、れ、る、わ、ね…」

「ラ、ライザ、だ、つ、て、声、が、震、え、て、る、じ、や、ない、か…、態、々、こ、ん、な、怖、い、事、や、つ、て、る、の、村、で、僕、達、だ、け、なん、だ、ろ、う、な、あ…」

「こ、れ、が、冒、險、に、挑、む、つ、て、」と、よ…、さ、あ！…、い、つ、ま、で、も、喋、つ、て、な、い、で、出、発、よ！…」

「お、う、つ、！」「分、か、つ、た、よ…」

——そうしてライザ達は森を進み遂に出会う…

背丈は人の膝程はある小柄な流線形の丸いフォルム、大きなクリクリの瞳、青々としたボディー——そう魔物の代名詞、どこにでもいる割かし謎の魔物、見た目の可愛さ

から大人子供に密かな人気を集めている——「青ぶに」である

「で、出たわね、魔物！」

「ほ、本当に魔物だ：本当に、ほ、本物の…」

「あ、当たり前でしょ！これから嫌つて程出会うわよ！」

「腕試しだ！よし、行くぞ！」

「ふつ！？ふにーー！？」

「——さあ！カイルから（無理やり）習った魔法の実践編よ！——コーリングスター
！」

——ライザはお気に入りの杖先から白く輝く光をぶにへと繰り出す

——魔法、それはこの世界の生きとし生けるすべての者が持ちうる魔力……生き物だけじやなく、無機物、物質、土地、川、山すべてに魔力が宿る……

その魔力を体内で鍊成し術理を込め、繰り出す、それが「魔法」である。

しかしながら、ただの農家の娘がそんな大それたものを繰り出せるはずもなく、実情は体内の魔力を杖先に集め敵に投げつけているだけであるが……

「ぼ、僕も魔法を習つたし、行くよ……闇夜の帳……」

——ライザとは対照的に黒き光を得物、無いよりはマシだらうと実家の庭にあつたくい打ち用のハンマーを振り下ろす！ そうするとハンマーより黒い魔力がぶにへと当たるのであつた。

と、言つてもライザと同じく魔力を敵に投げつけてると同じだが……違いとしてはタオの技は何故かこの技を繰り出すとき無意識に魔力に毒という特性を付与しているのか、食らつた敵は毒状態になるという違いはあるが……

「ちつ！ 魔法で遠距離から攻撃出来て羨ましいぜ……だからって俺も負けてないぞ！ これでトドメだ！ ブラツドスラスト！」

——背負つた大剣を突きの構えで剣先へと魔力を集める……

レントは魔力を自身の体から離して投げつけるという行為が苦手である……よつてどうすれば魔力を有効活用できるかと考え、結果剣先に集めて敵に触れた瞬間弾けるという特性に注目した。

敵にレントの剣先の魔力が触れた瞬間弾け、ぶにが仰け反る……！その隙を突くようにレントの剣がぶにを一閃……！レントはこの一連の流れを技とし名を付けた……！

「ぶ……ぶにいー……」

そうして普段森へ入つてこない人と運悪く鉢合わせしてしまったぶには悲しげな声とともに地面へと溶けてしまった……

「はあ……はあ……ど、どうだ……？俺たち……勝つた……よな？」

「うん……多分……記念すべき初勝利つてヤツよ!!」

「い、生きてる……よかつたあああああ……」

「こんな事でへばつてたら、お話にならないでしょ……さあ！先に進むわよ……！」

「ああ！これでへばつてたら強くなんてなれねえ……」

「ぼ、僕はもういっぱいいたつたんだけど……」

「何言つてんのよ！あんた後ろから魔法で殴つてただけでしようが、幸い隙を付けたのか攻撃してこなかつたしね——」

「ああ、怪我だけは気を付けないとな——」

——こうして初めての戦闘から興奮の冷めぬまま、少年少女はさらに森の奥へと進むのであった——

新たなる出会い

——初戦闘の余韻も冷めたころ、深緑の森を進んでいく一行はふと

開けた場所に出た

——中央に廃墟と言つて差し支えの無い小さな小屋、小屋のすぐ横には下へと降りる坂があり、潮風も少し感じることから、海へと繋がつてゐる模様である、奥には泉らしきものがキラキラ輝いて見える……そして何より不思議と道中何度も遭遇した魔物の気配が微塵も感じられない不思議な場所であつた：

「……こは…森の中に、こんな開けた場所があるなんて…」

「はあ……こはクリント王国の遺跡だよ！ 村にもいっぱいあるだろ？ ほら！ 奥に見える石垣とか地上部分の建物は朽ちたけど、土台だけは残つてるんだよ！」

そう興奮氣味に早口で捲し立てたタオは一人走り出して思考の海へと潜つていくの

だつた…

「あー…タオの悪い癖がでたな、興味あることが目の前にあると突っ走つて…」

「タオもまだまだ子供よねえー…あんなに興奮しちやつて…」

「いや、ライザ、お前も普段割かしあんな感じだぞ…」

「——それほど大きくはないね…森の見張り小屋か何かだつたのかな…？でもこんなところに見張り小屋を建てて何の意味が…？それとも年月が経つたことによつて森がここまで浸食した…？」

「おいおい、そろそろ帰つてこーい！魔物に襲われても知らないぞ」

その時、女性の甲高い声が森に響く――

「きゃあ――――――ッ！」

「うわっ、ライザ！？ほら言わんこつちやない！勝手に突っ走るからだ！――つて」

「あたしはここだよ」

「だよ…な?——じゃあ、誰の声だ?タオか?」

「そんなわけないじやない!冗談言つてないで!それよりも声が聞こえたのは森の奥からだつたよね?」

「ああ、そのはずだ!とりあえず急いでいくぞ!」

「ええっ!ま、待つてよー!ライザー!レントー!」

場所は変わつて森の奥：

「ハア…ハア…」

金髪にイエロー・ダイヤモンドを彷彿とさせる瞳、普段であれば深窓の令嬢と言つて差し支えない可憐な少女が荒い吐息と共に魔物に追われ苦悶の表情を浮かべながら小箱を抱え走つていた

(ど、どうしよう…商隊から離れてコレの練習のために森に入つたら、魔物に追われるなんて…!)

(これを捨てて逃げれば助かるかもしれないけど捨てるなんてできない…何とかにげあつ)

不安定な足場と小石に足を取られついには目の前の魔物——人の腰丈ほどの可愛

らしい少女の姿をしている「花の精」見た目からは想像できないが仮にも魔物、魔法を用いてくる危険なやつである——に追い詰められてしまつた

このまま抵抗できずに魔物に甚振られる運命であつた少女だが、此処には冒險をしに来た少年少女がいた事、これに勝る幸運はなかつたであろう

「そこの子！後ろに下がつて！コーリングスター！」
「キュー!?」

「あ、あなた達は…？」

「会話は後！今は後ろに下がつて…！」

そうしてまずはライザが追われている子と魔物との間に割り込み、レント、タオも順次追いついた

「ライザ！大丈夫か!？」

「うん！何とか隙をついて女の子と魔物を離したけど…！」

「お、追いついた…うえ?!な、なんかこの魔物すごく強そうだよ…！しかも怒ってるし…！」

「そらいきなり横から魔法ぶちかまされたら、誰でも怒るよな…！」

「でも、襲われてる子を見て放つておけないじゃない！戦うしかないわよ！」

「助けを求める女の子を守つて戦う…か、へつ、冒険の出だしとしちゃ上出来だぜ!!」

「さあ！来るよ…!!」

そうして「花の精」との戦いの幕が開けた：

花の精は先ほど攻撃してきたライザへの怒りからかライザが使うコーリングスターと同系統の魔法、魔力を塊にして打ち出す——をライザへ繰り出す、ある意味花の精

なりの意趣返しでもあつた

「？？（まず、この魔物、魔法を使うなんて……避けれない……）」

その魔法弾ともいうべき攻撃がライザにあたる直前一つの影が割り込む——
身の丈ほどもある大剣を盾にライザをかばつたレントの行動であつた

「ライザ！油断するな！？」

「ごめん！助かつた！！」

「仕切り直しを図るよ……闇夜の帳!!」

ライザに夢中だつた花の精はライザよりも後方から飛んできたその魔法を避けるのは無理な話であつた

「ギュイツ!?」

「ナイス、タオ！レントお願ひ！隙を作つて！あまり時間をかけると他の魔物も来るかもだから、一気に決めるよ！」

「つたく！人使いが荒いな……行くぞ！ブラツドスラスト!!」

——レントは魔物相手、正確には実戦で今日初めて使った技である「ブラツドスラスト」この技を使う際にただ赤色の魔力が血を彷彿させるという理由で名付けたが、その名がある意味で結実する結果を偶然に生み出した

先ほどの花の精による攻撃を大剣で防いだとはい、幾ばかりのダメージを負つていて本来は発動しないはずであつた、しかし、初めての強敵によるダメージと興奮から来るアドレナリンによるものか、技は発動し、さらにレント本人ですら気づいていなかつた、この魔法で相手にダメージを負わせると、相手の魔力を簒奪し、自身を癒すという特性があつたことが幸いした

——結果それはクリティカルという形で花の精にダメージを負わせるのであつた

!

——花の精は追い詰められながらも冷静に状況を分析して勝ちを確信していた、先ほどの大柄な奴の攻撃は確かに効いたが、最初に攻撃してきた生意気な女は今動けそうもなく、大柄な男の方も技を出したばかりでわずかながら硬直している、後ろに隠れる小柄な男は魔法を使い直ぐには同じ魔法も飛んでこないだろうと読んでいる、故にこ

こから反撃だと、ほくそ笑んでいた

——それが完全に慢心だと気がついたのは小柄な影が生意気な女の後ろから飛び出てきた瞬間であつた

——タオは二人よりも後ろで戦況を見てた分、ライザの大技が少し遅れていることに気がついた、原因は後ろで守っている少女を助けるために魔法を使い、魔力が思つたよりも減つてゐることであつた：

「魔力はさつき隙を作るのに使つて暫くは遠距離攻撃はできない……でも、ここで魔物に攻め立てられたら、技を使つたばかりのレントも、大技を用意してたライザも危ない……自分が臆病だつて馬鹿にされるのはいい……本当のことでもあるし……だからつて今、ここで、友達が傷つくのを黙つて見てるのだけは出来ない！」うおおおおおおお！」

——無我夢中であつた、魔法が使えないならもう直接攻撃するしかない……普段臆病なタオが友達の為に奮い立たせた一撃——ハンマーの柄を使った突進攻撃、後に「操術・絡縕り」と名付けられた技は幸運を引き寄せた

——花の精は後ろから飛び出して攻撃してきた小柄な男の一撃を食らうも、まだ反撃可能だと思つて大技を用意している気配の女から攻撃しようとした——動けなかつた

——「操術・絡繹り」この技の特性はランダムな異常状態を相手に付加する、今回花の精が食らつた異常状態は「麻痺」極端に言えば僅かながら動けない程度の、普段であれば何の問題もなかつた、しかし、今ここでその一瞬の足止めは致命であつた……「ごめん！お待たせ！用意ができたよ!!これで終わり！アストラルスファイアア!!」

——花の精が最後に見たのは大きな真っ白い光であつた

「はあ、はあ…よし、勝てた…よな?」

「うん…何とかなつたよ…」

「もう…ホント勘弁してよ…」

そうして強敵への勝利を噛み締めた少年少女は、戦いの原因となつた少女へと向き直る

「あなた。大丈夫？ 怪我とかしてない？」

「う、うん…助けてくれて、どうもありがとう。森で迷つてたらさつきの魔物に…」

「災難だつたね、とりあえず森から出ちゃおう、また魔物に襲われないとも限らないし
…」

「そうだよ！ 森を出るつてのはだ、大賛成だよ、は、早く行こう！」

「そう慌てるなよ、さつきのタオの雄姿はどこへやら……にしても、初めての冒険なのに俺達なかなか上手くやつたんじやないか？」

「うん、女の子の危機を助けて帰還…レントじゃないけど、まずはまずの成果よね」

そうして今一度自分たちがなした冒險の成果を3人は噛み締めるのだつた：

「あ、先に自己紹介しちゃおつか、あたしはライザリン・シユタウト、ライザでいいよ——あつちのはレントとタオね」

「テキトーな紹介だなあ：別に僕はいいけどさ…」

「ふふ、私はクラウディア・バレンツ、旅のお父さんについて、ここまで来たの」

「かもな、ところでさ、さつきから大事そうに抱えてるそれ、なんなんだ?」

「うん、これは…」

「——言いたくないなら別にいいよ？ レントってば無神経なんだから」

「今一度助けてくれて本当にありがとう：改めてよろしくね！」

こうして少年少女らの初めての冒険はひと段落付き、森の明けた場所まで戻るのであつた：

真打は遅れてやつて来るもの

——一同は先ほど助けることのできた少女、クラウディアを加え、森の奥より途中にあつた開けた場所へと帰路に着く…

「あー…にしてもバレンツ…さん?はどうやつてあんな森の奥へ?」

「クラウディアでいいよ、レント君——旅人の道の途中で商隊が休憩に入つたときに少し森に入つたんだけど、魔物に追われるうちに迷っちゃつて…」

「いや…すごいな、魔物に追われてたとはいえ、この森から街道までは結構距離があつた気がしたんだが…」

「ふふ、これでも旅の商人の娘なんだよ?体力には自信があるんだから!」

「なるほどねえー…、うちのタオにも見習わせたいことだわ…」

「う、うるさいな！僕はインドア派なんだよ…」

——そんな他愛もない会話をしつつ開けた場所まで戻ってきたのであつた

「ふう…やつとここまで戻ってきたあ…」

「何だれてんのよ、まだ船着き場までは少しあるわよ、キビキビ歩く！」

「と、言つてもよライザ、少し歩き詰めでこの後も魔物との戦闘があるかもしれないし、此処なら魔物も来ないだろうし、少し休憩していこうぜ」

「レントの言う通りだよ、さつき通つた時も魔物はここにいなかつたしつて——前つ

！前!!」

「!? 何でここに魔物が!?」

そこに居たのは、道中ライザ達が青ぶにと同様に相手をして倒してきたオイタチと呼ばれる魔物……ではなかつた、基本的な外見はオオイタチと同じだが、オオイタチより体の色が黒に近く、鮮やかな青色の縞模様を持つオオイタチの変異種「ブルーフィン」と呼ばれる、この浅い森にあつては規格外の強さを持つ強敵である

「ピィイイイーー！」

「まずい、襲い掛かつて来るぞ！戦うしかない！！まずは俺が隙を作る！その間にライザ大技を――ガツ！」

少し、ほんの少しレントが敵から目を離してライザに指示をした瞬間にブルーフィンの突進はレントの横腹へと突き刺さり吹き飛んでいく、幸い大きな木に当たり止まつたからこそ重傷は免れたようであるが、すぐに起き上がりないとこを見るに意識が無い朦朧としているはずである

「レントっ！」

悪いことは続くものである、レントが吹き飛んだのを見てタオが慌てて駆け寄ろうとする、それは魔物にとつて見せてはいけない格好の隙となつた――結果ブルーフィンの尾っぽの薙ぎ払いがタオの後頭部へ振るわれる、結果タオも地面へと倒れこむ羽目に

なるのであつた。：

「タオツ！…クラウディアは何とか逃げて…！」

——ブルーフィンにとつてはもう後は消化試合でしかなかつた、一番厄介そうな大男は一番初めに吹き飛ばした、運のいいことに小柄な男の方もついでと言わんばかりに伸せた、残りは戦闘意欲を見せてるもの震えている娘か、その後ろでただ震える娘しかいない、故に勝ちは確定したも同然である、しかしながら目の前の存在に油断せず突撃を行うのであつた

「（冒険の最後が…こんななんて…つ！）…ごめんっ…！」

少女の浅はかな冒険への思いが友達を巻き込んだ事による懺悔か思わず謝罪が口からでる——目の前に迫つた衝撃にライザは固く目を閉じた

く…！

——つたく、冒険には置いてかれるし、慌てて追つてみたらいきなりピンチな場面に遭遇とは…ツイてるんだか…何はともあれ間に合つたようだ…！

ブルーフインの突進がライザに当たる間際、鋼色の一閃がブルーフインの額を切り裂

「!? … カイル…！」

「お待たせライザ！ 話は後だ！ 今は目の前の魔物を相手にする…！」

—— 時間はかなり戻つてライザ達が船着き場に着いた頃まで戻る

クーケン島の最南端には波が穏やかであり、広い入り江があることから港があり、クーケン島と同じ名を冠するクーケン港は漁から帰つてきた男達とそれを買おうとする主婦、商人たちで賑わっていた

そして漁で仕事していた男達の中でも一回り若い男がいた——光の加減によつて薄董色にも金色にも見える淡い髪色、髪色とは正反対に深い海を思わせるような藍い瞳、身長は170cm前半程、体は度々よく鍛えてるのか、筋肉質というよりは程よい機能美を感じる、服は海の色を思わせる青色で統一された軽装、唯一腰に佩いている80

cmほどの武骨な片手剣が異彩を放つてゐる——彼の名は「カイル・シュナイダー」島の記者ピーター・シュナイダーの息子であり、ジエナの兄でもある。

乾季も迫るこの時期、彼は漁の手伝いをすることによつて日々の糧を得ていた：「カイル！ 今日も漁を手伝つてくれてありがとうな！ 売り上げはまだ分かりそうもないから先に上がつてくれ！ —— つあ！ こいつをピーターに持つてつてやんな！」

そういうと漁師から投げられた魚を手に取り漁師に感謝を告げるのだった
「ありがとう！ 次の漁の手伝いはしばらくいいんですよね？」

「ああ、最近少し魚の様子がおかしくてな：漁場を休ませようつて決まつたんだ、カイルには悪いが暫くは声を掛けることが無いかもしれん……」

「まあ、漁も生き物相手ですし仕方ないですよ……では今日はお先に失礼しまーす！」

そうしてカイルは村に向かつて帰路に着くのであつた

「（それにしても今日はいつものメンバーで集会があつたはずだけど、少し漁が長引いちゃつたな……今から合流できるかな……？——ん？ あれはアガーテ姉さん？）」

「——ん？ カイルじゃないか、今日はいつもの悪ガキ4人組と一緒にじゃないのか」

「アガーテ姉さんだつてこんなところに居るなんて珍しいじゃないか、それに何か慌ただしいし、何かあつたつけ？」

「ああ、島へ新しい商人がくるつて話があつただろう、それが今日だ」

「ああ、クーケンフルーツを商いに来るとか言う…モリツツさん辺りとかは大変そうだなあ…それはそうとライザ達見なかつた？」

「いや、今日は見なかつたな…また、変なこと企んでるんじゃないだろうな…？」

「いや、オレも知らないですつて…今漁から帰つたんですから…」

「いや、すまない、邪推が過ぎたな…——ん、もうすぐ時間だから私は対岸へ商人を迎えるに行くからな」

「ああ、気を付けて行つてらつしやいアガーテ姉さん」

「(それについてもアガーテ姉さんもライザ達がどこに居るのか知らないのか…あいつが大人しく屋根裏部屋で駄弁つてるとも思えないけど…まあ、この魚を父さん預けたら、ミオさんに聞いてみるか…)

そうしてラーゼン地区へと歩みを進めたカイルはライザの母親であるミオさんと出会う

「ミオサーン! こんにちは! ライザ達知りません?」

「ん? カイルじゃないか、あんたこそライザ達と出会わなかつたのかい? あの子つたら農作業も手伝わずに走つて出て行つたわよ、てつきりまたあんた達と悪だくみしてると思つたけど…」

「あはは…今日は関係ないですねえ…んじやちよつと探してきます!」

「ライザに会つたら、お説教は長くなるわよつて言つといてね」

「（ミオさんも行方を知らない…ここに来るまで誰も見てないつて言うし…まさか島を出た…？いや、ライザ達は舟を持つてないし行けるはずが…まさか！？）」

そうしてカイルが走りだした先は、ライザ曰く秘密の船着き場であつた、そしてそこには普段停泊してゐるボロ舟が見事に無かつたのである

「あんのおバカ！対岸に行くときは多少慣れてるオレも一緒に連れてけつて言つたじやないか…！」

そうしてカイルはクーケン港へとトンボ返りするのだつた：

——時間は少し進み、ライザ達がクラウディアを助けた辺り、カイルの姿は対岸の船着き場にあつた、ライザ達がここに来たのがばれないよう少しはじっこに舟を止

め、騒がしい船着き場を覗く…

「なんか怒鳴り声が聞こえるな…何か問題があつたか…?いや、今はライザ達を探すのが先だ…つてこの足跡、村の人に入らない小妖精の森に続いてる…人数は3人分…ライザ達街道を逸れて森へ入つたのか…?急いで追わなきや…」

そうしてカイルは森へと走り出した…

「——娘が行方不明なんだ!どうにか探し出すことはできないか!?

「落ち着いてくださいバレンツさん——」

「落ち着いてなど居られるかつ!」

「いえ、落ち着いてください、バレンツさん、此処で怒鳴つても事態は進展しない、此処

は一つこれまで商隊に同行させていただいたお礼に私とリラにお任せ願いませんか？多少の荒事にも慣れておりますので……」

「——ん？あの少年は……」

——…その後姿を一人の女性に見られながら…

時間と場所はカイルが魔物相手に一撃を浴びせたところまで戻る

「!? つ…カイル…つ！」

「お待たせライザ！ 話は後だ！ 今は目の前の魔物を相手にする…つ！」

「（―――つて言つてもこの魔物は…ブルーフインだと！？ 普段こちら辺で薬草採取でも見かけない種だぞ…！ なんでこんな森の浅いとここまで…！）」

「（―――つく、レントとタオも…まだ立ち上がるのが厳しいか…！ 一人なら何とか相手をできるがライザに見知らぬ女の子を守りながら相手するにはきついな…！）」

「（しようがないつ…！ 多少のダメージ覚悟で呐喊するか…！） ライザっ！ オレが魔物の相手をしてるうちにレントとタオ、そこの女の子を連れて逃げるんだ！ 何とか食い止め

る…！」

「そんな、見捨てるような真似できわけないじやない！」

「——倒れてる連中よりは多少腕が立つようだが、味方を守りながらの吶喊は無謀と
しか言いようがないな」

「——えつ？」

「目をつぶれ！」

「誰っ!?」

その声が掛けらると同時に、後方より手のひらサイズの小樽が魔物に向かつて投げ込ま

れる……そして、魔物の目の前の地面に当たる：コンツ：

——刹那、眩い光と衝撃、島では感じたことない音、それが迫つていた魔物を吹き飛ばした——

「——えつ!? うそ……魔物が……」

ライザ達が後ろに振り向くとそこには2人、見たことない人がいた——小樽を投げたであろう男は薄い茶髪にグレーの瞳、額でかき分けられた髪の方の目にはモノクルを付け、学者然とした服を纏っている、目の下に薄く隈が見えるせいか、不健康そうな印象を与える……

——もう一人は白髪に真っ白な瞳の女性、全体的にピッチリとした服を身に纏い、その豊満な体が強調されている、思春期の男が見るには少々過激ですらある、表情のせいもあるが、全體的に病的なまでの白さが精氣を感じさせなくなつてゐる……

そこにようやく立て直したレントの呴きがライザ一同の心情を代弁していた

「……あの、強い魔物が……ほんの一瞬で……？」

「これが、強い？そう思える程度の腕でよくこんな所に入ってきたな…呆れた奴らだ
――そ、そんなことより！さつきの！ドカンってなったの!!あれなに!?あなたが
やつたんだよね！一体あれは何!??」

今までの恐怖はどこへやら、ライザの瞳には先ほどの爆発が焼き付いて離れない、そ
の好奇心が謎の男へと詰め寄る

謎の男はライザの押しに多少引きながらも律儀に答える…
「あ、あれは鍊金術だ――まあ簡単なものだがな…」

「鍊金…術…?」

「アンペル！悠長に話してる場合じやないだろう、標的をオマケ付きで発見したんだ、船
着き場へ戻ろう」

「分かっている、リラ――お前たち、話は後だ、まずは森を出るぞ」

「わ、わかつた……こうなつたら俺達も船着き場に行くしかないか……」

一同が船着き場に戻る中、一人、ライザは心に言いようのない感動を覚えていた
「（鍊金術……！あんな、あんなすごいの……初めて見た……！）」

「（何だろう……冒險のことを考えると同じくらい……いや、もつとそれよりも今胸がドキ
ドキして……！）」

――――この出会いが後に島の、延いては世界の命運すら左右する出会いになるこ
とをこの時はまだ誰も知りえなかつた……

「(あれ・結局、オレって助けに来たはずが助けられただけで終わつた…??)」

葛藤と決意

アンペルによつて魔物が吹き飛ばされた後、一同は森の開けた場所から南下をし、船着き場に向かつていた…

そんな中、前を行く二人がふと足を止めた

「——ここにも、この花が咲いているのか…」「ああ、ありがたいな」

そう言つて二人が見上げた先には、人の背丈のおよそ2、3倍はありそうな大きな花がある、見た目はスズランとかに近しいが、花から不思議な光を放つていた
その様子が気になり、思わずライザが問う

「この花がどうかしたんですか？やけに大きいけど…」

「——ん？ああ、こいつは、魔物が嫌がる香りを出すんだ、花の周囲に居れば比較的安全というわけだ」

「つまり、ここなら気軽に休憩できる…というわけだ、今後あちこち出掛けるなら覚えと
いて損はないぞ」

「おいおいライザ…オレが対岸の話をしたときに「魔払いの花」の話をしたじゃないか
…」

「え? そうだっけ…? ま、まあカイルの話は覚えていた…よ?」

「目が泳ぎまくってるじゃないか…まあ、いいが、今回は忘れないでくれよ…」

「ふむ、にしても少年、カイルといったか、この花の正式名称を知っているとは、旅に慣
れてるのかい?」

「あ、いえ…オレは普段漁のお手伝いで小舟を持つており、漁が手伝えなかつたり、人手
が足りてるときはこの辺の薬草採取とかで小銭を稼ぐ、対岸用の便利屋みたいなことを
してるんです」

「なるほどな、だからそいつらの中では多少戦い慣れているのか、剣の筋も悪くない」

「あ、ありがとうございます、うちの親は割かし放任主義で、あいつらと違つてこつちまで来るのを許可してくれたんです、いつかみんなで冒険しようつて約束をして、そのための事前演習というか…」

「ふむ、勉強熱心なことはいいことだ、何事も学べるときに学んだ方がいいぞ若人」

——そんな会話がありつつも、アンペルとリラに護衛されながら、船着き場まで無事に戻ってきた一同は商人を迎えていたアガーテ姉さんに当然の如くお叱りを受けていた

「——まつたく！お前たち悪ガキ4人組は…！どこまで人様に迷惑を掛けたら気が済むんだ…！」

「いや、アガーテ姉さん今回オレはライザ達を諫めに——」

「言い訳無用！——全く：無事でよかつた：」

「「「「」」、ごめんなさい：」」

そんな叱られているライザ達に一つの影が割り込む：ライザ達が助けたクラウディアであつた

「う、ライザたちを怒らないであげてください：4人が来てくれなかつたら、私は魔物に……」

「そうだな、私たちは駆け付けるのが今二歩程遅かつた、探索を頼まれておきながら、不甲斐ない話だ——申し訳ないバレンツ嬢」

「で、でも、すごく強い魔物から私たち全員を助けてくれたのもお二人ですよ？」

「あのままカイルとか言う少年に任せてても何とかなつたかもしないが、時間が惜しかつたから、今回ばかりは出しゃばらせてもらつただけだよお嬢さん」

「そう、そなんだよ、アガーテ姉さん！ドカーン！つてすごかつたんだから!!」

「お前は少しは姿勢だけでも懲りろ…全く…」

そんな会話の中、一人の男の声が仲裁に入る、線は細いながらも年月を重ねた大人の気配を醸し出す、金髪に青い瞳、きつちりと着こなした服装は歴戦の商人であることをうかがわせる…

「まあ、よいではありませんか、アガーテさん、結果としては全て上手くいったのですから」

「お父さん…」「ルベルトさん…しかし…」

そう、かの人こそクラウディアの父である「ルベルト・バレンツ」氏でこの島へと商いに来た商人である

「改めて、アンペルさんとリラさん…それにライザ君、レント君、タオ君、カイル君…だったかな?――このじやじや馬娘を助けてくれてありがとう、時折ふらりと商隊を離れる悪い癖があつてね…」

「ごめんなさい…お父さん…」

「なに、構いやしない、ここまで馬車に乗せてもらつたお返しでもありますし、私たちから言い出したことだ」

「ああ、探索と救助の報酬も、別途で受け取つているしな」

「あなたたちにも村に用事が?」

「私たちはクリント王国の遺跡を調査をしていてね、この辺りではクーケン島が有名だと聞いてたんだが…」

「確かにクーケン島にはその手の遺跡があちこちに残っているな：村の中にもある」

「ふむ…噂通り…か、しばらく調査の為に滞在させてもらえると助かるんだが」

「無理なら、この近辺で野宿するだけだ」

「いや、うちの村の大事な客人を助けてくれたんだ、粗略に扱うつもりはない、それなりのもてなしをしよう」

「そうか…ありがたい、野宿に慣れているとはいえ、やはりベットで寝れるに越したことはないしな…」

大人たちがそんな会話をしている中、少年少女は少し焦れるのであつた

「大人の話つて、なんでこういちいち回りくどいんだろうね、もつとこう、ズバツつとすれば早いのに」

「旅先でもみんなこんな感じだよライザ 「世間体」 つて言うんだって」

「ライザ、お前は後で説教追加だ――ミオさん同伴でな」

「うえつ!? そ、そんなー…」「ああ、ミオさんで思い出した、ライザ、ミオさんからの伝言で今日の説教は長くなるから覚悟しておけよだつてさ」

「今そんな情報要らなかつた…つ！」

「ははは！ さつそくお友達ができたようでよかつた、短い間かもしれないが、娘と仲良くしてやつてくれ」

「は、はあ…」、「ちらりそ…？」

「それでは皆さん、村へご案内します、アンペルさんたちも、ご同行ください」

—— そうして短いながらも濃い冒險を終えた商人、少年少女一同はクーケン港へと帰還するのであつた

そうして港へと着いた一同は、盛大な歓迎を受けるのであつた

「ようこそ！ラーゼンボーデン村へ！私が村の世話役を務めるモリツツ・ブルネンです！」

「分からぬこと、困つたことがあればなんなりとこのモリツツにご相談を、ハツハツハツ！」

「よろしく、モリツツさん、お互にいい商売ができるよう取り計らつていただきたい」

「ええ！ええ！このモリツツにお任せを！我が村の「クーケンフルーツ」を商いたいとのことですが？」

「ええ…現在、市場に出回っているものが中央、延いては首都でも好評でして」

「ここでは「クーケンフルーツ」と呼んでいるのですか、中央では「リュコの実」と呼ば

れております」

「なんせ、このクーケン島独自の作物ですからな！リュコの実も商品名としては悪くない、雅な響きですが――にしても中央・首都アスラ・アム・バートですか：まさかそんなことになつていたとは」

「私たちが食べる分のあまりを行商に売つただけだつたのですが…商売は何が当たるかわからぬものですねなあ…」

「私は、そのクーケンフルーツを流通させるルート作りにやつてきたのです、しばらくの間、ご厄介になります」

「ええ、どうです、私が提案した結果、この商機到来！――お互に力を尽くし、良い結果に繋げましようぞ！」

「歓迎の宴を準備してあります、どうぞこちらへ――私がご案内いたしましよう、なんせ宴の会場は、我が屋敷の庭ですからな!!」

「——ねえライザ、あのお父さんと話している、声の大きな人が村長さん?」

「村長さん、ではないけど……うーん……村の顔役……的な? モリツツつて人」

「人のいるところに□も手も出してくるやたらエラそーなおじさんだよ」

「村長じゃないのに、偉そう……もしかしてお金持ちなの?」

「お金もだけど、どつちかというとお水持ち……かな、島の高台にお屋敷があつて、その敷地に水源があんの——こんな田舎の島だと水を持つてる人が一番偉いんだよ」

「田舎だなんて……すゞくキレイな島だよ」

「そ、そ、う? ありがと、ルベルトさんに言われたからじゃ、ないけど……これからよろしくね、クラウディア!」

「うん! こちらこそ、ライザ!」

「——女の子の方は順調に仲良くなってるみたいだな、レントとタオも混ざってくれば?」

「いや、さすがにあそこに割つて入るほど無粋じやねーよ…」

「うん、僕もそう思うよ」

———そうしてクラウディアと別れたライザ一同は各自の家へ帰路に着くの
だつた

「やれやれ、クラウディアも歓迎の宴にご出席か」

「そりやそうだよ、主賓の娘さんなんだから」

「そういえば取材がてら、父さんも宴を覗いてくるとか言つてたな…」

「また会う約束はしたんだから、いいじゃない——それともレントは一目惚れでもし
た？」

「なつ！ば、馬鹿言つてんじやね——よ……それはそうと、俺たちがひどい目にあつ
た、新しい友達ができた、初めての冒険の収支はトントンつてどこかな？」

「ううん、黒字だよ、大黒字！」

「え？ な、なに？ そんなにクラウディアと友達になれたのが嬉しかったの？」

「まあ、この島じや俺らくらいの年の女の子、ほとんどいないしな、一番近いのでカイル
の妹のジエナか？ それでも6つは歳離れてるしな」

「もちろん！ でも、それもすぐ大きいけど——」

そんな会話をしているさなか、ライザ達に近づく二人の男の顔を見て、会話を止めて

しまう

「——よお、ライザと漁師もどきとその他オマケども」

「げつ、ボ、ボオス：!」「誰がオマケだ：誰が」「漁師もどきつて：」

そう声を掛けたのは青みがかつた銀髪に、紫色の瞳、勝気そうな顔と態度からは傲慢さを感じさせる少年「ボオス・ブルネン」先ほど港で出迎えていたモリツツ・ブルネンの一人息子である

またそれに付き従うように一人の少年が佇む、茶髪に薄青の瞳、ライザ達を小ばかにするその表情は嘲笑をたたえていた、彼は「ランバー・ドルン」ボオスの付き人である「フン、島を出た途端魔物にやられて、そこの漁師もどきと流れ者に助けられるような恥さらしが、一人前に反論か?」

「なつ!? なんでそれを」

「護り手たちがみんな、船着き場でぼやいてたんだよ！身の程知らずの馬鹿ガキどもがいい迷惑だつてな！」

「つ……」「くつ……」「…」

「痛い目見ても、まだそんな反抗的な態度か……反省もしてなさそうだな、ライザ？」

「いい加減、分を弁えてコソコソ道の端でも歩くよう心掛けるんだな」

「ほら、そこをどけよ、ボオスさんはこれから歓迎の宴に出席するんだ！」

「フンッ…」

そう吐き捨ててボオスは高台へと歩みを進めるのであつた

「へつ、大人しくしてりやいいのに、態々島を出たりするから村中に恥を晒すことになるんだよ——つてボオスさん待つてください…！」

「ライザ…」「突つ立つてねえで、帰ろうぜ…今日はもう解散だな」

「うん…今日はありがとう2人とも…カイルも助けてくれてありがとうね…それじゃ、
また明日…」

そうして一同は解散し、各々の家へと帰るのであつた

——次の日の朝方、ライザの家の屋根裏部屋

ライザは顔を少し曇らせながら、思わず呟くのであつた

「恥さらし、身の程知らず、いい迷惑、か…——島の外に出るって、そんなに悪い事な
のかな…そりやあ、今のあたしは、なんてことないあたしだけど…」

「——まず最初の一歩を踏み出さなきや、どんな遠くにもいけないと思うんだけどな
…はあ…」

「——ライザはそのままのライザでいいと思うよ、島の連中は外に出ることを怖がつている、だが、誰かが違った風を島へと入れないと腐ってしまう」

「つ!?ううえ!?カイル!?いつからそこに…っ!」

「ん?「恥さらしく」って呟いてたところからかな」

「最初からじやないもう!——あれ? レントとタオは?」

「ライザ——・レントとタオが来てるわよー!」

「噂をすればってやつかな」

「お邪魔しまーっす」「いつもすいません!ミオさん、今日も綺麗っすね!!」「あらやだ、レントつたら、こんなおばさんを褒めたどこでお菓子しかあげないわよ」「あざーっす！」

そうして慌ただしくカイルに続きタオとレント二人も屋根裏部屋に入つて来るの

だつた

「ライザ！ ニュースを持つてきたよ!!」

「ニュース…？」

「なんだ、まだしょげていたのか、ボオスの言つたことなんか忘れちまえつて」

「そうだよ、それよりライザが喜ぶと思つてさ、ニュースだよ、いいニュース！」

「なによー？ 古い本が一つてのはどうでもいいわよ」

「ほんとに落ち込んでるのな…カイル慰めなかつたのか？」「いや、オレも今來たとこな
のよ」

「違う違う、そういう僕の大ニュースじやなくて、あの二人…アンペルさんとリラさんだ
よ…」

「あの二人が旧市街に家を借りたんだとさ、場所聞いてきたから、一緒に行つてみようぜ！」

「鍊金術？とか言つたつけ？興味あるんでしょ？」

「鍊金術…うん…うん！――何グズグズしてんの3人とも！行くわよ！」

「全く…元気になつたと思つたらすぐこれだ…」

「ああ、助かつたよ二人とも…慰めの言葉はなんというか…苦手だ」

「ま、部屋でぼけつとしてるよりはいいだろ、俺たちもいくか」

こうして少年少女らは自身の目的の為、アンペル、リラの貸家へと突撃するのであつた

第一幕 「向こう」への予感

完

第二幕 まずは一步の始まり

——踏み出す

——氣分を新たにしたライザ達は家を飛び出し、早速アンペルたちの賃家に行こうとし……出来なかつた

「——ライザ、どこに行くつもりだい……？」

「げつ……お、お母さん……」

「今日は烟を手伝うつて約束しただろう？お父さんが待つてゐるんだから、早く支度をおし！」

そう、怒鳴るライザの母を諫める優しい声が話に割り込む、明るい茶髪、に優しげな瞳、普段農作業をしているせいか、線は細いものの程よく鍛えられた体——彼こそライザの父である「カール・シュタウト」である

「まあ、まあ、母さん、そう怒鳴らなくても、ライザには聞こえているよ」

「あなたがそうやつて甘やかすから、この子は…全く、先に畠に行つて準備してゐるわね」

「そういつてライザの母は畠へと向かうのであつた

「——あたし、今日は大事な用事があつたりなかつたりなんだけど…やつぱり手伝わ
なきや…ダメ？」

「ああ、やることは沢山あるぞ?——まずは水汲みに、畠の水やりからだね」

「まずはつてところから重労働なんだよ…今日一日くらい、畠も頑張つてくれるんじや
…」

「それはいけない!——ライザ、畠は生き物なんだよ?お前は一日、飲まず食わずで頑
張れるのかい?」

「ううう……そりや……そうだけど……」

そうして背中で語ろうとカールは熱弁を始めるのであつた

「お前には何より、真剣に畠と向き合う心が足りない、向き合つて耳を傾けると、ほら……
「そこの草むしりをして」「あの畦が壊れてるよ」「こっちには虫がいるからとつて」そんな
いろいろな声が沢山聞こえてくるだろう……？その声に応えて畠仕事をしていると、や
がて自分が、畠の一部になつたような全能感を感じるようになるんだ、ここまで感じれ
るようになればあとは簡単さ、声に従い、毎日手入れをして、土の栄養状態を確認して、
水を与えすぎないようにする、そうすると島でも味自慢で名を売る我が家のヴァッサ麦
ができる……想像してご覧、畠一面金色に揺れる穂、風に乗つて感じる土香り、果
てには——」

「——あなた」

「ん？どうしたんだいミオ？」

「どうした、じゃないよ、一人虚空に向かつて熱弁してると思つたら、またライザに逃げられて：まったく、どうしていつも、ああなんだろうねえ…」

「まあ、あの年頃の子には畠仕事は退屈かもしけん——だが、根気よく説得すれば、いつかきっと…」

た
うしてまんまと逃げおおせたライザ一同は思わずつぶやいたのであつ

「いいのかライザ？お父さんを置いてきて」

「ううう……ごめんね、お父さん！わたしはまだ当分、その境地にたどり着けそうにないのよ……つ――むしろ辿りつけちゃいけない気がする……つ！」

「カールさんも普段いい人なのに、畠のことになると変になると變になるんだよねえ……」

「ある意味、あの親あつてのライザとか、納得しか出でこないかもしけん……」

「僕も同感だね」

「ちょっとあんたたち！好き勝手言つてくれるわねつ！」

こうしてやつと目的地に向かうのであつた

—— 「旧市街」それはライザの家から南下してボーデン地区へ入り、ボーデン地区より西側へ抜けるとそこはある、元々はこの旧市街が島の中心であつたが、汽水湖の長年の浸食により少しづつ家々が海へのまれ、それに伴い人口が島の内側、ボーデン地区へと流れたことにより、そう呼ばれるようになつた、今でも浸食は少しづつ進ん

でるらしく、西側の浜辺へ出れば、浜辺から家の残骸が突き出てる不思議な風景が見れる

そうして旧市街に入つてすぐ左側、子供たちが学ぶ学舎の横に目的地があつた

「こ、ここで間違いないな？なんだかドキドキしてきたぜ…」

「なんでレントがドキドキしてんのよ？」

「ライザだけじやなくて、僕らにも期するものつてのがあるんだよ」

「タオにも？——ま、いいか：ごめんください！」

「——ん？開いているぞ、勝手に入つてこい」

「」「お、お邪魔しまーす」「」

部屋に入つて目についたのは奥に鎮座している巨大な壺？いや鍋、近くの机上には見たこともない薬らしきものが所狭しと置かれている、そして部屋の主二人が中央より出迎えてくれた

「四人揃つてお出ましか、こちらは丁度最低限住む分の片づけは終えたところだ」

「こういう作業はめんどくさい…」

「そう言うな、野宿は好きじゃないんだ…それで、こちらは…私たちにいかにも用がある、といった顔つきだな…」

「「「「お願ひします!!どうか——」」」

「リラさん！道中魔物を倒した手際、あの実践的な戦い方を、俺に叩き込んでくれ！」

「同じくリラさん！オレの剣の師匠から実戦経験が足りないといわれた！オレと試合をしてくないか!?」

「アンペルさん！クリント王国の遺跡調査をしてると聞きました！それならこの本を読めるんじやありませんか⁈」

「あたしに鍊金術を教えてください!!」

「――あー…どつから応えるかな…少年少女の願いを無碍にするのもアレだが、私はそこまで暇じゃ――んんっ!?」

「どうした? アンペル」

「――お前さん、タオといったか…その手に持っている本…どこで手に入れた?」

「ど、どこって家の地下の書庫に…えつ?――まさか、これ…本当に読めるんですか!?

「まあ…な――リラ、ここは「当たり」かも知れん」

「そうか…――そこのお前たち、この近辺の案内ができるんだつたら戦士の心得を教えてやつてもいいぞ」

「本当ですか、やつた！やります！なんでも頑張ります！！——この島のことなら俺が案内できます、後は——」

「ああ、島の外…って言つても船着き場からあまり離れたところは知らないが…ならオレが案内できます」

「——あとは、そつちの嬢ちゃんだが…——鍊金術…か、こればかりは教えてどうなるものじゃないからな…」

「あ、あたしも頑張ります！どんなことだつて——」

「まあ、待て、鍊金術は他の技能と同じように…いや、他よりも如実に、素質の有無が成否に直結する——簡単に言えば、いくら努力しても素質が無ければどうにもならないってことだ」

「そ、そんな…」

「だが逆説的に、素質さえあれば当たり前にできる、それを確かめてもし、見込みがあるなら…」

「——教えてくれるんですね!!!」

「あ、ああ…だが、素質があれば、だぞ?お前さんが見込みありなら、私も助かる」

「まずはそうだな…初步的なことから教えるか——鍊金術というのは「無より有を生み出す術」だ」

「…?」「なあタオ、カイルどういうことか分かるか?」「んー…?魔法の先生よりそんな話を聞いたことがあるな…魔法は鍊金術と違い1をどのように姿に変えようとも1にしかできないとかなんとか…」「さつぱり…というか、僕は鍊金術より早く本の読み方を教えてほしいんだけどなあ…」

「やはり、いきなり理屈だけ説明しても無理か…」

「いつそ調合からやらせてみよう、こいつはどう見ても体で理解するタイプだ」

「そうだな……どのみち、素質を確かめる必要がある——今一度聞こう、お前さん、名前は？」

「はい！ライザリン・シユタウト・ライザです！」

「よし、ライザ——これから私の言う材料を探つて来るんだ、島の船着き場の近くの森にあつたはずだ」

「船着き場の近く……魔石の森かな？わかりました！」

「採つてくるのは「ナナシ草」だ、鍊金術の基本は採取と調合……まずはその一つ、採取からだ——おい

カイルとか言つたな、確かに薬草の採取とかを生業にしてると言つてたな、ライザを手伝つてやつてくれ、ただし手伝うのはライザが採取したものの保管方法とか見分け方をだ、決して口を出すんじゃないぞ、これはあくまで素質のテストでもあるんだから」

「わ、わかりました…!」「分かりました！行つてきます!!」

「おいおい、すぐそばの森での採取だぞ、そんなに気張るな」

「いえ、それでも…あたしの第一歩なので！」

「あとはそうだな…タオ、君に確認したいことがあるんだが、いいか？」

「赤毛のでかいの、お前には私からだ」

「は、はい…!」「うす！何でしようか…!」

「ではナナシ草の採取を任せたぞ」

そうして各々の話が終わりライザ一同は家を出るのであつた

そして偶々ボオスたちと鉢合わせる

「なんだ、また恥ずかしげもなく、四人でうろついているのか」

「へへっ、今度はお揃いでどこにお出かけだ？ 古城の飛竜か？ 渴き悪魔でも退治に行くのか？」

「…魔石の森よ」

「フン、近所で冒険^ごつこでもするのか？ 対岸でひどい目にあつて、さすがに憲りたか——大体魔石の森？ あの船着き場の近くの広場だろう、あんな場所を森などと言つてる時点では程度が知れるな」

「言つてなさいよ！ もう構つてやる暇はないんだから…いこう！」

「う、うん」「じゃあな、竜や悪魔はお前らに任せんぜ！」「え？ オレは竜とか興味あつたんだが…」

こうしてボオスたちを置いてライザは各々の目的へと走るのだった…

初めての鍊金術

「魔石の森」そこは島の最南端、クーケン港より少し東側にある、名前の通り魔石が生える不思議な場所の事を指す、一説によれば島の魔力が溜まりやすい、若しくは何らかの原因で多くの魔力が溢れる場所の為魔石を採取してもまた生えてくるとか：

そんな中、二つの人影が森へと踏み込む、ご存知ライザとカイルである——レントとタオはアンペル、リラ両名に言われた事を行うため、ボーデン地区で別れていたのだった

「——何度も何度も遊んで、見慣れた場所……だけど……目的をもつて眺めると、また違う感じがするわね……」

「見慣れた島で、新しい発見をするのはいい事じゃないか、それだけライザ自身の感性にも変化があつたつてことだろうし……それより、何の採取を頼まれたか覚えてるよね？」

「——ええ、確か「ナナシ草」つて名前の草だったわよね?」

「ああ、その通りだ、けど今一度説明をしようか——」「ナナシ草」葉の見た目はヨモギに近く、茎を中心に行き対称に葉が生える、この世界のどこにでも生えてる草らしく、あまりにどこでも見かけるがゆえに名を貰えなかつたらしい：故にナナシ草つて名前も通称らしい：幸い見た目が似ている植物の中で毒性を持つものはないらしく、たとえ間違えて採取したとしても安全——」

「——これねつ！採取出来たわよ！カイル!!」

「いや、聞けよ……あ、ああ：ライザ確かにそれはナナシ草だけどそんなに強く握りしめないで…」

「なによ、採れたんだからいいじゃない」

「それが良くないのよ：鍊金術に関することは分からぬけれど、物の鮮度がいいことに越したことはないだろ？——こういう地面から生えている薬草類は地面になるべく

「新しい茎を持ち倒すように折るんだ：そうすると物にダメージを少なくしてとれる：茎の繊維が強くて折れなかつたり、根っこが欲しい場合は周りの土ごと掘り起こして土を払う…」

「ふーん…取り方ひとつとっても色々やり方があるのね…」

「ああ、そうだ、そしてある程度採取したら一纏めにし、切斷面を上にして腰に吊るすと鮮度が長持ちする」

「――？どうして葉っぱが生えてる方を下にするの？普通上に向かつて生えてるんだから上にしちゃだめなの？」

「ああ…切断面を下にしちゃうと草木の水分は早く抜けて行つてしまふんだ、乾燥させて使うにしても一気に乾燥させた方が品質が良くなるからなるべく加工するまでに水分が抜けない持ち方をするんだよ」

「ちょっとしたことだけど…大事なことなのね…うん、わかつた、やつてみる」

そうしてライザはカイルに見守れつつ、ナナシ草を採取していくのであつた

「――それにしてもライザが本当に打ち込めそうなものが見つかりそうで良かった

…」

「なによー、その言い草は」

「これでも本当にライザには昔から感謝してるんだ……悪戯に自分の力でもある魔法を否定して、見えない殻に閉じこもろうとしていた自分を引っ張り出してくれたことは…最近は少しずつ嫌悪感無く魔法も使えてきた…まあ、当時は本当に嫌だつたら、かなり苦々しい思い出でもあるが…」

「ふーん…まだやつぱり魔法が使えないの？」

「ああ、全く使えないわけじゃない、ただイメージが大事な魔法で嫌悪感って言うのはかなり足を引っ張る要素になつてしまふんだ…だから本当に感謝してるんだ、ありがと

う、ライザ

「……変なカイル、採取を教えてもらつてるのはあたしなんだからあたしにお礼を言わせなさいよ……（でも、カイルってどうして対岸に行くように？……あつ、もしかしてお礼のつもりで将来冒険に行つたときに私の助けになれば……とか？――ないか？）」

最後のセリフは心の中で呟いたつもりだつたライザだが、小さく口から洩れており、それが聞こえてしまい、ギョツとした顔をした後、無言になつて真つ赤に俯く一人の少年がいたとか…

「よし！これくらいあればいいかな！――・多分」

「最後のセリフに不安を感じさせるな……まあ、足りなかつたらまた来ればいい」

「うん！アンペルさんのところに戻ろう」

——こうして二人は採取を終え、アンペル、リラの賃家へと戻るのであつた

「——どうだつた、初めての採取は」

「楽しかつたです！今まで気付かなかつただけで、そこら中に面白いものがあるんだ
なーつて!!」

「なるほど、面白いもの…か、それを感じられるなら、あるいは…」

「…なんですか？」

「いや、もつたいぶつてもしようがない、早速ライザの鍊金術士としての素質を試してみ
よう」

「まずは、私のやることを見ていろ」

そう言つてアンペルはライザから受け取つたナナシ草と水を使いおもむろに大鍋へとぶち込んで鍋をかき回す——次の瞬間眩い光とともに鍋に残つていたのは、緑色の不思議な液体であつた——それを試験管へと移しライザに見せるのであつた

「すげー……傍目から見たらただ煮えてる鍋に草ぶち込んだら全く別のものができる……」

「ナナシ草と水を使って、この「中和剤・緑」が出来上がるというわけだ、次は自分でやってみろ」

「ええつ、い、いきなり!? 今見たばかりですよ?」

「この程度なら、見よう見真似でできる、素質さえあればな……」

「そ、それじゃあ……よおしつ! これも……ううん、これがあたしの第一歩なんだ……つ!」

そうして見様見真似でアンペルと同じように鍋へ材料を入れ……次の瞬間——

眩い光と共に先ほどアンペルが作つた「中和剤・緑」が鍋の中で出来てゐるのであつた
「で、できた……どう…でしようか?これで、いいのかな?」

「ふふ、こつちも当たり:いや、こつちこそ本当に「当たり」か」

「——つ!それって、つまり……」

「素質あり、合格だ、お前さんは鍊金術士になれる——いや、もう既に鍊金術士だ、駆
け出しではあるがな」

「おめでとうライザ!」

「やつたあ!これからよろしくお願ひします!先生!!」

「——…残念だが、先生にはなれない」

「えつ…？」

「——私はお前さんに教えられることがほとんどないんだ——私は、怪我で腕を悪くしてていてな、初歩ならともかく纖細さを要求される高度な調合は行えないんだ…」

「そんなあ…折角いろいろ教えてもらえると思ったのに…」

「そう落ち込むな、素質のある人間なら経験を積んでいけば、いくらでも調合のレシピを閃くさ」

「…本當ですか！」

「ああ、とにかく今は數をこなせ、何度も調合して慣れれば、そのうちお前さん自身の鍊金術も見出せるだろう」

「あたし…自身の…鍊金術…つ！」

「私も先生は無理だが、助言者くらいなら務まる、だから気軽に頼れ、敬語もなしでいい」

「分かりました：じゃなくて、わかつた！改めて、これからよろしく、アンペルさん！」

「えつ、いいの!? ありがとう！」

「私にはもういろいろの本だから気にするな、それより載っているものを片つ端から試して、調合になれるんだ——それを一通り調合し終えたら、次はそこの本でレシピが閃くか試してみろ」

「そこの本で：調合のレシピを？」

「ああ、そうだ、専門書以外の本も、鍊金術士の視点で見ることによりレシピを閃くことがある、いわば発想の訓練だ——何の変哲もない物でも、見方を変え、独自な作り方

を体得すれば、それはもう鍊金術なんだ

「この村にも本を売っている店の一つか二つあるだろう?」

「うん、あるよ、ボーデン地区にフレッサさんの雑貨屋が、多分本も売つてたはず」
「なら、そこで適当な本を買って、目を通してみるといい、思いもしない何かが閃くかも
しれんぞ」

「分かった、やつてみる!!」

こうして初めての鍊金術に触れたライザは一旦自分の家へと戻るのであつた

番外編 在りし日の記憶 1

——此れはカイルがクーケン島へ移住した経緯とライザたちと出会った追憶の物語である

オレが…いや、この頃は一人称が違つたな…ボクが魔力、ひいては魔法を自覚したのは6歳位の頃だった、自分の内より出てくる謎の薄紫色の力に夢中になつて、こねくり回し遊んだ

それを最初に気が付いたのは父であるピーターであつた：傍目からは全身から薄紫色の光が淡く出ていたらしい

そこからは大騒ぎだつた、父さんは変な病氣に罹つたのではと方々走り回り、慌てたが一度冷静になると魔力の光ではと考えて近くの魔法を使う人を尋ねた
 「これは確かに魔力ですね…しかし、常に全身から溢れんばかりに垂れ流す量の魔力とは底知れないです…息子さんは将来大魔法師になれるかもしれません…しかし、こんな大量の魔力の制御など、私は教えられない…恥ずかしい話ですが、私の才覚ではあなたの息子を導けない…首都へ移住する気があるのなら魔法院へ一筆いたします」

最初に出会つた魔法士はいい人であつた、自分では対応できないと分かると、より専門的な機関、魔法院を紹介してくれた

現状危険は無いが力であることには変わらないソレを父は周りの為、ひいては息子自身の為、今ある町を出て首都への移住をすぐに決めたのは親の鏡であろう：

そうして首都へ移住したボクは魔法院の戸を叩くのであつた

「魔法院」それは魔力が秀でた者たちで構成される学校のようなもの、卒業後の進路は多岐に渡り、中でも近衛師団や宮廷魔法師は狭き門ながらも一番人気を誇ることもあり、年齢制限は暗黙の了解で無いことになっている、在学期間は通常6年ほどであるが魔法の習熟には個人差があり、学年毎に設定している課題をクリアすると昇級をする：だが、そもそも魔力の天才、秀才でないと入れない魔法院は課題のハードルが高く1年の時を経ずに1つ昇級を行えるものは年に1人2人出ればいい方である

結論から言えばカイルは僅か2年で魔法院の卒業認定を獲得した、当時8歳である、この年は奇しくも妹であるジエナの生まれた年と同じであつた

在学中に出会った魔法の師匠と1人の親友とは未だに手紙のやり取りを定期的にするほど仲が良かつたりするのだが、今はクーケン島へと至る経緯とは大きく関わってこない為、また別の機会に――

――話は戻り、魔法院の卒業認定は同時に一人前の魔法士としての資格を有する、この魔法士の資格で出来ることは首都周辺限定とは言え、かなり多く、例えば「市内での魔法使用の許可」「魔法を用いての商売の許可」「弟子及びそれに類するものを1

人まで有する許可」——簡単に言えば犯罪行為で無ければ無制限の魔法の使用許可である

カイルは年齢的に言えばまだ一般生徒の学び舎で学ぶ年齢だが、それは魔法院を卒業した段階で必要最低限全て履修していた、よつて学び舎へ行かず、人々の役に立ちたいと魔法院のツテで小さな部屋を借り便利屋を始めた：父であるピーターは友達を作らせる為通わせたかったらしいが：

便利屋と言つても当時8歳の子供、体力的に行けるところは少なく、近場限定で「おじいさんの腰を電気魔法で治療した」「迷子になつた子猫を探知魔法で見つけた」「地区の祭りで光魔法を用いて花火を作つた」等可愛らしいものであつた

——そんな愛らしい子供姿で一生懸命に仕事する様は人伝に広まり、評判を呼び、ピーターの勤める出版社でも報じられ一躍刻の人となつた

そんな穏やかな暮らしが約1年ほど続いたある日——悲劇、いや、人の悪意がカイルたちを襲つたのである

——この日はいつもの様に依頼を終え、帰りにお土産でも買おうと大通りを歩いていたカイル、そしてある店の前を通り過ぎようとしたその瞬間、店が爆発、大通りは騒然とするのであつた

当然店の前に居たカイルも無事では済まなく、意識不明の重体となつてしまふ——結論としてはカイルは約一月後に目覚めるし、後遺症もなく済んで終わつた話であつたはずが、人の悪意がカイル一家に牙をむいたのであつた

——父、ピーターがソレを知つたのは爆発のあつた次の日である、息子が謎の爆発に巻き込まれたと知りすぐさま駆け付け、治療院へ運ばれたカイルを朝まで付き添つていた時に朝の号外としてその情報は掲載されていた

——「町で噂の小さな魔法土、魔力暴走により店を吹き飛ばす！負傷者多数！！」——

——「故意によるものか!? 噂の魔法土の癪癩が怪我人を出す！こんな危険人物町に居ていいのか!?」——

——「犯罪者カイル！ 警邏はなぜこいつを捕まえない!? 関係者により分かつた恐るべき陰謀!!」——

——「……何なんだこれは…」

見るに堪えない、根も葉もない憶測であつた

すぐさまピーターは駆け出し事実無根であることを、警邏にも出版社にも直訴した、しかし、当事者かもしれない者の父の発言を眞面目に取り合ってくれる人など皆無であつた、カイルが意識不明なのも間が悪いことに疑いに拍車をかけた

ピーターは記者として、何より父として息子の汚名を雪ぐべく若干グレーな行為をしながらも、息子の疑いを晴らせる程度の真相を突き止めた――

「――故に爆発の発生源は明らかにカイルからではなく、店の中からによるものです！むしろこの事實を公表せずに隠蔽してゐる警邏に汚職の疑いまであります！編集長！今こそこの真実を周知すべきです！」

ピーターの集めた情報は的を射ていた、これで息子の汚名は晴れるものと確信し――

「――そんなもの、わが社の記事に載せるわけないだろう、帰りたまえ」

「――えつ？」

——にべもなく却下された

「——第一、それが真実だとして、それを正としてしまっては、わが社の第一報が誤報だつたと認めるようなものじやないか、それは会社の信用に関わる：悪いことは言わない、帰りたまえ」

ピーターは信じられなかつた、自身が信じてきた記者としての全てを否定されるかのような出来事が目の前で今起こつた——その後も何とか孤軍奮闘するも遂に出版社より自宅謹慎が言い渡され、何もできないまま1月が経つた

そして根も葉もないうわさが町中に浸透した頃、ピーターにとつて久しぶりの吉報が入る——カイルが目を覚ましたのである

ピーターはカイルに事情を説明した

「すまないカイル：父さんが不甲斐ないばかりに…」

「ボクは大丈夫だよ、父さん——今までの依頼で町の人とも仲良くなってるんだ、きつと説明したらわかつてくれるよ」

「ああ、そうだな……妻とジエナも来ているんだ……一緒に帰ろう」

そうして家族で東の間の再開を囁み締めた後、カイル一家は治療院を出た——そしてなぜか人だかりが治療院を囲むように待っていた

「あ……町のみんな……今回の騒動だけど……痛つ……！」

カイルが一言発したその次の瞬間、頭に何か当たった——視線の先、そこには小石が落ちていた

「化物……あたしの娘はまだ意識が戻らないって言うのに……なんであんたが目覚めるのよ……！」

「——なつ……ちがつ!?」

「うるさいっ!! お前のせいだ―――っ!!」

群衆意識か、一度タガが外れた罵詈雑言は止まることなくカイルを攻めたてた、さらには石なども飛んでくる

カイルは自分に向かう悪意はまだ耐えられた…きつと根気よく説得すればわかつてくれる、そう思っていた、しかしカイルに向かつて投げられた小石の一つが逸れ、まだ1歳と幼いジエナへ当たってしまう

――それを見たカイルのナニカが壊れてしまった

「――うわあああああああああああああ!!!」

カイルはそう叫ぶと全身から魔力を迸らせ、その声が一種の魔法と化し周囲に衝撃を与えた

「——ヒツ……ま、また爆発するぞ……に、にげろ……」

その声を筆頭に群衆は蜘蛛の子を散らすように逃げ散るのであつた

「カイル……落ち着いてくれ……俺も、妻も、ジエナも無事だ……っ！」

そうしてピーターはカイルから出る衝撃波に傷つきながらも泣きじやくるカイルを
強く——強く抱きしめた

——カイルが冷静になつた時、目の前には傷つき血だらけの姿、だが、温かく力強
く抱きしめる父の姿が瞳に焼き付いたのであつた

——その後、この件は有耶無耶になり、カイルにはお咎めが何故かなかつた、そ
してカイルが暴走した日より数日後、ピーターが家族に話を切り出した

「前々から薄く、記者としての仕事に疑問を感じていたんだ：そして、取材の中でクーケン島というこの首都から遠く、遠く離れた島に興味をもつて調べていたんだ：——力イロさえよかつたらこの島に移住しよう」

番外編——在りし日の記憶2

——クーケン島へ移住に向かう道中、カイルは自身の異変に気が付いた

「——魔法が……使えない……魔力は練れる、体に循環させる事も……でも魔法として発露が出来ない……」

魔法とは精神に強く影響を受けるものである、例えば目の前に風を吹かせるだけの魔法であつたとしても気分が優れなかつたり、やる気を出さずテキトーに発動した魔法は、万全の状態で行つた魔法の10分の1以下の結果になつたりと極端な違いが出てしまう

結論から言えばカイルは暴走により父を傷つけたという事実を目の当たりにし、「魔法＝誰かを傷付けてしまうもの」と本能に刻み込まれ、魔法に対する嫌悪感が魔法発動の妨げとなつてしまつた、カイル自身が優しすぎる故の事である

カイルはまだ短いとは言え、その人生の約半分を魔法に費やしてきた、そんな魔法が使えなくなつたカイルを誰も責めたりはしなかつた——自身を除いて

最初は自己否定が始まった、こんな自分存在しない方がマシなのではと自己嫌悪も：此処で本来カイルは精神的に壊れてもおかしくは無かつた、それを繋ぎ止めたのは妹であるジエナと皮肉にも首都で体験した人の惡意というもののおかげであつた

カイルが自己嫌悪の海に没してた時、ふとある考えを浮かべた

「（自分が勝手に傷付いて、人の惡意に晒されてもそれは我慢も対応もできる…でも、もし…もし仮にその祖先がジエナやお父さんに向けられたら…？）あの時のように

…」

此処でカイルは考える、自分は守れなくともいいが、家族を守るのは誰だ？と、父はお世辞にも武闘派ではない、母も体が弱く家に引きこもつてはいる、妹はまだ1歳である、そんな中自分も魔法を使えない：――カイルは恐怖した、自身に向けられた惡意が家族に向かい、傷付けて失われてしまつたら…と、最悪の想像をした

カイルは考えて考えて考えて考えて考えて考えて考えて考えて

道端に落ちていた木の枝を棍棒代わりに拾うという結論に達した
「魔法が使えないなら：魔法院に居た時みた、騎士達のように：劍で、己が体で守るし
か無い：つ！」

正直、筋腦の思想である

そこからクーケン島へ着いた後もカイルの日課に劍：この時はまだ木の枝であつた
が、の素振りが日常に追加された、劍のなんたるかも分からず、体の鍛え方も正直魔法

院で遠目に見た騎士達の動きをうろ覚えでまねる程度だが、カイルは我武者羅に続けた、例え手が擦り切れ、豆が割れ、血だらけになろうとも：

そんなカイルを父、ピーターはむしろ止めなかつた、彼は首都でカイルが受けた悪意の大きさを直に知つてゐる、例え今ソレにしか縋るもののが無いとしても、下を俯いていふよりは断然良いに決まつてゐる——だが、それとは別に自身の不甲斐無さに歯を食いしばり、拳を強く握り締めながらカイルを見守るのであつた

こうして一家がクーケン島へと移住した時、カイルは9歳だつた

移住した当初、ピーターの根回しと物珍しさから島の人たちには盛大に歓迎してくれた、大人たちも詳しい事情は知らないが、幼な子が傷付いている事は察してカイルに積極的に話しかけてくれた：だが、カイルはその誰にも心を開かなかつた——家族以外を見るたびに首都で浴びた暴言を、石を投げた人々が頭によぎる、そんな状態で仲良くなるはずもなく次第に孤立していく：たつた1人を除いて

アガーテ・ハーマンはここ一年半程前に首都より戻ってきてクーケン島で護り手をしている才女である、かつて騎士になる為、首都へ行き騎士団養成学校で首席の座も勝ち取るも、同期や、騎士達が実力よりも家柄を尊重し自慢し合うだけの生活に嫌気が差し、ここクーケン島へ帰ってきた——最初の1年は実力を買われとある有力者の息子を護衛していたが、ここ半年は護り手として、家柄、堅苦しい規則等に縛られない充実した生活を送つていた

アガーテが休日のある日、ボーデン地区を歩いてると見慣れない子供が、雑貨屋から錆びた剣を買って魔石の森へと走つていくのを目撃する

そんな子供が体格に比べ重いであろう剣に重心を取られ、フラフラしながら歩く様はあまりに危なつかしく、心配になりこつそり後をつけるのだつた

そして魔石の森で買ったばかりの剣で拙いながらも素振りをする子供の姿を目撃する、しかし身長120cm位の体格に鉄でできた60cm程の剣はかなり重いのかどうにも危なつかしくて見ていられず、思わず声をかける

「——おい、お前、そんなやり方じやいつまで経つても剣は上手くならないし、危ないぞ」

その声が聞こえた子供は一瞬ビックリしたものの無視を決め込み、仏頂面で素振りに

戻る

しかし、やはり無理があつたのか子供の手から剣がすっぽ抜けて、子供自身に向かつて当たるその瞬間、アガーテが助ける

「言わんこつちや無い：素振りするにしてももう少し歳をとつて——」

「——…うるさい、ほつておいて…」

「…酷い言い草だな…お礼ぐらい言つたらどうなんだ…」

その声を聞いたカイルは目を少し大きく開き、一瞬思慮した後、小さな声で呟く

「——…助けてくれて、ありがと…」

「(なんだ、素直にお礼が言えるじや無いか、根は悪い子では無いな)——ああ、どういたしまして…良かつたらここで素振りしている理由を教えてくれないか?今助けたお礼と思つてくれてもいい」

「——…家族を…今度はちゃんと守る為…」

「そう呟く子供の姿を見てアガーテは少し考えを改める、この呟きに込められた覚悟の重さを感じ取ったが故にである——だから、少し助けたくなつた、アガーテ自身も大概なお人好しである

「——そう…か、ならやはりそのやり方ではダメだ、今みたいに剣がすっぽ抜けた先に守りたいものが居たらどうする?」

その発言を聞いて大きく目を見開いた後、子供は目に涙を浮かべる、その姿を見て慌てて言葉を続ける

「あ、いや、すまない…虐めるつもりは無かつたんだ…ただ、その…お前さえ良ければ私が剣を教えてやれる、こう見えて凄腕なんだぞ?」

こうして子供…カイルはアガーテに師事することになつた、この出会いが少しずつカイルの心を癒し、いい方向に向かうきっかけとなるのだつた

番外編——在りし日の記憶3

——カイルがアガーテに師事してから、幾日か過ぎた

その間の主な出来事と言えば、例の鋸びた剣は危ないからアガーテがカイルから取り上げ、ちゃんとした木剣を代わりに渡した、カイルは不満そうだったがアガーテ曰く、この木剣すらまともに振れずに、金属製の剣が振れる訳ないだろうと——見事な正論である、事実この木剣ですらカイルはまともに振れなかつた、剣を振るというのはこんなに大変なのかと再認識したカイルであつた：

——実はこの木剣、こつそり鉄芯が仕込んであり普通の兵士ですら長時間振り続けるのは至難の業であるというオチがつくが、そこはアガーテの策略が見事にハマつたのである

そうしてまた数日後、教えられた通りの型を、拙いながらも剣で振れているカイルにアガーテは関心をする

「基礎は全く出来ていなければだつたが、教える型が今までのカイルの独学と見事に近く、ハマつている…まあ、不思議だが習熟が早いに越した事はない」

こうして順調に来ていた剣の指導だが「技」と言う段階にきて壁にぶつかる事になる——そう、技の発動は魔法の発動と同意義なのである、魔力を用いて望んだ現象を起こす事が技、魔法を用いなければそれはただの振り下ろしや薙ぎ払いに過ぎない——ここにきてカイルはまたも自身が最も否定したい力にぶち当たつたのである

カイルも色々と工夫をしたが魔力と魔法は紙一重ながらも全く別物であり、解決しかつた：例えば魔力を剣に纏わせれば切れ味が上がったりするのではないかと思うがそんな事はない——魔力を剣に纏わせ、そこに切れ味を上げる、剣を硬くすると言った術理を落とし込まないと、ただ魔力の光を放つてピカピカしてるだけの剣になつてしまがあるのである、夜道を照らすカンテラと同じレベルである

なんの解決も無いまま型と素振りの反復練習、アガーテもカイルが魔法を使えないと言ふ理由は聞いていなかつたのが誤解に拍車を掛けた——そう、カイルもカイルでアガーテに魔法が使えない事を説明してなかつたのである

こうした誤解がありながらも今日の指導を終え、帰宅がてら街を練り歩くアガーテはふと呟いてしまう——

「（――それにしても、あそこまで上手く魔力を鍛成、纏わせる事は出来るのに、魔法に変換できないのは不思議だ…しかしカイル…？この名どこかで聞いた気がするが…）」

「まさか…魔法院始まつて以来の魔法の大天才、「雷光のカイル」…か？」

――ここで今一度時系列を確認してみよう、アガーテが首都から出たのが約1年半前、カイルが魔法院を卒業し便利屋を始めたのが約1年前…つまりアガーテが首都から出た時期、カイルは魔法院卒業間近であった、仮にも騎士団養成学校の主席、魔法院の噂の一つ二つは知つている、つまりこの2人、首都でニアピンしていた訳である
さらなる疑問を持ちつつアガーテは帰宅の道に着くのだった

――そのアガーテの呟きを1人の好奇心旺盛な少女が聞いていなければカイルは今でも魔法を全く使えなかつたであろう
「魔法…？未知の予感…？！これは確かめなくちゃ…！」

翌日、カイルはアガーテが護り手の仕事で暫く面倒を見れないと言われており、いつもの魔石の森でひたすら反復練習をしていた、こうして今日もなんの変哲もなく終わら——なかつた

「ああー！いたー！あんたがカイルね!!」

突然声が響いたと思つたらそこに居たのはカイルとほぼ同年代の可愛らしい少女であつた

「——なんなんだよ：君は：ボクは剣の練習で忙しいんだけど…」

「あたし？あたしはライザリン・シュタウト！ライザでいいわよ！——それよりあんた魔法が使えるんだって!?面白そうじやない！あたしに教えなさいよ！」

——なんだこいつ、カイルの第一印象はそれにつきた、いきなり現れたかと思つたら、カイルの急所である魔法に関する事をズケズケと聞いてくる：極端に言つてその楽観的な態度にカイルは嫌悪すら覚えた、しかし、相手は年下であろう女の子、仮にも魔法院を卒業したカイルがめくじらを立てて憤慨するには大人気なさすぎると、なんとか自制心を働かせて律儀に応える

「…………魔法はそんなに良いものじゃないよ……」

「そう？なんか剣をピカピカしてたのとか便利そういうじゃない！お父さんの畠仕事を抜け出す絶好の囮になりそう！」

——見られてた、正直言つてアレ（ピカピカ光る剣）はカイルとつて羞恥の的だつたりする

「それにお母さんに聞いたわよ？魔法つて色んなことができると一つでも便利なモノなんだつて——勿体ぶつてないで教えなさいよー」

「とりあえずボクは絶対に教えないからな、帰つてくれ：」

その後、何度か問答しても埒があかなかつたが、門限に近づいたのか少女は帰つていった、これでようやくまた日々の安寧が訪れ——

「今日も来たわよっ！」

——なかつた

その後も何日も何日も少女に付き纏われた、場所や時間を変えても少女は必ずカイルを見つけ付き纏う——少女も少女で会話のタイミングがうまく、初っ端から魔法に関する事を聞くだけでなく、最初は当たり障りのない世間話やら噂話を一方的にしていくものだから、数日後にはカイルも少女の話を捌きながらも剣の稽古を行えるようになつたしかし、ある日、いつもの魔石の森にて剣の進捗が全く進まなかつたり、少女に付き纏われたりと少しイライラしていた日

「あんたも、飽きないわね……毎日毎日剣の素振りばかり……」

「——カイルだ……カイル・シュナイダー、ボクの名前だ」

「あつ、やつと自己紹介したわね、あたしはライザでいいわよカイル」

——ライザはなんでそんなに魔法にこだわるの?」

「だつてなんでも出来るつて素敵な事じやない！あたしね、将来冒険をしたくて！村の連中が行つたことないどこに行つたり、未知の生物を見つけたり！その時に色々出来ることが多かつたりしたら——」

「——魔法はそんなキレイでステキなモノじやないツツ！——誰かを傷つける事しかできない危ない力なんだっ!!」

一度堰を切つて吐き出した言葉は止まらなかつた

「ライザ！お前にわかるのか！ボクの力が大切なモノを傷つけた瞬間の感触つ……今まで夢にでてくる！ボクを散々スゴイと言つてくれた人たちが憎惡の目で見てくるこの力……つ！こんなモノ……こんなモノ無い方が……！」

「——でも、それもカイル自身の力なんでしょう？そりゃあ否定したら、力にだつてカイルを否定されちやうわよ」

「——…ツツ！お前に何がつ！」

「ここでいくつかの不幸が重なつた、魔石の森と言う場所であつたこと、その場所の名

の通り、魔石があちこちに生えている、また何時ぞや話したみたいに魔法は精神の状態に強く影響を受けると、そしてカイルが魔法を使えなくなつたとは言え保有する魔力量は常人のソレと異なり、かなりの量を有すると言うこと：

結果、ライザの頭上にあつた魔石がカイルの強く荒んだ感情に共鳴して小さな爆発を起こし、落ちてくる——つまり大きな魔石の塊がライザに襲い掛かつたのである

——ライザを対面で見ていたカイルはその光景がスローでよく見えた、また自分がこの現象を起こしたという事をなんとなく理解した

——また…またボクの魔法で人を傷つけるのか…また、ボクの暴走が原因で…！

カイルの目にはあの時、自身の魔法で傷付けた父であるピーターとライザが重なる——今から駆け出してももう間に合わない、ライザと魔石の距離は50cmも離れていない

——ダメだ…っ！それだけはダメだ！何のために剣を取つてアガーテさんに師事したと…！もう誰も傷つけない為だろう…っ！守る…っ！守る為だろうカイルツツ！

——ダメだ！ダメだ！ダメだ！ダメだ！ダメだ！——助けるっ!!!!!!

——魔法は精神に強く影響を受ける：故にカイルの原初の願い、誰かを助けたい、役に立ちたいという想いは本能に刻まれた嫌悪感を超えソレは遂に成る

——木剣に宿る眩い光を携え、カイルが目に迫えない程の速度でライザに迫つていた魔石を切り裂く、その後に響く轟音——まさに「雷光」

——その技はアガーテより教えられていた最初の技であつた——「スラッシュユ」自身の魔力特性を剣と体に乗せ対象を切り裂くという至極単純ながらも個性が出る技である

——カイルの魔力特性は「雷」その特性が乗つたスラッシュユの効果は超加速であつた

「……ハア・ハア・だから言つただろう…ボクの魔法は人を傷つける事しか出来ないって…」

「——すごい…すごいよカイル！」

「——つ、人の話を聞いてたか？ボクの魔法は傷つけることしか——
——でも、あたしを助けてくれたのもカイルの魔法でしよう？」

「——つ!!!——でも…」

「男なのにみみつちいわね！」

「みみつ!？」

「じゃあ、あたしがあんたを責めるわ！——申し訳ないとと思うんなら、カイル！あんたあたしの冒険に付き合いなさい！そこで存分にこき使つてあげる！約束よつ!!!」

——ある意味それは幼さがなせる傲慢な、人の弱みに漬け込んでの物言いでもあつたかもしれない、しかし、カイルにとつてその言葉は心の奥底で待ち望んでいた言葉であつた

——カイルは短いと言え人生の約半分を魔法に費やしてきた——この言葉は正確ではない、正確に言うのであれば、カイルは魔法のみに捧げた時間が数年もあつた：そんな中、家族は魔法が使えなくなつたカイルを責めない——逆に言えば魔法が使えたカイルを不要と言つているのではないか、勿論そんなことはあり得ない、ただのカイルの被害妄想だ

——しかし当時のカイルにとつては違う、責めて欲しかつた：カイルの原初の願い、それは人を助けたい、人の役に立ちたい、それは言い換えれば人に求められたいといふもの、故に魔法が使えないカイルなど、と罵つて欲しかつた、自分が必要とされると言う実感が欲しかつた

——そして、目の前の少女にその願望を、カイルを救うに必要であつた単語全てを内包する言葉を言つてもらえた

「じゃあ、あたしがあんたを責めるわ！——申し訳ないとと思うんなら、カイル！あんた

あたしの冒険に付き合いなさい！そこで存分にこき使つてあげる！約束よつ！！

——その日を境にカイルの一人称は「ボク」から「オレ」へと変わった、これはカイルなりの心のケジメであつた、未だに一部の魔法は使えないままだ、完全に心の整理が出来たわけではない、しかし幼き少女との約束を守る為、カイルは日々努力を重ねる——

——そして時間はライザがナナシ草を採取してカイルが顔を真つ赤にして

俯かせてる場面へ戻る

「（　）まあ、ライザはあの時の約束を忘れているかもしれないが……だが、オレは覚えて
いる、だから改めてありがとうライザ「ボク」は君に救われた」

番外編 在りし日の記憶 完

レシピ1——爆粉うに

賃家を出た二人はアンペルに貰つた道具を抱えつつ、ライザの家に向かうこと

「それにもしてもライザ、家に戻るのはいいとしても、鍊金術はどうやつて練習する気なんだい?——オレはてつきりあそこにあつたやつを貸してもらつてやるのだと……」

「あー……それね、流石にアンペルさんにおんぶにだっこは申し訳ないというか……」

「ライザが遠慮を覚えた……だ…とつ!？」

「……どういう意味よ?——まあ、いいわ話を戻すわよ、あの屋根裏部屋で練習出来たら理想的だなつて……アンペルさんに聞いたら鍊金術に使うの大鍋、特に特殊な物じやなくて単に火にかけられるのと、ある程度の大きさが確保出来てればいいらしくて」

「ふーん…不思議なものだな…オレには料理の煮込みと鍊金術の違いが分からねーや…んで、その大鍋にアテはあるの?」

「それなんだけどね、うちで昔に使つてた大鍋が確かまだ倉庫に転がつてたような気がしたのよね…それを屋根裏部屋までもつていこうかなって」

「一応聞いておこうかな…その大鍋、誰が運ぶんだい?」

「…頼りにしてるわよっ!」

「――…ですよねー…」

「これで大鍋の解決はしたからいいけど、まだ何個か問題があるわね…アンペルさんがもう使つてないからつて、採取の際に使う水筒やら瓶とかもらつたけど、鍊金術で作つた後の道具とかを入れる鞄も欲しいし…あと試験管とかも、さつきの中和剤みたいな液状のものを入れられる瓶とかも必須よね…」

「——それならフレツツさんの雑貨屋によつて買つて帰ろう」

「え？でも私お金そんなに持つてないわよ？――今月のお小遣いも、もう少ないし…」

「そこは気にしないでくれ、オレが代わりに出そう——これでも漁師さんの手伝いや
ら、薬草採取で結構儲けてるんだよ?」

「そ、それは流石に悪いわよ…」

「ふふ、そんなに氣後れするなら出世払いでもいいぞ？」

「…あたしのお小遣いしばらくなくなつちやうけど背に腹は代えられないかあ…」

「それに鍊金術で何か便利な物とか作つたら、村のみんなが買つてくれたりするんじやないか？少なくとも、うちの父さんは物珍しさから何か買うと思うぞ？」

「なるほどー…その手がありましたか、でもまだ何も作つてないし、売つてもないからお

金は増えないんだけど……カイル、悪いけど貸してちょうだい、必ず返すから！」

「ああ、返金は気長に待つてるよ」

——そんな会話をしつつも雑貨屋で買い物してからライザの家に帰宅する

「…………んで、この大きな鍋を、屋根裏部屋まで運べと……いや、デカすぎないかこれ、何に使つてたんだよ……」

「あははー……確かに大きいわね、記憶だとお父さんが麦種の選別とかに使っていたはずだけど……なぜか昔から家にあるのよね、なんでもお父さんのおじいちゃんのおじいちゃんのまたそのおじいちゃんからずつと家にあって、不思議と劣化もしないし代々使つてたけど、流石に重いとかでお役御免になつたとか……一応家に代々伝わるものだから捨てるのも忍びないとかなんとか……」

「……とりあえず運びますか」

——そうして暫くしてようやく、部屋の改装が終わるのだつた
屋根裏部屋の一一番奥、そこには小さいがらも火をくべる竈、その上に先ほどの大鍋が
据えてある、大鍋の左右は開けており、作業がしやすく壁には鍋の中をかき回す用か、
オールのようなものが立てかけられている、さらに左右には棚に所狭しと瓶やら試験管
やら…

「……れ、ミオさんに見つかつたら怒られないよな?」

「大丈夫よ! 普段お母さん入つてこないし」

そんな中、部屋にレントとタオが入つて来る

「よう、來たぜー、態々呼び出して何の用だー?」

「ふつふつふ…つ! レント君、タオ君! 我がアトリエへようこそ!」

「はあ?」「このセリフがやりたかつたらしい…暫く付き合つてやつてくれ」「アトリエつ

てどういう…つて、何このデカい…鍋？」

「アンペルさんに、鍊金術士として最初にやるべきことを色々と教わったんだ」

「それがこの…鍋？こんなのどこから持つてきたのさ」

「鍋じやなくて…いや、まあ、家にあつた鍋だけど…——鍊金釜！まず何よりもこれが無いと始まらないからね！」

「で、そのアトリエ？つてのはなんなんだよ？」

「鍊金術の研究室よ！これからここで、バリバリ調合しまくるの！」

「なるほど、要するに鍊金術士っぽいことを始めたと…カイルもよく手伝つたな…」

「前々から思つてたけど、カイルつてライザに甘いよね…」

「そ、 そ う か … ?」

「えー…一人とも、反応薄くない?――もうすこしこう…感動とか感心とかしてくれてもいいじやない」

「俺たちも俺たちで忙しくなつてんの、そういうテンションに付き合う余裕もねーんだよ」

「そうそう、僕もアンペルさんに本の読み方の初歩を教わってるんだ」

「ふーん…みんなやる…」ことが見つかったんだ、私も負けられないな…――よしつ！まずはアンペルさんに貰った本に書いてあるものを一通り全部作ってみよう！」

「それじゃあ、僕は家に帰るからね？書庫で本を探さないと…」

「俺も家に戻つて、リラさんに言われたことの続きでもするか…カイルもいいところで切り上げないといつまでも突き合わされるぞー」

「オレはなあ・暫く漁の手伝いもないしなあ・暇と言えば暇だし、もう少し手伝うよ、レントとタオもなんか人手が必要なら是非呼んでくれ」

「え? いいの?――じゃあ今度本の整理手伝つてよ、僕の身長じやめんどくさい所もあるんだ」

「お? じやあ俺も今度剣の相手してくれ、普段なかなか相手できなかからな」

「ああ、呼んでくれ」

「ちょっとー・あたしも手伝つてほしい事沢山あるんだから」

そうしてレントとタオが帰つた後、改めてライザは呟くのであつた

「よし! じやあ早速作つてみよう、材料は…うん! 近場で取れそー! 早速行くわよー!」

そうして家を出たライザとカイル

「それで目的地はどこなんだ？——さすがにこの時間から対岸に行くのはつらいぞ？」

「い、よつ！」

「——え？ つて隣に生えてるウニの木じゃねーか：」

「なんでもこのウニが必要らしいのよ、あとカイル、木の上にハチの巣があるでしょ？」
「ああ……あるな——おい、まさか……」

「うんつ！ お願いつ！」

「眩いばかりの笑顔で言いやがつて……いや、確かに薬草採取とかする時に妹にせがまれてハチミツとか採取したことあるけどよ……」

「え？ そんな話聞いたことないんだけど……今度あたしの分もお願い」

「やつべ、余計な事言つちまつた……まあ、やるか」

そう言うとカイルは腰にあるポーチから何かを取り出すると火打石で火をつけ始めた
「あたしがお願ひした手前、アレなんだけど……どうやつてとるの？——こう木を杖と
か棒でえいつ！ って取れないの？」

「いや、確かにそれで落ちてくるかも知れないけど、落ちた衝撃でつぶれるし、蜂に襲わ
れたいなら止はしないが……」

「うえつ……確かにそれはイヤね……それでその取り出したのは？」

「これは木の皮を乾かして丸めたものだよ、こうして火をつけると……ほら」

そういうと火をつけた先に煙がモクモクと立ち込め、それを巣に近づける

「わつ、びっくりした…」

「虫はこうやつて煙で燻すと動きが止まつたり、採取したい物から離れるんだ——よし、そろそろいいかな——ほら、ハチの巣だ、それをそのまま食べてもおいしいぞ」
「うつ…それはそれで気になる…うー…ダメダメ！これは鍊金術の材料にするんだからつ！」

「——そういうと思つてもう一個採つておいたぞ」

「カイルつ、大好きつ！」

「…現金な奴め…」

そう言つて蜜房に満面の笑みで齧り付くライザを尻目に、真つ赤な顔の少年がいたと

かなんとか…

——そして再び屋根裏部屋に帰ってきた二人

「にしても、ウニとハチの巣だけで足りるのか？」

「うん、最低限必要なものがコレ見たい、性能を上げたかつたり出来栄えを良くしたりするにはもう少し色々要るみたいだけど、最初だから最低限の材料でやってみようかなつて…」

「ライザにしては懸命だな…」

「ちよつと、聞こえてるわよ——さあ、早速やってみるわ!」

そうして鍋——鍊金釜に材料であるハチの巣とウニを投げ込み、混ぜ始めたライザ
——暫くして

「——できたつ!」

鍋の中には茶色い袋に鈍色に光るトゲが生えた物体であつた

「——ナニコレ?」

「あつ、いけない、まだこれじや完成じやないみたい:——ちよつとそこにあるリボン
を取つて」

「あ、 そうだよな……」 こんな謎物質で終わらないよな……まだ途中だよな……はい、 リボン」

「ありがとう!――これを、 こうして……はいつ! 今度こそ出来た!」

そこには茶色い袋に鈍色に光るトゲが生え、 そして可愛らしくリボンが蝶々結びであしらわれた物体があつた

「おい、 変わってねーじゃねーか……ナニコレ?」

「なんでも可愛らしさが大事つて書いてあるわよ?」

「いや、 それはいいんだけど……で、 結局何なんだこれは……」

「さあ……?」

「さあ? つて……分かつて作つたんじゃないのか……」

「何個かレシピが載つてるので説明が書いてないのよねえ……もう何個かレシピがあるし明日もう一個作つたらアンペルさんに聞きに行こうかなって……」

「なるほど?——なんかもう既に幸先が不安になつてきただぞ……?」

そうして不安げなカイルを尻目に、嬉しそうにライザは謎物質を掲げている——そして今日は解散するのであつた

レシピ2——グラスビーンズ

——次の日の朝早く、カイルは昨日「朝早くに家の前で」とライザに言われその通りに家の前で待っていた

「さて…今日も烟を——ん? カイル君じやないか、こんな朝早くからどうしたんだい?」

「——あつ、カールさん、おはようございます——ちょっととライザに呼ばれて…」

「娘がこんなに朝早くから? デートするにしてももう少しゆつたりでもいいだろうに」

「つ!? 違いますつ!」

「ははつ…冗談だよカイル君——何かと最近娘が苦労を掛けているみたいだね?」

「いえ、そんなことは——」

「無理して取り繕わなくても大丈夫だよ、どの道娘は行く先々で苦労を掛けるだろう?」

「それは…まあ、そうですね」

「誰に似たのか、いや?母さんにかな?お転婆娘になつたものだよ——ライザが烟仕事を抜け出すにしても、ちゃんとした何か目標を持つたみたいで安心してるんだ」

「え?あれって態と抜け出すようにしてたんですか…?」

「母さんと娘には内緒だよ?ライザには無理してまで私の烟を引き継いで貰いたいわけじゃないんだ、もちろん喜んで引き継いでくれるというなら渡す気ではあるが」

「え?烟好きのカールさんならてつきり——」

「何事も無理強いはよくない——それに、ライザには若い内に色々と経験して貰い

たいんだ、私は毎日畠の世話をすることは大事だと説くけど、それと同じようにサボる事も大事だと思つてゐるんだよ？自分なりの息抜きこそ、長く続ける秘訣さ……まあ私は畠を弄る事そのものが息抜きになつてしまつてゐるんだがね』

「…………カールさんは大人ですね……」

「いいや、私こそ子供だとも――そしてある意味ではライザも同じようになつて欲しいと願つてゐるがね』

そんな会話をしていると家からライザの声が聞こえてきた

「おつと……私は娘に会う前に行くとするかね、今会つてしまふと畠仕事へ誘わないといけなくなつてしまふ、ではカイル君、娘を頼んだよ』

そういうとカールは速足で畠に向かうのだった

「カールさんは凄いな……』

「——お待たせカイル!——ん?どうかしたの」

「——いいや、何でもないさ、ただ大人はカツコいいなつて…」

「何よそれ:変なカイル」

「——それで、今日はまた何でこんなに早く呼び出したんだい?」

「そうつ!対岸に行くわよ!」

「唐突だな:ちなみに目的は?」

「そりやもちろん鍊金術に使う材料の為よ、昨日もう一個作るつて言つたでしょ?なんでも薬の材料になる物が必要らしいのよ、カイルあんた薬草とか対岸によく取りに行つてたでしょ?その場所まで連れて行つてほしくて」

「薬の材料…？それって何でもいいのか？」

「うん、薬の材料となる何かと花が必要らしくて…」

「そこ」に生えてるぞ」

「えつ？」

「いや、何でもいいならそこに生えてるぞ、薬の材料——この白い小さな花が蒲公英みたいに生えるこれ「トーン」と言つて所謂万能薬に近いものだよ…と言つても薬効は薄いから常用の飲み薬とかになつたりする程度だが」

「あとは隣に生えてるこの赤い花…これもそうだな「病忘れの花」と言つてこつちも風邪の予防とかによく使われる、名前通り薬の材料になつたりする、それに花が必要ならこれでもいいのでは？」

「――…揃つちゃつたわね…」

「——それでこんなに朝早くから呼ばれた意味は…?」

「——無いわね…」

「…」「…」

そうして二人は目の前にある花を採取したら家へとトボトボと入っていくのであつた：

場所は変わつて屋根裏部屋

「——氣を取り直して作るわよつ！」

「次回から、どこに行くにしても必要なものを先に言つてくれ…」

「そ、こ、つ、うるさい！…まあ、悪かつたとは思つてるわよ?」

「朝早く起きるのなんて、漁で慣れてるからいいけどさ…」

「あたしも正直家の前だけで材料が完結するとは思ってなかつたのよ…」

そんなことをぼやきつつ、鍊金を始めるライザ——そして眩い光が鍊金釜から立ち上がる

「——できた…つて…ん？これどこかで見たことあるような…」

鍊金釜の中には、大きさは1 cmもないであろう小さな緑色の丸い粒が何個か入つていた

「——ん？これってグラスピーンズか？匂いもほぼ一緒だし…」

「グラスピーンズ？」

「え？小さなころ、病気になると食べなかつたか？——このクーケン島ではこのよう

に薬草類を煎じて丸薬状にしたもののが総称がグラスピーンズだと思ったが」

「ああ、あのあまり美味しくないお薬…」

「美味しくないって…薬で美味しい方が稀だぞ？」

「いつか鍊金術で美味しい薬も作つてやりますよーだ…」

「それは期待してるよ、オレが普段持ち歩いている傷薬も苦いんだ…——それでこれからどうする？」

「んー…とりあえず昨日作ったこのトゲトゲが何かよく分からないし、アンペルさんに聞いてみようかなつて…あたしの鍊金術士の感では危ない物なんだけど」

「いや、トゲトゲしてる時点での危ないものの確定だろ…——まあ、ここまで来たからには付き合うよ」

そうして二人は賃家へと向かうのであつた

「アンペルさん！本に載つてたもの作つてきたよ！」

「お邪魔します、アンペルさん、リラさん——あ、これ引つ越しというか移住祝い？で
すけどドーナツ買つてきましたんで、良かつたら食べてください」

「——なにつ!? ドーナツだと!!」

「うわっ!? …びっくりした、え、ええ、良かつたら食べてください…」

そんな男たちの会話を見つつライザが小声で質問をする

「リラさん、なんでアンペルさんあんなにがつついているんですか？」

「ああ、アンペルの奴、ああ見えて大の甘いもの好きでな…目の前に甘いものがあると何
をしてても放り出して噛り付くんだ…あまりに甘い物しか食べなくなつたりすると私
から禁止令を出したりもする…」

「うわあ……あたしも好きだけどそこまでじゃ……じゃあ、カイルのヤツがハチミツとかよく採取してるとの知つたら…」

「…………その情報は、アンペルには言わないように頼む、煩くなつてかなわない」

「つて違う違う！アンペルさん！コレ作つてきましたよ！」

「…………ん？おつとすまない、少し取り乱した」

「あれが少し？」「突つ込んでやるな」

「うおっほんつ！――ほう、早速作つてきたか、感心感心」

「それで作つてきたのはいいんだけど……このトゲトゲしたのつて何？こつちのグラスピーンズは分かるんだけど」

「ほう、クーケン島ではグラスピーンズというのか、確かに薬草類を丸薬にするところのよ

うな見た目になりやすいようだが、鍊金術で作った場合、普通に作るよりも効果が高くなりやすいから気を付ける」

「そしてこっちのトゲトゲしているのは「爆粉うに」だな」

「ばくふんうに？」

「なんかもう用途が分かつた気がするぞ……」

「ああ、これを魔物に向かって投げつけると、衝撃が加わった瞬間中で弾けて周りのトゲが飛び散り、ダメージを与えるっていうものだな——両方とも冒険で役に立つ道具だ」

「予想以上におつかないもの持ち歩いていたな……」

「——ひよつとして、あたしたちを助けてくれた時の爆発も？」

「そう、あれも鍊金術で作った爆弾の一つだ、あののような道具があれば、冒険の安全性も

「一気に高まる」

「つ!!——じゃあ、あたしもジャンジャン爆弾を投げつけて大活躍できるつ!?」

「おい、待て、バカ、そんな味方を巻き込みそなこと——」

「それも出来なくはないが——そうだな、これを渡しておこう」

そう言つてアンペルが取り出したのは、一方だけが長い四角錐、透明なガラス状のもので出来てゐるのか平面側の文様が見える、その文様は中心で十字を描いてゐる、それをカイルたちの人数分手渡してくる

「——これは?」

「コアクリスタル、という——お前が作つた薬や爆弾は使つたら当然なくなるよな?」

「は? そりや、使つたら無くなるのは当然でしょ」

「ところが、だな…まずこのコアクリスタルの中に鍊金術で作った道具を入れる」

「え？ 入らないでしょ…」

「まあ、聞け、これはある意味異次元の様になつていてだな、かなりの大きさの物でも入
れることができる」

「そしてこの道具が入つたコアクリスタルを武器等に組み込んで、武器を一振りすれば、
コアクリスタルの力が解放される」

「解放されると…？」

「コアクリスタルに入れた道具を失うことなく、同じ効果が得られるというわけだ、全く
のノーリスクってわけではないが」

「はあ？ なんだそのインチキ…」

「ええっ!? そんな、魔法みたいなことが…」

「いや、ライザ、魔法はそんなことできんぞ…」

「そんなインチキができてしまうのが、この「古式秘具」コアクリスタルの力なんだ」

「古式…秘具?」

「大昔の凄い道具程度に覚えておけばいい」

「いや、凄いじや説明つかないんだが…」

「そういうものだと諦めろ——まあ、結論としては、これさえあれば作った道具が失わ
れずに何度も使える」

「使い方を説明しておこう、このコアクリスタルに道具を1つでも入れると10個の光
が浮かび上がる、これがエネルギー残量と言えるものだ」

「エネルギー?」

「ああ、全くのノーリスクとはいかないといつただろう? 道具の強さによって、このエネルギーの消費量が変わつてくるのだが、エネルギーがなくなれば、当然中に登録していた道具も使えなくなる」

「え? ジゃあそのエネルギーが無くなるたびにコアクリスタルを新しくしないといけないの?」

「そうではない、最大で4つ道具を入れれるのだが、そのどれか一つを選択して、失う代わりにエネルギーがまた10個まで戻るのだ、これをコンバートと呼んでいる」

「ああ、ノーリスクじゃないってそういう…」

「これが不思議なことに、鍊金術で作つた道具なら何をコンバートしても10まで戻るんだ、だから鍊金術で思つた効果が出なかつたりした失敗作等を1個枠として埋めておくといい」

「なるほど……最大で4つってのは?」

「ああ、これまた不思議なことに、コアクリスタルは持つ人によって入れれる道具の数が変わつて来るんだ、鍊金術の才能に比例すると通説では言われているが定かではない」

「うえつ!? ジャオオレは一つも入れれないんじや……」

「安心しろ、最低でも1つは使えるとどの文献でも言つてゐる——まあ一つしか使えないからコンバートできないのだが……」

「無限に使えるが最大の利点なのに、折角使える道具をコンバートしたら意味ないですもんね……」

「まあ、そうしよげるな、一度使える道具を外してから、要らない道具をコンバートすればまた使えるようになる、少し手間だがな」

「そんなにすごい道具、あたしたち人数分も貰っちゃっていいの？」

「なに、これは古式秘具の中でも比較的多く見つかる、余っていたものを分けてやるだけだから気にするな」

「じゃあ、遠慮なく…ありがとう、早速使ってみるね」

「ああ、後これも持つていけ」

「これは…箱？」

そう見つめる先にはザ・宝箱と言わんばかりの箱があつた

「ああ、これも古式秘具でな、単に「収納箱」と呼ばれている、効果としては中に入れれた材料や道具がほぼ劣化しないで保存されるという代物だ、容量もすごいぞ、昔に実験で川にこれを投げ入れたら川を飲み干したという逸話があるくらいにはな…」

「またなんつーインチキ：」

「それに劣化しないだけじゃなく、入れた瞬間のまま保存される——つまり出来立てであつたかい料理を入れると、数時間後にもあつたかいままの料理が取り出せる、といふわけだ」

「これもよく見つかるんですか？」

「あ、いや、すまないこれは古式秘具の中では割とレアな方でな、私もお前に渡す分の予備しかないのだ」

「そんな貴重な物…」

「なに、古い鍊金術士から新しい鍊金術士への餞別だと思つてくれ、それに鍊金術の材料を集め始めたらどんどん積みあがつて、部屋なぞすぐ埋まつてしまふぞ？それでも要らないか？」

「い、いえ！ありがたく使わせてもらいますっ！」

「ああ、それでいい——では早速、爆粉うにでも使つてくるがいい、何事も経験だ」

——そう言つてライザたちを見送アンペルとリラであつた

爆粉うにの実力

——賃家を出た二人は「爆粉うに」を試すべく歩き始める

「結局、対岸に行くことになつたな…」

「そうね…まあ、行つて戻つてまた行くよりはましだと思つてちようだい」

「それもそだな…一人だけで行くのか？」

「うーん…昨日の様子だとレントもタオも忙しそうだつたし…」

「オレは忙しくないってか…」

「…そういう意味じゃないわよ?——カイルならあたしが困つてたら絶対に手伝つてくれるかなーって…」

「……またなんとも厚い信頼だ」と…そこまで言われたら断れないな…」

「もちろん、あたしだけじゃなくて、レントやタオが困つても助けてくれるでしょ?」
——カイルは優しすぎるもの

「…ほんと、厚い信頼だこと…（面と向かってすぐそういうこと言うから、この島の人は全員ある意味で苦手だ…）」

「――さあつーぐずぐずしてないで行くわよ!」

「――仰せのままに」

— そうして対岸の船着き場に着いた二人

「——さて、今日はどこに行くんだ？また妖精の森か？」

「…………んー……、今回は爆粉うにを試したいだけだし、あんなことあつた手前すぐにまた妖精の森に行くのはちよつと…………こつちの正面に抜ける道は?」

た こう言つてライザは船着き場を正面に見据えて、少し左奥のちよつとした洞窟をさし

「ああ、あそこは旅人の道、中央ライム高原への街道に続く道だよ」

「高原まで出ないで、手前までなら私でも対応出来ると思う…？」

「ああ、大丈夫だと思う、ライム高原まで抜けなければライザでも対応できると思う

「じゃあ、新しい素材を探しながら行つてみましょう！」

そうして街道へと向かうのであつた

「——あ、そこの足元の白い砂「白灰砂」って言われるものだぞ、鍊金で使えるんじやないか？」

「ええつ!? さ、採取しなきや!! ——あつーこつちの石は何かに使えないかな!?」
「…鍊金術士つて忙しいな…」

——いきなり足を止めつつ、歩みを進め、ふと視界が開ける——まぶしい晴天に真っ白な雲、キラキラ輝いているようにすら見える、正面には街道が奥まで続き、左右は広く開け、木々がところどころ生い茂つている

「わあ……すごい！これが憧れてた島の外…っ！——見たことない物が沢山っ！」

「今日はこここの周辺で試してみよう、幸いそんなに強い魔物は居ないし、ここなら視界も開けてるからヤバそうな奴が来たらすぐに逃げられる」

「うん、魔物には注意しないとね：それはそうとやつぱり初めて見るものがいっぱいで感動だよっ！」

「——感動しているところ悪いけど、早速無粋なお客さんだつ！」

そうカイルがつぶやいた目の前には、小さいながらも僅かに竜を思わせる灰色の体
軀、羽ばたく姿はこちらを獲物だと思っているのか…

「こいつは…竜…？」

「こいつは翼竜に分類される中型の魔物だ！近接攻撃は最悪空に飛ばれて避けられるから気を付ける！——いや、今回はコアクリスタルの試し撃ちだつたな、オレが囮にな

るから上手く当ててくれ！」

そう言うとカイルは翼竜——「ミニワイバーン」の攻撃を危なげなく捌く
そんなのらりくらりと躲すカイルに魔物は焦れたのか、大振りの攻撃で仕留めにかかる、その爪がカイルの剣に触れた瞬間光が弾ける——予想外の衝撃に思わず仰け反る魔物、その瞬間を逃す二人ではなかつた

「——カウンターライトニングツ！——ライザつ！」

「カイル下がつて！食らいなさい！」

そうしてライザの武器から爆粉ウニが飛び出し魔物に触れる…ポンツつという軽い音、それに反して効果はえげつなかった——軽い音と共にウニのトゲが辺り一面に飛び散り、それをもろに食らつたミニワイバーンは翼膜をずたずたに穴をあけ、もう飛べそうもない…決着はついた

「うわあ…何あれ…えげつない…」

「…正直私もこんなにえげつないものだとと思わなかつたわ…——ちなみにコレ、最低限の材料で作つた物だから、性能も何もかも最低限なんだけど…」

「おおう…鍊金術つて凄いやら怖いやら…」

「——そういえばカイル、魔法は使つて大丈夫だつたの？」

「ん？ああ、こちらからダメージを与えるものは、まだ発動率的にもきついが、カウンターとかの受け身なら問題ない」

「ならどんどん頼らせてもらおうかな」

「おう、どんとこい——おつと魔物から取れる素材も鍊金術で使えるんだろう？取らせてもらおう」

——そうしてひと段落してから採取に戻る二人、その後、アマタイト鉱、セキ

ネツ鉱、陽気な蜜花、セイタカトーン、アブラ木の実、苦い根っこ等を採取する、また合間に縁ぶにとかの魔物に襲われるが、ここでも爆粉うにが大活躍をし、難なく倒した

「あつ…コアクリスタルのエネルギーが無くなちゃつた…」

「まあ、試すつて言うには十分過ぎる程、使ったもんな、それに素材の方もいっぱいだ」と…

「あれより更にすぐくなるのか…見てみたいやら、見てみたくないやら…――今度はレンントとタオも連れて冒険にこよう」

「うん！」

「さあ、そろそろ潮時だ、日も暮れ始める、帰ろうライザ」

そうして2人は小さなボートでクーケン島へと帰還するのだつた

「——それにしても、このボートに乗っている時間、少し勿体無いわね：今度釣竿でも持つてこようかな？」

「あー：多分全く釣れないと思うぞ？」

「どうしてよ？」

「こういう小舟で移動してる時はオールが結構水中で音を立ててな？漕ぎながらだと魚が逃げていってしまうんだ、時間を有効活用しようとして、船を一々止めてたら本末転倒だろ？」

「なるほど、流石漁師のお手伝いをしてる人の言ふことは参考になるわね：それにしても暇だわ…」

「…そのセリフ、レントが漕いでる時に言ってやるなよ…」

そうして今度こそライザたちは島へと帰還するのだつた

レントの頼み

——ライザとカイルが冒険をした日より、数日が経過した、この間の日々はライザは新しい素材に夢中になり、鍊金術を何回も行うことで少しでも慣れようとしていた、レントはリラに戦士の教えを学ぶ日々を、タオはアンペルより古代の文字の読み方の触りを、カイルはそんな3人が人手が足りない時に手を貸して過ごした

——今日は久しぶりに、4人とも朝早くからライザの家の屋根裏部屋に集まつていた、こここのところ各々忙しく、集まつたのは本当に久しぶりである

そんな中、部屋に入つて来るなり、ある一方を見つめるレントとタオが思わずといった風につぶやく

「——…部屋に入つていきなりなんだけどよ…アレはなんだ?」

「うん、僕も気になるかな…不本意ながら…」

そう二人が見つめる先には、人の背丈ほども大量に積み上げられた「爆粉うに」の姿があつた

「ああ…あれな…なんか知らんが鍊金術が楽しくなつて、いつの間にかああなつてたらしい…正直、ちよつとの刺激であれが大爆発しないかオレは不安でしようがないんだが…」

「こんなに作つてどうするんだ？前にカイルから聞いたが、結構えげつないつて聞いたぞ、戦争でも始める気か？」

「ライザのことだから、僕はいつか汽水湖全部を干上がらせるためとか言つても信じられるよ」

「おい、それはやめてくれ、生活に響く…」

「なによう…そんなに言わなくてもいいじやない…使う材料が同じでも、でき上る個数が増えたり、トゲがおつきくなつたり、爆発した時の爆発力が上がつたりつてすごーく、

すつづごく楽しいんだもんっ！」

「だもんつて…」

「ライザつて普段子供なのに、時折すこく子供になるよね…」

「まあそれはいいんだが、どうして出しつ放しでああなるんだ？ 確か収納箱とか言う便利な物貰つたとか言つてたよな、そこに入れればいいんじやねーか？」

「うー…あたしも最初はそうしてたんだけど、作り比べるつて意味でタグ付けしてて、見比べてたりしたんだけど、一々収納箱に入れてると取り出してはまた入れてつてめんどくさくなちゃつて…それなら目の前においておけば一日でわかるなーつて…」

「それで放置してたら一日で分からぬ状態になつたと…」

「あとでちゃんと片しますー…」

「是非早めに頼む、いつ爆発するんじやないかと常に怖くて気になるんだ…」

「それで、もう一つ気になつたんだが、この机の上にあるやたら分厚い本はなんなんだタ
オ」

「いきなり僕つて決めつけないでよ…いや、僕だけさ――アンペルさんに教わった
文字が表紙に書いてある本を書庫から見つけてきたんだ」

「へえ…どんなことが書いてあるの?」

「さあ…?」

そういつて首をかしげるタオ、思わず全員が一瞬黙る

「いや、さあ? つて…」

「これ、古い文献に使われてる言語の辞書なんだつて、だからこれを把握するのが当面の

課題だつてアンペルさんに言われたんだ」

「意味が分からぬ言葉の辞書を引いて、意味あるのか…？」

「それが、以前から本によく共通する文字列のメモは取つてたんだ、これが役に立つて「地道な作業をよくこなした」って褒められちゃつたんだよ——僕は本が大好きで常に囁り付いていただけなんだけどね…えへへへへ…」

「気持ち悪い笑みをしないでよ……そういえば、ちよくちよく何か書いてたつけ…よかつたじやない、今までの努力が実つて」

「実るかどうかは、これから僕自身の努力だよ、今がスタートラインなんだ、これからもつと頑張らないと！」

「おお、凄い意気込みだ」

——意気込みはいいけど、なんで自分の家でやんないのよ、レントとカイルまでいる

し……」、あたしのアトリエなんだけど

「そりやあ、うちでやつてたら親がうるさいからだよ」

「そのためのたまり場だしな、名前は変わつてもやることは変わらねえよ」

「俺に至つては、ライザが呼んだんじやねーか：なんでも使えそうな花の種類が聞きた
いとかで」

「あははー…そうだっけ？——ま、まあ鍊金術士つて言つてもそう簡単に暮らしは変
わらないって事よね！」

「まあ、好きにしてて、あたしは鍊金で忙しいから、それに新しいレシピも閃いたのよね」
「なあ、調合もいいけどよ、また対岸に行かねえか？リラさんに習つたことを実戦で試し
てみたくつてよ」

「えー…カイルと一緒にちょっと行つてきたらいいじゃない」

「いや、俺たちの連帯も常日頃から鍛えないといけないってリラさんも言つてたし、ライザだつて俺たちが行く分、沢山素材を採取出来るだろ?」

「それは…確かにそうね」

「魔物との戦いつて…あんなことがあつたばかりだよ…怖いことはやりたくないんだけどなあ…」

「よし!早速対岸へ行こうぜ!待つてろ魔物!そして今に見ていろよ、ボオスめ!」

「僕の意見は無視か…」

「諦めろタオ、レントがやる気になつた時は、ライザ以上に手が負えない」

こうして再び3人と1人は揃つて対岸へ向かうのであつた

——特記すべき何かもなく、早速対岸の船着き場へ着いた4人

「よし、さつそく魔物を蹴散らしてみるか!——カイルはサポートに徹してもらつていいか?さすがにカイルが苦戦するようなところにはまだいけそうもないしな」

「ん?ああ、わかった、危なくなつたら手を出させてもらうよ——最近模擬戦でもメキメキ実力を伸ばしてるので大丈夫だと思うがな」

「よーし!あたしも鍊金術で作った爆粉うにをじょんじょん試すぞー!」

「いや、ライザも使いまくるのは遠慮してくれ」「うえつ!?!」

「いや、全く使うなとは言つてないけどよ、今回は全員での連帯も感じたいんだ、開幕爆弾なんて投げられたら下手したら戦うつて行為自体なくなるかもだろ?」

「僕はそれでもいいんだけどなあ……」

「今日は街道の方を見てみたいんだ、この前ライザとカイルが行つたつて聞いてどんな感じなのかこの目で見てみたかったんだ――それに俺の今の剣が飛竜に通じるのかも気になつてな」

「ふふん! 道案内はこの鍊金術士様に任せておきなさいっ!」

「あ、カイル、ライザが行つてないところを中心に案内頼めるか?」

「分かった」「ええー…あたしに威張らせないさいよお」

「ここまで来ておいて言うのもなんだけど、やっぱり帰らない?」

「だからタオ、諦めろ、そしてお前も体力、技術共に戦えるようになつてもらうぞ」

「うへえーーー！」

「無いとは思うが、危険になつたらすぐに逃げ帰るぞ」

そうして前に来た時と同じく、ちょっとした洞窟を抜けて視界が開ける場所に出る

「へえ…やつぱり見たことない魔物がうじやうじやいるじやねえか、よし！挑んでみよ
うぜ！」

「この景色を見て最初の一言が魔物の感想なんて風情が無いわねえ…」

「ええ…襲われるならともかく、本当に自分たちから挑むの？」

「ああ、特訓だからな、1回とか2回じやだめだ、何度も戦つて、カンをつかまないとな

：悪いがそれまで付き合つてくれ――頼む」

「そんなに真剣に頼まれたら断れないじゃないか：分かつた、とことん付き合うよ」

「あたしの素材回収も忘れないでよねー」

「ああ、付き合つてくれた礼代わりだ、ただどんなものを集めればいいのかそれだけは教えてくれ」

「ふふーん、今度こそ鍊金術士様の出番ねつ！」

「いや…お前もカイルに教えてもらつた事だろうに…」

「いいのよ、今ではわたしの知識もあるんだから！」

「さあ、おしゃべりもそこまでにして行こう――今回は街道の右側を中心探索しよ
う」

そう言つて、4人の少年少女は歩みだすのであつた

光の軌跡

「キュイイイイイイイイイイイツ！」

そう高い断末魔をあげるとオオイタチは大きく吹き飛び、動かなくなる

「うしつ！これで6匹目のオオイタチだ！小妖精の森にも居たが、あの時と比べて苦戦することがなくなつたな！」

そう一息入れながら呟くのは、今回の言い出しつペであるレントだ

「ぶー…あたしにも爆粉うに投げさせなさいよー…杖で殴るのもそこそこ疲れるし、手だつて痺れるんだからねー？」

「いや、お前、俺たちが普通に対処出来る相手にソレは明らかにオーバーキルだろ…」
—それに、今後も冒險するなら序盤でバンバンコアクリスタル使つたら、いざという

時にエネルギーが足りませんでしたつてなるかも知れないだろ？」

「……正論に耳が痛いわね……」

「まあ、オオイタチはみんな小妖精の森でも相対してるし、その時でも対処出来てたから心配はしてなかつたけど、流石だよ」

「僕はもう懲り懲りなんだけど……」

「――と言ふわけで次はライザ以外相手にしたことない、ミニワイバーンを相手にするか、遠目で見えたし、丁度いいだろう」

「ええ…何がと言うわけなのさ……」

「よしつ！待つてました！空中にいる敵への攻撃方法もりラさんに教わつたが、やつぱり実戦で確認しないとな！」

そんな会話をしつつ足を進める4人、すると先頭で案内をしていたカイルが目標を見つけた

「いたぞ、休憩中のミニワイバーンだな」

「…僕の目には2匹居るよう見えるんだけど…いきなりアレの相手は無くない?」

「いや、ここで妥協してたらいつまで経っても強くなれない!ライザもアイテムを解禁してくれ——いくぞっ!」

そんな掛け声と共にレントは駆け出し、休憩しているミニワイバーンの一方に剣を叩きつける

「グギヤアツ!?」「ガアアアツ!」

陽気な陽射しに微睡んでいたミニワイバーンたちは突然の攻撃に慌てるも、片方は自分の同胞が傷付けられた事を悟り、すぐに反撃に移る

「よし！翼を傷付けた！これで片方は体勢を立て直すのに時間が掛かる！――うおつ、コイツ……すまないタオ！援護をくれ、剣に張り付かれて振り払えない……！」

「いきなり飛び出して置いて…全く！上手く避けてよね、闇夜の帷！」

剣に纏わりついていたミニワイバーンは後方より飛来した黒色の魔法に思わず飛び
退く

「ごめん！外したつ！」

「くそつ……退かれた……飛ぶ相手ってのは厄介だな、上手く追撃ができない……」

「――ちよつとレントつ！ぼさつとしてない!!」

最初に傷付けたミニワイバーンが体勢を立て直し、レントの隙を窺つて居たが、上手くライザが割り込み、その杖にて頭に攻撃を決める

「グギヤ!?」

「助かつたライザ!――ここで一匹仕留める!タービュランス!」

――タービュランス、レントの魔法を飛ばす事が苦手と言う欠点を補う技、剣に魔法を纏わせ、レント自身が回転を行うことにより竜巻を成す、結果、剣で直接斬りつけなくても敵を空へ投げ飛ばす事ができる技の一つである

――普段であれば空中こそ我が領域のミニワイバーンだが、直前にライザにより頭に一撃を貰つたのが災いした、軽い脳震盪である、結果空中で立て直す事が出来ずに地面に強く叩き付けられ、二度と動くことは無かつた

「よし!仕留めた…!」

「後の1匹は…なんかすごい怒つてるよ!」

「そらそうでしょ、お仲間がやられたんだから…!油断しないで行くわよつ!」

「しかし、あそこまで飛び上がつての相手にどう対処したものか…」

そう言つて全員が見上げる先にミニワイヤーバーンは羽ばたいている、そう、軽く4～5mの高さに居る

「流石に剣を投げつける訳にはいかないしな…ライザ、魔法で撃ち落とさないのか？」

「そんなもの撃つたとしても、避けられるのがオチよ」

「僕としては逃げてくれれば楽でいいんだけどな…どう見てもこれから襲いますって目つきだよね、アレ…だからと言つて警戒してるので容易には襲つてこなさそうだよ？」

「だからってこちらが隙を晒すと危ないしな…このまま睨めっこしてもしようがないし

…」

「――獵師が獲物を仕留める時、わかりやすい餌を用意する、それは当然でもそれだけ

だと獲物にばれてしまってから自分は見えない位置で罠を仕掛けるそうだ：」

「カイル……？——ねえ、レント、タオ、少しやつてみたい事があるんだけど……」

「俺には解決策が剣を投げるしか出てこないしその話乗つたぞ」

「ええっ！？話を聞く前に受け入れるの！？——でも、このままでしょうがないか……わかつた、僕も乗るよ、どうすればいい？」

「——普通に帰るわよ」

「は？」 「え？」

「レント、ちょっと剣を地面に叩きつけて土埃をあげてくれない？」

「——何をするかわからぬ——けど、乗ると言つちまつたしな：おらつ！」

言われた通り大剣を地面に叩きつけるレント、ライザの予想通り土埃は撒き散らされたが、それも一瞬のことですぐに視界がひらけてしまう

「——それじや、帰るわよ、あたしがいいつて言うまで絶対に振り返らないでよ、たとえ襲つてくる気配があつたとしてもよ」

「ええつ!?

「わかつた…」

そうしてミニワイバーンから背を見せ歩く3人

——ミニワイバーンは悩んでいた、明らかに目の前で隙を見せる敵対者、同胞がやられたことにより決して油断のしていい相手ではない、さつき一瞬自分の視界が遮られたらが、それ以外特に下の人間共が何かをした気配はない、ここで自分が攻めずに逃して

いいのか？そう考えたら攻撃することに戸惑いはなかつた

そうして弱そうなやつから狩ろうとタオに向かい急速下降し強襲を仕掛ける、そしてタオまであと2mという距離で上より幾重もの光が翼を撃ち抜く
結果地面へと突撃してしまう

「——ツ!! 今よつ！」

その合図を受けレントとタオの攻撃に晒されるミニワイバーン

「ダメ押しよつ！」

その声が聞こえるとほぼ同時に目の前に何か転がつた——ボンツ！という音それがミニワイバーンが最後に聞こえた音だつた

「——お見事」

「——はあああー……こわかつたああああー……最後明らかに僕を狙つてたよねつ!?」

「——一体何があつたんだ? 土煙でライザが何か仕掛けたつてのはわかつたが:」「ふふん! この鍊金術士様のおかげねつ!——あ、レント怪我してる、これ(グラスビーンズ)食べなさい」

「ああ、助かる——につがつ!!!:それで種明かしは?」

「そう慌てないで余韻に浸らせなさいよ——まあ、いいわ、私の使う魔法にコーリングスターつてあるじゃない?」

「ああ、あの魔力を固めて撃ち出すやつ……」

「カイルの言つた通りそれを罠にできないかなーつて……」

「ん？でもあれは投げつけるだけしか出来なかつただろ？」

「だから新しく作つたのよ」

「ええっ！？僕ぶつつけ本番の技で命を掛けられてたのっ！？」

「なんとなくいけると思つたのよ——効果としてはコーリングスターと同じような球を上空へ投げて、それを任意のタイミングで下方へ撃ち出すつて感じね、球よりも小さくなつちやうから点での威力は下がつちやうけど、面での火力は上がつたわよつ！」

「なるほど、だから土煙で目眩しをしたのか——ミニワイバーンもまさか自分より上から攻撃が来るとは思わなかつた訳だ」

「ふふん、我ながら素晴らしい魔法を作つたものね、発動時間を変えることで同時攻撃とかもできるし、薄くばら撒いて全体攻撃もできるわね！——名前は…光の…雨…？いや…軌跡！そう！シャイニートレイル！これに決めたわ！」

「僕は命が縮む思いだつたよ…今の説明を聞いて尚更ね…」

「オレも正直2匹同時は少し厳しいかなつて見てたけど…ほぼ初見の相手にあそこまで戦えるなんて…もう誇つていいよ、村の護り手の実力と同じくらいにライザたちは強いよ」

「ちなみにカイルだつたらどうしてたんだ？今後の参考までに聞いておきたくてよ」

「うーん、オレの他に仲間がいた場合は剣を置いて、ひたすら石とか投げまくつてたかな、賢そうつて言つても所詮は魔物だから痺れを切らして突撃してくるよ、そうしたら仲間に攻撃して貰えбаい」

「1人だつた場合は？」

「どうしても戦いたい状況じやないなら、レントみたいに土煙立たせて全力で逃げかなあ、1人で無理しても危険なだけだからね——どうしても戦わないといけない場合

は、ひたすらカウンター狙いで先に手を出した方が負けの我慢比べか、いつその事こ
魔法で突撃かなあ…」

「途中まで利口な感じだつたのに最後の最後で、なんでそんなにやぶれかぶれになつて
るんだよ…」

「いやあー…結局、踏み倒して進まなきやいけない時は、初撃に全身全靈を賭けた方が良
かつたりするから…基本自分より格上を倒すなら相手より僅かでも秀でた一撃じやな
いといけないからね…まあ、それに賭けすぎて基礎を疎かにするとアガーテ姉さんに怒
られるんだが…」

「それはそうと最後の爆粉うにまた威力上がつてないか？」

「そう！ そななのよつ！ 爆発する威力をあげただけじやなくてね——」

そうして一つの山場を乗り越えた一同は達成感と共にクーケン島への帰還の道に着

くの
であつ
た

レシピ3——草刈り鎌

——時間は昼超えて少し経った頃、大人たちにバレないよう密かにクーケン島へ帰還した4人——そんな中、レントが呟く

「踏み込みはあんなもん…だつたよな、戦つた後の周りの警戒もやつたし…戦闘中の周囲の警戒が緩むのは今後の課題だな…」

「何ブツブツ言つてるので？」

「ん？ああ、リラさんの言いつけをさ、一つ一つ頭の中で確認してんだよ」

「帰つた後にまで、熱心だなあ…それつて戦いの方とか、そういうヤツ？」

「ああ、リラさんは戦士の心得つて言つてたな」

「その戦士の心得つて首都にいたときにも、あまり聞いたことないんだよな…アガーテ姉さんから聞いた騎士の鉄則ともまた違うし…」

「ふーん…リラさんって、どういう人なんだろうね？あんまり見たことない恰好してるけど…」

「アンペルさんとずっと一緒に旅してるって聞いたよ」

「興味ないな…リラさんの素性がどうとかそういうのより、俺に必要なことを知つている、だから教わる…俺にとつて大事なのは、それだけだ」

「割り切つてるなあ…」

「レントも早く、リラさんくらい頼もしい戦士になつてよね、あたしの採取も楽になるし」

「お前を手伝うために腕を磨いてんじゃねーよ…それはカイルに言つてやつてくれ」

「俺に擦り付けるな…苦労は分かちあつてこそその友達だろう?」

「そんな重荷の分かち合いは要らねえー…」

「——…ちょっとあんたたち、誰が重荷で苦労だつて…?」

「おつといけね、ライザが怒るとミオさんばりにこえーんだ、というわけでカイル、タオ、ちと早いが先に帰るからなー!」

「…僕も帰るよ、巻き込まれる前にね、じゃあねライザ、カイル」

「…つたく…あたしも帰るわね、じやあね、カイル」

そうしてこの日の大冒険は解散となつた

「さて…オレはどうしますかね…漁の手伝いもなれば、採取の依頼もなしつと…少し、

「雑貨屋にでも顔を出しますかね」

——フレツサの雑貨屋、それはラーゼン地区よりボーデン地区へ入り、すぐ近くの道を曲がった突き当たりにあるお店、クーケン島では島と言うこともあり、専門店というようなものが無く、何か道具を買うにしても島の外から来る商人から買うといつた苦労をしてきた、それを解決したのが店主であるフレツサという男性が営む雑貨屋である、今ではフレツサに欲しいものを頼めば、ある程度は仕入れられるので島の人々はよく使うお店である

「フレツサさん、こんにちは」

「おや？ カイルじゃないか、今日は薬草の定期納品の日ではなかつたはずだけど

「いえ、今日はお仕事じゃなくて、普通にお店を覗きに来たんですよ」

そう、カイルが薬草などを採取して納品している相手の一人がフレツサなのである

「そうなのかい、まあ、ゆっくり見て行ってくれ、そういうえば今日ジエナちゃんが予約していた本が届いたんだよ——」

そう名前が出ると、それに答えるかのようにカイルの後ろから声がかかる

「兄さん！」

カイルが後ろを振り向くとそこには、カイルと同じ深い藍色の瞳、丁寧に切りそろえられた長く艶のある綺麗な黒髪、クーケン島の人の衣装と比べると多少上等な衣装に身を包んだ幼い少女の姿があつた——彼女は「ジエナ・シュナイダー」ピーターの娘であり、カイルの実の妹である

「やあ、ジエナ——で会うとは奇遇だね」

「兄さんこそ、てつきりお仕事だと思つてたんですけど」

「あ、いやー…それはしばらく無いかな…ちょっと在庫とかも抱えちゃってね——それよりも、ジエナは本を買いに?」

「はい! そろそろフレッサさんに頼んでいたものが、届くと思ったので」

「ああ、いいタイミングだね、ちょうどさつき届いたんだよ」

「わあ! ありがとうございます! ——今回のお値段はいかほどで?」

「ああ、どうやらもう絶版になつてしまつたらしくてちょっと高くついてしまつてね… 本来は1300コール程なんだが、1000コールにオマケしよう」

「そうなんですか…ちょっと手持ちが足りないので、また貯まつたら買いに来ますので取り置きお願ひしてもいいですか?」

「ああ、気長に待つてると——」

「——いや、オレに買わせてください」

「え？ 兄さん大丈夫だよ？」

「——こは買わせてくれ、ジエナはいい子が過ぎる、父さんももつと甘えてほしいと思って
いるぞ、偶には甘えてくれ」

「でも……」

「いいんだ、最近構つてやれなかつたお詫びだと思つてくれ——というわけでフレツ
サさん、お願ひします」

「わかつた——うん、確かに1300コールいただくよ、はいこれ」

「ありがとうございます、ほらジエナ受け取つてくれ」

「ごめんな——ううん、ありがとうございます兄さん」

「――あー！ カイル！ ちようどいいところに!!」

そう唐突に声が響く――振り向いた先に居たのは、小一時間前に別れたばかりのライザである

「ん？ ライザ？ どうしたんだ、そんなに慌てて」「ライザさん、ここにちは」

「あ、ここにちはジエナちゃん――じゃなくって、カイル!! 魔物の骨つて余つてない！」

「ん？ 納屋にいくつか転がつてたと思うが…」

「ちょっと貰つていい!?」

「あ、ああ：いいけど何があつたんだ」

「それがね——」

そうしてライザが語ったのは、みんなと別れた後の話である

「ただいまー！」

「ライザ！お前またどこほつつき歩いてたの!!」

そうライザが帰るなり、怒鳴り声をあげるライザの母、ミオである

「（うわあ…めっちゃ怒ってる…いやなタイミングで帰ってきてちゃつたな…）」

「いい加減にしないと、屋根裏部屋に鍵をかけるわよ」

「ち、ちょっと待って！それは困る！絶対にダメ!!!」

「ダメも何もあつたもんじやないわよ！—— いつの間にか変な改装してるわ、変な薬品みたいのは置いてるわ、いくら言つても手伝いはしないわ：いい加減におし！鍵を掛けられなくなかったら、今からでも父さんの収穫を手伝ってきなさい！」

「うう……分かつたわよ……収穫つてクーケンフルーツでしょ？草刈り鎌つてどこに置いてあつたつけ……」

「知らないよ、鎌くらい自分で探せるでしょ」

「そんな――――（いつそ、鍊金術でパパつと作れないかな？探すよりアンペルさんに聞いた方が早いわよね？）」

そして時は雑貨屋の前まで戻る

「それでアンペルさんに聞いたら、鍊金術のレシピ変化つてのを教わつてね、草刈り鎌を

作るのに魔物の大きな骨がいるのよ！……ちょうど手持ちになくって、でもカイルなら持つてるかなって探してたのよ！」

「…半分以上自業自得だな…」「ライザさん…」

「うう…ジエナちゃんの目が痛いわ…っ！」

「そう思うなら、普段からもう少し手伝つておくんだつたな…——まあ、でも、あの屋根裏部屋はオレも使わせてもらつてるから、俺にも責任の一端はあるか…わかった、大きめの骨を持つていけばいいんだな？」

「ホントツ!? 助かるわっ！」

「持つてつてやるから、先に鍊金術の準備でもしといてくれ——ジエナはどうする？」

「私は…本もあるので家に帰ろうと思います（——ライザさんは兄さんと遊べていいなあ…）」

そう小さくつぶやく幼い妹の声が聞こえて少しバツが悪そうな顔をするカイル

「――そう悲しそうな顔をしないでくれ、今度一緒に舟で遊泳をしよう、ジエナの大好きなちよつとした冒険話も聞かせてあげる」

「本当ですかっ!?:絶対にですよ、兄さん!」

そう満面の笑みを浮かべる妹に、苦笑するカイルであつた

——場所は変わって、ライザの家の屋根裏部屋、大きな骨を持つてカイルが到着する

「待つてたわよ!」

「そんなに時間はかけなかつただろう?」

「下でお母さんがブンブンなのよ! なんとか屋根裏部屋に置いた氣がするつて誤魔化してるんだから!」

「ああ: それで上がつてくるとき、悪いけど探すの手伝つてくれつて言われたのか: ——まあいや、ほれこれでいいんだろ」

「ありがとう! ——さあ、早速始めるわよ!」

そういうつてライザが取り出したのは、アマタイト鉱、コベリナイト、中和剤・赤、それを順番に鍊金釜へと入れる

「さあカイル! 大きな骨入れちやつて!」

「え? オレが入れちゃつていいのか? ——じゃあほいさ!」

そうカイルが鍊金釜に大きな骨を入れ、ちょっとすると眩い光を放つ鍊金釜——光が収まるときと鍊金釜の中には1つの草刈り鎌が置いてあつた

「できたつ！——アンペルさんに教わったレシピ変化も上手くできだし、あたしつて才能あるんじや？それに、これがあれば手伝いだけじゃなくて素材もいろいろなものが採れるはず！」

「……相変わらず不思議な光景だ……あの素材から何故、道具の完成品が飛び出てくるのか

……」

「あたしの鍊金術の幅もぐつと広がつて、ものすごい事できるようになるかも……ふふふ

……」

「——それで収穫の手伝いはいいのか？」

「——つは!? いけない行かなきや!!」

そう慌ただしく部屋を飛び出すライザ

「……」まで来て帰るのもあれだし、もう少し付き合うか…」

ライザの後を追い、カイルも農場へ向かうのであつた

——島外れの農場、それはライザの家より南西に進むとある、ここで農家は各々の土地を有し、島独自の特産品であるクーベルフルーツをはじめ、様々なものを栽培して、ライザの家は麦畑とこここの土地の一部でクーベルフルーツを栽培する一家である

「お父さん！手伝いに来たよー！」

——おや？ ライザ、それにカイル君まで

「こんにちは、カールさん手伝いにきました」

「手伝いに来てくれたのかい？たすかるよ、カイル君は鎌をもつてなかつたよね、じやあ僕の予備を貸そう」

「――え、…予備つてあつたの？」

「??当然じやないかライザ、1本しか持つてなかつたら作業中に壊れたら困るだろう？まあそなうならないように日頃の手入れも大事になるんだよ」

「――まあ、予備くらい持つてると思つたよ」

「何で言つてくれなかつたのよつ！探す手間も鍊金術の手間も必要なかつたじやない！」

「言つても聞かなかつただろう？それにレシピ変化だつたか？新しいことも学べてよかつたじやないか」

「それは、そうだけど……うー……なんか釈然としないわ……」

「ははは、何があつたかよくわからないが、カイル君は娘のことがよくわかつてるようだ——何か目先のことじに真つすぐになつたら止まらないのがシユタウトの血筋さ」

「自覚あつたんですか、カールさん……」

「当然だとも、それを誇らしく思つてゐるさ」

そんな会話をしつつ、クーケンフルーツの収穫に勤しむ一同——暫くして

「よし、今日の収穫はこんなものだろう、ライザ、カイル君ご苦労様、余つた分は二人で分けて持つて帰つていいよ」

「はー……やつと終わつた……中腰で作業すると腰が……」

「貰つていいんですか？」

「ああ、当然だとも、お礼には足りないくらいさ、今度家で夕飯を食べに来なさい、ささやかながらおもてなしをしよう——母さんが作る料理は美味しいんだ」

「ありがとうございます、是非よらせていただきますね」

「しかし、ライザが自ら手伝いに来るなんて珍しいな、いつも言つても来ないだろう」

「(だつて、人質ならぬ物質で手伝わなかつたら屋根裏部屋に入れなくなつちやうし……)」

「ん? なんだつて?」

「あー……ううん、なんでもない、そういう気分だつただけよ」

「そうか、遅くなる前に家には帰りなさい、母さんも心配するからね——カイル君も改めて助かつたよ、ありがとう」

そう言い残し、先に家に帰るカールであつた

「余つたクーケンフルーツどうしょ…鍊金術の材料になるかな?」

「なんでもかんでも鍊金術の材料になるのか…」

そんな会話をしていると、後ろから見知った声が聞こえる

「ここがお前さんの実家の畑か」

「え?」「ん?」

「無事に草刈り鎌は作れたようだな」

「アンペルさん!? もしかして心配してきてくれたの?」

「偶々この農場に用があつただけだ、そこにお前さんが偶然いたにすぎん——だが、物は次いでだソレが作れたのなら、この本も渡しておこう」

「これつて…もしかして新しい鍊金術の本!?」

「今のお前さんでは到底作れないようなものばかりだろうが、草刈り鎌のような採取道具について書かれている、新しい道具が増えれば、採取だけでなく、冒險で岩が道を塞いでいた時とかに突破して新しい場所に行けるかもしけん———いつか物にして見せろ」

「新しい場所：新しい冒險：うんつ！ワクワクしてきた！」

「おおう…目がギラツギラしている…」

「では、私の用は済んだ、もう行かせてもらう」

「アンペルさん、ありがとう！——あれ？ そういえば農場に用があるんじゃなかつたつけ？——まあいつか」

「(なんというか…アンペルさんも難儀？…いや、可愛らしい？人だな…)」

「カイルもなんか手伝わせちゃつたようで悪いわね——お父さんの言つたように今度お母さんの料理を食べに来て、おつかないけど料理は美味しいんだから！」

「ああ、お邪魔させていただくよ」

そう咳き、今度こそ、この日は解散するのであつた

逃げてたワケ

——ライザが農作業を手伝った次の日の昼頃、ライザの家にレント、タオ、カイルが訪ねる

「ライザー！ 出かけようぜ！」

「出かけるってどこによ？ さすがに昨日の今日で対岸に行くってわけじゃないんでしょ？」

「分かったんだよ！」

「何が分かったのよ…」

「バレンツ家のお嬢さん、クラウディアの家だよ」

「!!——どこどこ?」

「アンペルさんの家の近くだとさ、同じように空き家を借りたらしいぜ」

「旧市街か：確かにあそこらへん、空き家が多いもんね——よし！早速行つてみるわよ！」

「詳しい場所は旧市街でも高台の方だつて聞いたし、行けば分かるだろう」

「おつと、手ぶらで行くのもなんだ、何か手土産を買つていこう」

「手土産つて言つたつてこんな島じや何もないわよ？」

「あんまり格式ばつたもの持つて行つてもしようがないし…バジーリアさんのクツキーでも買つていこう、それなら大丈夫だろう」

「…急に邪な考えが混じつたな…」

——そうして4人は旧市街へと歩いていく

「ん——聞いた話だと、ここの中だつた気がする」

「いまいち頼りない情報ね…」

「僕たちも情報を聞いてすぐにライザに教えようと場所まで確認したわけじゃないから
ね」

「ああ、やつぱりこっちだ——あそこにあつた廃屋敷がきれいになつてる」

そう見上げた先には、旧市街でもかなりの大きさを誇る青屋根のお屋敷、少し前までは誰も住んでおらず、近くの子供たちが怖いもの見たさで出入りしたりとちよつとした

遊び場になつていたところである

「すいませーん！ライザリン・シユタウトでーす！クラウディアさんはいますかー!?」

「お、おい…いきなりすぎるだろう！」

「なによ、これくらいやつたほうが、話も早いでしょ」

「僕はもうちよつとマナーとか世間體を気にした方がいいと思うんだけどな…」

「何よタオ、あんたまで村の連中みたいなこと言つて——」

「——ライザ!？」

屋敷の中から驚いたように名を呼ぶ声が聞こえる、足音を聞くに慌てて来てくれているのだろう

「ほら、言つた通り早かつたでしょ？」

——場所は変わつて屋敷の中、扉を入つてすぐ左の部屋、中央にテーブルと向かい合うように配置されたソファー、用途と言つては応接室のような場所でライザたちはクラウディアに向かい入れられていた

「——いきなり大声で呼んだりしてごめんね、ライザってマナーとかかなりアレだから…」

「ううん、来てくれて嬉しかつたよ——私も挨拶に行きたかつたけど、引っ越しが忙しくて…」

「あたしたちの方もドタバタしてて、來るのが遅れちゃつたんだ」

「アンペルとリラさんから聞いてるよ、みんな自分のやりたいことに打ち込んでるつて」

「へへっ、まあな——忙しいけど楽しいぜ、自分が確実に強くなつていつてるつて感覚、ジユージツつてヤツ?」

「僕なんかは、まだまだ分からぬ事だらけだけねー…」

「オレの方は…アレ…当初の目的のリラさんとの模擬戦をしてねーような…?」

「男どもはどうしてこう華の無い……アンペルさんたちとは会つてたんだ?」

「うん、偶々だけど近所に住むようになつたし、お父さんの相談役として村に滞在してもらうんだつて——二人も遺跡の調査……だつたかな？ その仕事が終わるまではいてくれるみたい」

「ふうん…みんな、いつかいなくなつちやうのかな…」

「――例えいなくなつたとしてもそこで縁は切れないよ」

「ふふ…カイル君の言う通りだよ、それにそんなにすぐじゃないし、販路の手続きとか収穫量の調査とか、やることも多いみたい」

「…そうか、 そうだよね、 じゃあ、 いる間はいっぱい遊ぼう！」

「嬉しいけど…4人ともやることがあるんでしょう？ 遊んでる暇なんてないんじや…？」

「それはそれ、 これはこれつてヤツだよ」

「そうそう、 暇つてのは見つけたり、 作つたりするもんさ、 変な遠慮はするなつて！ ——
— それはそうと一人なんか仕事にあぶれてる奴いるが…」

「うつ…それを言わると痛い…アガーテ姉さんにも鍛えなおしてもらうか…」

「鍊金術だつて、 材料の採取でよく出掛けるし、 近場の危なく無い所だつたら、 島の案内

もしてあげるよ

「ありがとう、安全なら外出も許してもらえるかな…あの騒ぎからお父さん、少し神経質になつてて…」

「あー…あれば実際危なかつたしな…俺たちが用心棒として力不足なのは…まあわかる…そこに甘んじる気はないけどな」

「――あつ、そういうばあになつてたんだけど…何で魔物にくわすほど森の奥に入つてたの?」

「そういうばあ、親父さんも「よくいなくなる」みたいに言つっていたな…なんか訳アリか?」

「おいおい、ちょっとばかし無粋が過ぎるぞ」

「そうよ! 女の子の秘密を、気安く訊いたりしない!」

「そ、そんな大げさなことじやないよ…ただお父さんには…」

「——やあ、ようこそ諸君、今日はささやかながら持て成そう…ゆつくりしていつくれ」

「そう声が掛けられ、振り向くとそこにはクラウディアの父であるルベルトが佇んでいた

「あ、ここにちはルベルトさん、お邪魔させていただいてます——これ、良かつたら、こんな島のたいしたものじやないんですけど…味はいいと思うので」

「お邪魔しています」「してまーす」

「おや、頂いてもいいのかい?——あとで娘とゆつくり食べさせてもらおう、では、ゆつくりしていつてくれ」

そう立ち去つていくルベルトをクラウディアは複雑な表情で見つめている…

「——ねえ、クラウディア、今度あたしの部屋に来ない？そこなら色々とお話しできると思うんだ」

「…ホントっ！うんっ！ありがとうライザ！——なら早速で悪いんだけど…明日お邪魔させてもらつてもいいかな？」

「うんっ！クラウディアみたいに立派なおもてなしはできないけど…歓迎するわ！（——というわけで男ども！明日朝早くから来なさい…積みあがつた爆粉うにとか、かたすわよ…っ！」

「(だからあれほどかたしておけと….)」

そうしてライザたち一同は、クラウディアにアレを見せてはいけないと、次の日の朝早くから、片付けに勤しむのであつた：

——そして次の日の昼前の屋根裏部屋にて

「――ふつふつふ……クラウディア君！ 我がアトリエへようこそ！ 歓迎をしようつ
！」

やたら尊大かつ不遜、そして圧倒的ドヤ顔にてクラウディアを向かい入れるライザの姿があつた

「（うわあ…何アレ？ 恒例行事かなんかなの？）」

「（前にやつた時にお前らの反応が悪すぎて…満足するまでやる気だぞ、アレ）」

「（正直、ライザを満足させてやつとけばよかつた…つ！ 見ろ、クラウディアなんてドン
引いて――）」

「——ご自慢のアトリエにお招きいただき光榮でございます。—— 錬金術士ライザ
リン・シュタウト様」

そこには優雅にライザ相手にお辞儀をするクラウディアの姿がつた

「——…つてクラウディアまでノリノリかよつ！」

「——そう…そういう反応が欲しかったのよ…つ！—— ホンツトうちの男どもは女
の子一人満足させられなくて…」

「…女の子?」「——タオ、あんた後で家の裏きなさい」「あーあ…言わなければ藪蛇
にならずに済んだものを…」「まあ、自業自得ってことで」「そんな…」

「ふふつ…本当に、今日は招待してくれてありがとう、ライザ——旅暮らしだと、ここ
までしてくれる友達もいないから」

「なるほど…旅の生活も大変なんだね…」

「（こ）に招待されたからには、クラウディアも正式つてのも変だが……友達で仲間なんだぜ？」

「ああ、レントの言う通りだ、下手な遠慮はいらない、迷惑を掛けつつ掛けられつつのお仲間だ――最近やたら迷惑かけられてるような気もするが」

「あははー……でも、その通り、クラウディアはもう私たちの友達で仲間なんだから！」

「私の友達で、仲間……つ……あの……みんな」

「何、クラウディア？――あつ、そのケース……最初にあつた時に持っていたやつ？」

「うん、あの時、森にいた理由を話しておこうと思つて……そんなに、大した話でもないんだけど……」

「そのケースが理由なの？」

「確か、親父さんには秘密だつて言いかけてたつけ」

「うん——中はこれなんだ」

「へえ……キレイ……これは、笛？」

「——これは……フルートか」

「うん、カイル君の言う通り、これはフルートって言う吹奏楽器——あの日も、お父さんに見つからぬ所まで行つて、こつそり練習してたんだ……そうしたら」

「魔物に襲われた、と——何でそうしてまで隠すんだ？親父さんがその吹奏楽器？つてヤツが嫌いなのか？」

「それは……そうじやないんだけど……ちょっと事情があつて……」

「——いいよ、無理には訊かないから、レントも無神経に触れない、いいわね？」

「おつとすまねえ…」「分かつてるよライザ」「ああ」

「ううん…私の方こそ、こうして持つてきてるのに、中途半端に隠したりして、ごめんなさい…」

「それよりさ、折角持つてきてくれたんだから、ちょっと聴いてみたいな！」

「（ダ）…（ダ）めんライザ…まだ…ちょっと恥ずかしいから…今度ね？」

「無神経はライザの方なんじやないの」

「そ…」、「うつさい！」

「ふふふ…これからも時々、遊びに来ていいかな？」

「言つただろう、仲間だつて——いつでも気軽に出入りすりやいいさ」

「こゝ、あたしの家なんだけど……まあ、いいけどさ……」

こうしてライザたちは、新しい仲間、クラウディアを加え、日々を過ごすのであつた

レントのキズ／アガーテの優しさ

——クラウディアを仲間に向かい入れて数日後、ライザ、タオ、レント、カイルの4人は今日、小妖精の森へ行こうかと雑談しながらライザの家を出たところで、ライザの父カールに呼び止められる

「——ライザ、友達と出かけるところ悪いけど、ちょっとといいかな」

「あ、カールさんおはようございます」「おはようございます」「なんだ？また変なことしたのかライザ？」

「うえつ！お父さん！今日は畠仕事の約束はしてなかつたはず！」

「ん？ああ、そういうわけではないけど、ちょっとお使いを頼みたくてね：——フレツサのお店で、ヤギ肉を買ってきてほしいんだ、切らしていたことに今気がついてね」

「ええ…お使いい…？めんどくさいなあ…」

「買つてきてくれたら、お駄賃を出すよ」

「——やらせていただきます父上、この不肖ライザリン・シュタウト、フレツサさんのお店に行き、ヤギ肉を買つて持参いたします」

「…いや、誰だよお前」

「うわー…これぞまさに”現金” つてやつだね…」

「こう…何というか…ライザのそういう隠さない所、すき…だぞ…??」

「自分で言つてて、疑問符がついてるじゃねーか、カイル…」

「はは…任せたよ、買つたら私のところに持つてきておくれ」

そうしてカールにお使いを頼まれたライザ一同はフレッサの雑貨屋へ向かう——普段であればこれで終わりだつたのだが、この日は違つた、雑貨屋に近づくにつれ何やら喧噪が聞こえてくる

「——んだとお?!酒を売れねえってのは、どういうことだ!!」

「……」の声は…

ライザたちが駆け付けた先には、店主であるフレッサに絡む大男、鋭い鷹のような眼、赤褐色の髪、無精ひげを生やし、顔には剣の痕らしき無数の古傷、筋肉質の体躯は決してただ物ではないと悟らせる

「——やめろ親父!!こんなところで何やつてんだよ!!」

そうレントが叫ぶ——そう、フレッサに絡むこの酔っ払いこそ「ザムエル・マルスリンク」レントの実の父親である

「うるせえ！クソガキ！いきなり邪魔しやがって、てめえ、どつちの味方だ？」

「そういう話じやないだろ！」

「——ちよつとザムエルさん！こんな朝っぱらから往来の場で怒鳴り声なんて……」

「——ああん？……てめえライザか？……いつ、そんなにデカくなつた

「前にあつた時にも同じようなこと言つてましたよ……じゃなくて！なんで暴れたりした
んですか？」

「それがよう……このクソ店主が、オレには酒を売れねえだと抜かしやがる……オレは
客だぞ！？——金が払えねえって言つてるわけじやねえ、街道で魔物ぶつ倒して稼いだ
金がある！なのに、なんで——」

「わかつた、わかつたから！俺が話を付ける！だから先に帰つてくれ！」

「ちつ…胸糞悪い！二度と来るか、こんな店！」

そんなレントの悲痛な叫びに何か思つたのか、素直に立ち去るザムエル…

「——すいません、フレツサさん…」迷惑をおかけしました…」

「いや、僕の方こそすまないね…彼には護り手からあまりお酒を売らないでくれと頼まれていてね…」

「みんなもすまねえ…嫌なもの見せちまつたな…」

「ううん…ザムエルさん、相変わらずだね…」

「ああ…酒に酔つたら暴れて、酒がなくなればまた暴れて…——あれじや、母ちゃんが出て行つて当然だ…なのに…何も…何もできねえ…そんな俺が…俺は…くそつ…」

「レント…」

「…つ、すまねえ、仲間の前で泣き言なんて格好悪い…」

「オレたちの方こそ…いや、何でもない…」

「(レントの力になればいいんだけど…今のあたし達じや何も….)」

そう、普段この面子では少し大人びているカイルでさえ19歳、タオに至つては最年少の15歳、まだまだ子供である——いくら鍊金術という不思議な力に触れようが、太古の文献を紐解く切欠を掴もうと、歴戦の戦士の教えを請おうと、過去のトラウマを踏み越えようとしたしが、まだ変わり始めたスタートライン、無力な少年少女でしかない、それを様々と見せつけられる出来事でもあった——今は

そんなことがありつつもヤギ肉を買ってカールに届けたライザ

「お、買つててくれたのかい?助かるよ——おや?少し顔色が良くないね、何かあつたのかい?」

「ううん、大丈夫何でもないよ——それでお駄賃はつ!?」

「急に元気になつたな……」

「もちろん忘れてないとも——これだけ上げよう」

そう言つてカールが手渡したのは20コール——正直お菓子一つ買えるかな?で
ある

「こ……これだけ……っ!?」

「ただの買い物だし、そんなものだろう」

「まあ、当然つちや当然だわな」

「学び舎の子供たちレベルのお使いだもんね……」

「むしろ、貰えるだけありがたいと思わんとな」

「そんな都合のいい話あるわけもないかー…」

「足りないというなら、もつと働くことだ——そうだ、村の手伝いをしてみてはどうだい？頑張つて人の役に立てば巡り巡つてきつといいことがある、お金だけではなくね、それに打算から始まる事でも人を助けたということは実に素晴らしいことだと思うぞ」

「手伝い…かあ…前にカイルも言つてたわね…本格的に始めてもいいかも…」

以前のカイル、そしてこの時のカールの言葉が今後ライザの進むべき道の一端を示し、それはやがて島、延いては世界を救う一言になるとはこの時誰も…それこそ神様にだつて見通せなかつたであろう：

——そうして、改めて冒険に向かおうと歩く一同の目の前に、珍しくアガーテが通りかかる

「——さて、次は旧市街の見回りかな：それが終わつたら……」

「こんにちは、アガーテ姉さん！——今日も忙しそうだね？」

「——ん？ ああ、君たちか、護り手つてのはやることが多いからな、年がら年中、なんにでも駆り出されるんだよ」

「ふうん……アガーテ姉さんはなんで態々、忙しい護り手になつたの？」

「なんで……か……深く考えたことなかつたな……」

「でも、姉さんつて護り手でも一番の剣士なんじょ？ カイルに剣を教えたのも——首都で華々しく活躍したい！とか思わなかつたの？」

「ああ、首都で騎士養成学校に通っていた時期もあつたさ、実際の騎士とやらにもなつてみたいと思つていたしな」

「へえ…！アガーテ姉さんが騎士かあ…！確かに姉さんって美人だし、ピカピカの鎧とか似合いそうだよね！」

「急に褒めても何も出でこないぞ？——あの頃のアタシは自分が騎士として、どこまで通用するか試してみたかったつてのはあつたんだ」

「それで、どうなつたの？」

「ああ、剣の腕とか、筆記とかそういうのもやつて学校では主席にすらなれたさ——でも、周りが面倒くさい話ばかりしていてな…」

「面倒くさい…？」

「血筋とか、身分とか、出世とか、派閥とか：そんな話ばかり聞いてるうちに騎士に幻滅……とまでは言わないが、首都も、王城も窮屈に思えて来てな……逆にこののどかな島や湖：故郷が懐かしくなった、だから叙任を受ける前に帰つてきてしまったよ」

「ふーん……そんなことが……それで今、護り手になつたわけ？」

「ああ、礼儀作法だの規律だの、堅苦しいものがない、この護り手こそが天職だと――今では思つているよ」

「アガーテ姉さんはそういうキリツつてやつに厳しい方だと思つてたけど……」

「アタシが厳しいものか、こんな村の悪ガキ連中4人組相手でも、こんなに優しく接してやつてるんだぞ」

「おつと……黙つて聞いてたらこつちにも火の粉が」「あーあー僕は何もきこえないー」「……正直、すまないとは思つている」

「なるほど……って、誰が悪ガキ4人組筆頭バカよ！――大体そんなに優しくないと思う？」

「いや、そこまで言つてないが……夢見がちな少年少女の頭を、つけあがらない程度に押さえつけるのは結構大変なんだぞ？」

「そういうのは優しさとは言わないと思う！若者には……特にあたしには！自由が必要なのです！――というわけで、あたしは自由を守るため退散します！またね！アガーテ姉さん！――ほら、ボサボサしないであんたたちも行くわよ！」

そう去っていく若人4人の背を優しく見つめながらアガーテは呟く

「――まあ……お前たちも、そんな優しさを振り払つて自分の道に進む時が、すぐに来るんだろうな……いや、もう来たのかもしれないな――アタシにできることは、道を違えないよう力を……背を押してあげるくらいか……」

——そうしてようやく対岸に渡り、冒険を始めた一同、そして森の中間にある開けた広場で休憩をしようと足を止める

「この広場にも、楽に来れるようになつたな：今ならタオ単独でも余裕で来れるんじやないか？」

「そんな怖い事、僕一人で出来ると思う？」

「ムリだな」「無理だね」「無理ね」

「――…僕が言い始めた事なんだけど、貌然としないのはなんでかな？」

「うつし、とりあえずここなら魔物も来ないし、一休みするか」

「そうだね、クリント王国の人たちも、ここに魔物が来ないことが分かつたから建物を建

てたのかもね」

「にしても、どこにでもあるよな、クリント王国の遺跡つて」

「そんなことないぞ？ここに移住する前に通ってきた道でもここまで多いのは見なかつたぞ」

「アンペルさんも、一地域でここまで多いのは珍しいって…僕らには見慣れた光景なんだけどね」

「うし、とりあえず俺が見張るからみんなは休んで——ライザ？」

「（広くて安全…頑丈な土台もある…近場には水も湧いて…湖に面しているけど、木々のお蔭で島からは丁度見えない位置…）」

「聞いてるのかライザ！」

「ここなら…えつ？あ、ああ、何？レント？」

「休憩しようつつったの！―――つたく、何一人でブツブツ言つてんだ？」

「こういう時、大概禄でもないこと考えてる時だな」

「なによその言い草はー…まあ、何でもないから気にしないで」

「変なライザ…さてと水筒…水筒…」

その時レントとカイルが森の方へ急に警戒をして武器を構える

「むつ!? 2人とも下がれ！」

「な、なに!? ま、魔物？」

「ん?―――この気配は？」

そうして森から出てきたのは見知った顔の二人組であった

「おっ？ 誰かと思えばお前たちか」

「アンペルさんにリラさん！——こんな所まで遺跡の調査に？」

「お…脅かさないでよ…安全なこの広場にまで魔物が入ってきたかと思ったじやないか

…」

「安全は安全として——」

「——警戒は怠らない：だろ？」

「うむ、まあ反応は良かつた、後は気配のした方角以外にも注意を向ける、賢しい魔物だとあえて気配を出してそつちに注意を向けさせてから奇襲するつてヤツもいる——あとはカイル」

「ん？ オレですか？」

「ああ、そうだ、気配の察知もよかつたが、気配を見極める術も優れてるようだな、ソレを極めれば目を瞑つても戦えるようになるから、鍛えるといいぞ——不測の事態で目が一時的に潰されるつてのはありうる話だしな」

「なるほど…そういうものか…」「ありがとうございます、リラさん」

「——この近くにも遺跡つてあるの？ あんまり聞いたことないんだけど…」

「あるなしを明確にするのも調査の一環さ——まあ、結論としてはなかつたわけだがな」

「ふうん…この広場の土台も態々調べるほどの遺跡でもないもんね」

「北の方に手を出すのは、まだ時期尚早だろうしな…まずは近場から足固めをしていく

つもりさ」

そう呟くアンペルをライザ一同は不思議に見ていた

「さて、私たちは帰るとするぞ…ではまたな」

そう言つてアンペルとリラは去つていった

「俺たちはどうする?」

「…そうねえ…近場で採取だけしたら帰ろうかしらね」

「ああ、時間に余裕をもつて行動しないとな」

そうしてこの日は近場で採取をして冒険を終えるのであつた

レシピ4——フラン

——前回の冒険から2日後・屋根裏部屋では、ライザ、タオ、クラウディアの3人が居た、ライザは練金釜に向かつて何かをしており、そんなライザをクラウディアは面白そうに眺め、タオは何やら新しい本に夢中になつてゐる……

「ふんふんふん♪…」れを…ああして…うん！閃きそう！——ん？タオ、あなたの今読んでるその本新しいわね、前の辞書はもう読み終わつたの？」

「分かりそうな単語の拾い出しが終わつただけだよ…本番はこれからさ、今はこの百科事典で単語の特定をしてるんだよ」

「百科…事典…？——クラウディアは知つてる？」

「商品として扱つてるのは見た事あるよ、沢山のものが解説されてる本…でしょ？」

「その通り、今まで眺めるだけで全く進展の無かつたものが、少しずつだけど、読み解けてゆけるのは楽しくて楽しくて堪らないよ」

「あんた、前から本なら変な笑み浮かべて全部楽しそうにしてたじや無い……アンペルさんは読み解いてくれないの？」

「明らかに間違いは指摘してくれるよ?——でも、まずは古い言語に触れ続けて感を掴めだつてさ」

「よく分からぬけど: そんなものなのね」

「あのね、ライザ——」

「——よう! みんな揃つてんな、ちょうど良かつた」「おはよう、みんな」

クラウディアが何かを言おうとしたが、そのセリフは部屋に入ってきた2人の挨拶にかき消された

「ん？ クラウディア何か言つた？」

「ううん…なんでもないよ」

「——ちようどつてなんなのさ？」

そのセリフを聞くとレントは懐から大きな羊皮紙をテーブルに広げた

「それは…地図？」

「ああ、家を引っ搔き回して見つけたんだ、街道しか描かれてないけど、目安にはなるだ
ろ」

「そんなの持ってきてどうするつもりさ……まさか…」

「ああ、そろそろ行動範囲を広げようと思つてな」

「ああ……やつぱり……迂闊に街道を外れたら魔物に襲われまくるよ……って言つても聞かないんだろうなあ…」

「村の大人たちみたいな事言わないでよ……それを言つたら小妖精の森だつて街道の外よ?」

「それはそなんだけどさ……あそこはまだ対岸近くだし…」

「大体、近場なんかで足を止めてられるかよ、知つてるだろ?俺の目標はあるの”塔”なんだとぞ?」

「塔…?あ、もしかして晴れた日に北の山間から見えるあれ?」

「うそそれそれ、街道の西側の果てに天高く聳えてる…らしいよ、実際に確かめた人は村には居ないけどね」

「村じや昔から、街道の西を「悪魔の野」って呼んで絶対に入つてはいけない禁足地にしてるんだよ…まあ、入つたからつて何があるとは伝わってないけど…」

「俺の夢は…そこを探検して親父や村の奴らをあつと言わせてやる事なんだ」

「お父さん…？」

「——いや、もう夢じやない…そこに向かつて一步ずつ進んでる現実だ」

「現実…か…あたしもそろそろ本気で、お母さんに叱られる現実をなんとかしないと…」

「——おつと、レント、アンペルさんからの伝言を忘れてるぞ」

「あ、いけねえ…」

「伝言?」

「ああ、明日の朝、アンペルさんの貸家に来てくれだつてさ」

「ライザだけ？」

「いや、俺たち全員でらしい」

「何の用なんだろう？」

「そこまでは聞いてないな…まあ、明日行けば分かることだ——ああ、ただ装備を一度手入れしとけと言つていたから、何かしらの採取とか依頼されるのかもしねりない」

「ふーん…丁度よかつたかも、前まで出来なかつた鍊金がなんとなーくできそうなのよね、試してみよう！」

そうしてライザが取り出したのは「多数のセキネツ鉱」「中和剤・赤」「自然油」「よく燃える樹皮」「アブラ木の実」「ハチの巣」…

「…おい…なんか、俺でもわかるくらいなんか材料が、発熱とか燃えるとかそういう性質なんだが…」

「ふふーん、クラウディアの前で鍊金術を見せるのは初めてかも?」

「おい、ライザ…もう爆粉うにはおなかいっぽいだぞ?」

「違うわよ!――前々から感じてたのよねえ:アレ(爆粉うに) つてなんか違うのよねえって」

「違う?」

「こう…何というか…芸術性が足りないというか…そう!…爆発が足りないのつ!」

「え?…まさか…アレですら満足してなかつたの?」

「いや…アレは爆発で攻撃してるつてより、ウニのトゲで攻撃してるというか:――

あたしが求めてるのは、アンペルさんが最初に私たちを助けてくれたみたいなヤツなのよつ！」

「なるほどな……それで、これから作ると」

「アンペルさんに最初に貰つたレシピがそれだと思うのよねえ……まあ、作つちやいま
しょ！」

そうしてライザは、材料をどんどん鍊金釜へ投げ入れていく……そして

「できたー！」

いつもの様に眩い光を放つた鍊金釜、光が収まつた後に覗いてみるとそれはあつた

紅い円筒状のものの中には淡く光が点滅するように見え、いかにもな導火線がくつ
ついたモノ

「ライザ、これは……？」

「フランムって言うみたい……この導火線に魔力を流すと発火して……火が本体に到達する」と……」

「到達すると……？」

「ボンツ……らしいわ」

「ボンツ……らしいのか？」

「本に書いてあるだけだもの、実際に使わないと分からぬわよ」

「頼むからそれ、島で使わないでくれよ？ 多分大騒ぎプラスお説教のコースになるから」

「さすがに私だつて島で使わないわよ……でも鍊金術士としての感が、コレに私の求めるものの一つがあるって言つてる気がするの……ド派手な音……眩しい閃光……あれを

もう一度…つ！」

「…不安だ」

そのカイルの一言がここにいる面子の心情を代弁していたのであつた

「ああ、後これ、これ見てよ！」

そう言つてライザが取り出したのは、普段ライザが戦闘に使つてるお気に入りの杖——ではない

「ん？ その杖が何かあつたのか？」

「よく見なさいよつ！ 全く違うものでしょーがつ！」

「いや、冗談だよ…んで、その新しい杖どうしたんだ？」

「作ったのよ、鍊金術で！」

「そうライザが掲げる杖は全体的に薄い赤色ベースに杖の先端は三日月を思わせるようなレリーフが特徴的だつた

「え？ 鍊金術つてそういうものも作れるの！？」

「ふふーん、凄いでしよう？ カイルにこの前、使わないからつていっぱい鉱石貰つたんだけど、その中にあつたやつで作ったのよ、それにこの杖つて不思議で、なんか日に当てると魔力が回復するのよね——ほんのちょっぴりだけど」

「ああ、あの鉱石使えたのか、それはよかつた」

「すげーじやねえか！……俺もそろそろ新しい武器が欲しいな……今度金貯めてフレツサさんに頼むか……」

「——そういう風に言うと思つてちゃんとレントとタオの分も作つておいてあげたわ

よ?…はいっ!」

そうして収納箱からライザが取り出したのはレントが今使つての大剣より幅が倍程もある大剣、色味は全体に紅く、レントの魔力を思わせるような似合つた一品になつてゐる

「まじか…まじかっ!」

「感謝してくれてもいいのよ?」

「ありがとう、ライザ!」

「なによ、そんなにすぐお礼を言われたら調子狂うわね…」

「いや、マジで嬉しいんだ…」

「そんなに喜んでもらえたら作つた甲斐もあるわね…」

「そうライザは少し照れ臭そうに頬を搔く

「でも大丈夫？ 前使つてた剣よりだいぶ大きいんだけど…」

「ああ、問題ない、ここで試し振りするわけにはいかないけど、このぐらいなら俺でも扱える」

「そう、ならよかつたわ——銘は「コロツサルエツジ」よ」

次にライザが取り出したのはタオのハンマー、さつきの二つとはうつて変わつて全体的に白いティスト、タオの体格に合わせられているため、若干小ぶりではあるものの、小ささを感じない魔力を秘めてるよう見える

「僕にも作つてくれたんだ…なんか魔力を感じる武器なんだけど…」

「それの材料に魔石の欠片を使つてみたのよ、そしたらそんな感じに」

「うーん…僕は戦わないに越したことはないんだけど…そもそも言つてられないよね、ありがとうライザ…レントと同じように銘はあるの？」

「あるわよ、「クレアエンパシー」ってのが」

「クレアエンパシー…うん、いい銘だね」

「よし！これで素材の採取もバシバシできるわね！」

「それが目的かよ…あれ？カイルには作つてないのか？」

「あー…それなんだけど：カイルの使つてる剣つて…」

「ん？昔にアガーテ姉さんが使つてた物を譲つてもらつたんだが…」

「それ、前に見せてもらつたんだけど…今のあたしが作れるものじゃ性能が下の物しか

作れそうもなくて…悔しいけど、作れなかつたのよね…」

「いや、気にしないでくれ——いつか、自慢の一品ができたときには是非使わせてく
れ」

「いつか凄いの作つて驚かせてやるんだから待つてなさいよね！」

そう言つてライザはますます鍊金術に意気込むのであつた

笑み

——次の日の朝、アンペルに呼ばれた一同は貸家に集まっていた

「——あたしたちをまとめて呼び出すなんて、何かあつた?」

「今回呼び出したのは私じゃなくて、リラの方だ」

「リラさんが?」

「ああ、レントへの教えがひと段落して、実際に使いものになるかどうか、そろそろ試してみようと思つてな」

「それって試験みたいなもの…?」

「そう思つてくれて構わない——少し前の調査で、対岸の船着き場の近くに、今のお前

たちにちょうどよいであろう場所を見つけてな」

「そこを探検して来いつて事か！腕が鳴るぜ！」

「船着き場の近く……もしかして、西側の鉱山跡？」

「3人で行つて、どんな場所か調べて、無事に帰つてこい——どこまで行くのか、何を見るのか、どんなものが、敵がいるのか、そのすべてが評価の対象だということを忘れるな」

「ん？ 3人……？」

「僕は怖いから、ライザ、レント、カイルの3人で行く……つてないよね……」

「ああ、カイル、お前は今回は居残りだ」

「？」

「まあ、何となく理由は分かるけど…」

「今回の場所だと、カイルを除いた3人にちよどいいくらいだ、つまりカイルは少しばかし試験という意味ではヌルくなつてしまふのでな——それに、お前たちの相手をしてるのは私たちの調査を手伝つてもらうためだからな、ある程度戦えなくてはな」

「その代わり、3人が帰つてくるまで、相手をしてやろう」

「良いんですか?:?」

「ああ、そういう約束でもあつたしな——あそこで、こういうものが手に入るはずだ、これを見つけてこい」

そうしてリラが手渡したのは、青色の金属光沢をもつ物質、大きさはこぶしよりも小さいくらいだろうか

「あ…それこの前カイルに貰つた鉱石…」

「ん? 知つていたのか? 採取できる場所とかは聞いたか?」

「ううん、聞いてない」「ああ、オレも教えてはいなかつたはず」

「ならしい、どう採るのか考えるのも試験だ、どこかに落ちているかもしれないし、魔物が持つているのかもしれない——分かつたら、出立の準備をして行つてこい」

「おうつ!」「はーい」「うう…」

——数時間後、カイルとリラが手合せしていると、2人はライザ達の気配を感じ、帰つて来たことを悟る

「ん、あいつらが帰つて來たみたいだ、今日はこんなものにして結果を聞きに行くぞ」

「はあ…はあ…あり…がとう、ござい…ました…」

——そして、ライザ達が見えると、思わずカイルが問う

「——なんで、模擬戦でボコボコにされてたオレよりお前らの方がボロボロなんだよ
⋮」

カイルの言う通り、3人はもう見るからにボロボロでレントとタオは憔悴とした顔をしているのと対照的に、ライザの満足気な顔が余計に異様さを醸し出しているのだつた

——時は、カイルを除いた3人が対岸へ行き、リラに言われたであろう洞穴の前に着いた頃に戻る

「リラさんが言つていたのは……多分ここ……だよね？薄暗いし、さすがにちょっと怖いかも……でも、これも鍊金術上達の為、頑張ろう！」

「ああ、その意氣だ！早速行こう！」

「僕も今回ばかりは、腹をくくるしかないかあ……」

——洞窟に入るとまずその景色に目を奪われる、壁面には魔石が生え、地面にはランタン草があり、外から見るよりも洞窟全体を明るくしている、また水場も見え、光が水に反射して幻想的ですらある

「思つたより、結構明るいわね……たしか、魔石の鉱山跡とかつて言つてたつけ……？船着き場の隣にこんな綺麗な場所があつたんだ……」

「アンペルさんは「水没坑道」って名付けたらしいけど……そのまんまだな」

「の、のんきだな二人とも……」、ここ強い魔物とか出てくるんじゃないの？」

「リラさんが試験に選んだ場所だ、油断してなけりや大丈夫つて感じだと思うぞ」

「…それって油断したら危ないって事じやないかー！」

「そんな大声で叫ぶと、魔物が寄つて来るわよ？」

「一ツ！一ツ！」

「まあ、そうむくれるなつて…よつし、じやあ慎重に進むぞ！——特にライザな」

「どういう意味よー！」

そうして暫く洞窟を進んだ先

「わあ…魔石の鉱山跡つてだけはあるわね、晶石とか魔石の欠片とか採取できるわ！それにパルマの木も生えてるから実も採れるわね」

「おいおい、あんまり採取に夢中になるなよ？——例の鉱石？みたいのを探さないと

いけないんだからな」

「そうは言うけど、リラさんは全てが評価の対象って言つてたじゃない？やつぱり鍊金術士としては、その場所でとれる素材の調査も重要だと思うのよね」

「む…それは確かに、そうだな」

「僕は地道にマッピングしてるんだから、あんまりあつちこつち行かれると大変なんだよ？」

「おつと、任せっぱなしで悪いな…今度マッピングもリラさんに習うか……ん、魔物の気配だ」

「ええっ！避ける事つてできないの？」

「いや、悪いが、ここら辺の魔物の実力を把握しておきたいから一合わせさせてくれ」

「そうよタオ、逃げてばかりじや素材も手に入らないんだから！」

「ライザは欲望に素直だよね…」

「——見えたわね：何あれ：人形？」

「いや…あればゴーレム種っていう石とかが魔力を帶びて、集まつてできた魔物だ」

「よく知ってるねレント…」

「ああ、リラさんに名前はともかく、大まかな種は教えられたからな！——行くぞっ！
ぜいっ！！」

そう言つてレントは勢いよく飛び出し目の前にいたゴーレム種「ストーンゴーレム」
相手に大剣で一閃する、しかし予想外のことが起きる

「——えつ…？」

レントは奇襲と牽制を兼ねて一撃を放つたつもりであった、しかしここでいくつかの要因が重なったことにより、予想外へと転じた

一つは「新武器を手に入れてから初めて振るつた相手」だつたこと、もう一つは「レントの実力」である、これはこの場所のこの難易度なら連戦しても余裕をもつて勝てる程度にリラが指定したが、リラはレントの武器が新しくなつたことを知らない——つまり武器も実力に加味した時、入り口近くにいた木つ端魔物相手では明らかにオーバーキルであつた

——つまり結論を述べると、魔物が真つ二つになり戦闘が終わつた

「……終わったよね？」

「…終わつたな…」

「…そんなにこここの魔物弱かつたの？」

「いや…多分弱くはない…はず、ただ昨日ライザに貰ったこの武器が強すぎるだけな気もする…」

「…まあ素材集めましょ、さつきレントが言つてたけど、鉱石とかで出来た魔物ならリラさんの課題の素材落ちるんじや?」

「可能性はあるな…」

——そうして素材を回収するが、課題の物は見つからなかつた

「…ダメだね—な、石やらアマタイト鉱はあるが、あの青いやつは見当たらねえ」

「うーん…てつきりこの魔物から落ちるものだと思つたんだけど…」

「ねえ…このゴーレム種つてのは鉱石とかで出来るんだよね?」

「ん?…ああ、そう聞いた」

「なら、今相手にしたゴーレムは石とかメインのゴーレムで、課題のヤツメインで構成されたゴーレムもいるんじゃ…」

「…つ! それよ! きつとそうよ! ナイスタオ!」

そう結論付けた一同は洞窟を進んでいくと見るからに青いゴーレム種を見つける

「…アレ、怪しいわね」

「でも、表面は氷で出来てるっぽいよ?」

「石とか鉱石で出来てるって、氷も含まれるのか…」

「幸い向こうがまだこちらに気付いてないし、昨日作ったフランを開幕に奇襲で使って一気に攻め立てるとか…どう?」

「見るからに氷だしな…そのフラムつてのは火が出るんだろう?」

「多分…」

「多分つて…まあ、まだ使つたことないものだしな…うつし、実戦で試してみるか!」

「最悪ダメージが出なくともサポートできるように備えるよ…確かにボンツつて感じなんだつけ?」

「それも多分…一応敵から離れててね? 多分巻き込まれはしないと思うけど…」

「そうだな、一応安全策を取るか」

——後々にレンントはこの時の自分の言葉に感謝をする「生死を分けた——」
と

「それじゃ、投げるわよっ！」

——そ ライザがフラムを敵に投げつけ、ぶつかる瞬間

ボ
ン
ツ

なんて生易しいものではなかつた、あえて言葉にするなら

——チユドドドドドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン——

「!!?」「うわっ!?」

「何だこの威力……すげーじゃねーかライザ！……強そうな魔物が一撃で瀕死に……よし、追撃を……——ライザ？」

レントがライザの調子がおかしいことに気付くと追撃をやめて、声を掛けるが…

「アハツ」

そこには、恍惚な笑みを浮かべ、頬を上気させたライザがいた

ここで一つ不幸があつたとすれば、爆発の威力は本来はそこまで高いものではなかつた、しかし、洞窟という環境で使つたフランは、ほの暗い環境で光が強く見え、閉鎖された空間による音の反響があり、平地で使うよりも倍以上もの音に錯覚させた——つまりライザは自分が作つた道具が想像以上のモノである事を目の当たりにしてハイになつた

「——フランツ！——フランツ！——フランツ！！！——フランツ！！！：コンバート

!――フランツ!!」

そこからは酷かつた、瀕死の魔物に狂ったようにフランツを投げつけるライザ、それを止めようにも、あまりの豹変ぶりに言葉が出ないレントとタオ、このライザによる宴はコンバートできるアイテムが無くなるまで続けられた……たとえ魔物がもう粉々どころか消失と言える段階になっていたとしても……

自己把握

——そして時はクーケン島へライザたちが帰つて来たところに戻る

「——そこからが大変だつたさ…」

「——ああ…ライザが落ち着いた後は、課題の鉱石が落ちてないかと探したが、小指の先つちより小さいのしか見つかなくて、これじゃあ合格にならんと、洞窟中を駆け巡つたさ」

「でもね…ライザが爆弾を投げまくつた音のせいか、魔物はみんなどこかに隠れちゃつて…」

「それで何とか駆けずり回つて、ようやく見つけて目当てのものを手に入れた…って感じだ…」

「……悪かつたとは思つてゐるわよ…」

「…………確かにこれだが……何とも評価を付けずらい……きちんと周辺の地図は作つてい
るし、素材の回収ポイントもつけているが…………まあ、目的を達したしいとしよう
……どうやら新しい場所でもなんとかできる程度には実力も心構えも出来たようだ、突発
的なトラブルの解決も含めてな」

「リラさんが寛大で助かつた……」「あざーつすー…」

「それじやあ……合格でいいんですか？」

「何を期待していた？――いや、不安に思つていた？」

「今日の試験は、お前たちが新しい場所を、お前たちだけの判断で探索できるかの予行演
習だ」

「俺たちの判断だけで…」

「最低限のことは教えた、後は自分で考えながら各自が決めていくことだ」

「自分で、考えながら…」

「それはそれで不安だなあ…」

「その通りだ、自分で考えながら行動することは今日の試験よりずっと難しい——

「——だが、楽しくもあるはずだぞ？ 知らない場所を自分の足で歩いて、どう感じた？」

「——ああ：なんだかんだあつたが楽しかつた…つ！」

「思つたよりすぐ終わつちやつたけど、あれこそがあたしたちの冒険だつたのかな？」

「私たちは今後、私たちの調査を本格的に始める——お前たちはお前たちで勝手にやれ」

「ま、いざとなつたら助けてもらうつもりだがな——ああ、それとライザ」

「?」

「新しい材料で調合するつてのは、なかなか楽しいぞ?——未知を求めて冒険に出るのも大いにありだ」

「——…うんっ!!」

「だが、爆弾はそこそこにしておけ…」

「——…うん…」

こうして試験を無事？に乗り越えたライザたちは解散するのだつた

——次の日、ライザは新しい素材のことでアンペルに相談しようと貸家に入る
「こんにちは……つてレント？」

ライザの言う通り、そこには先客であるレントがリラに何かをされていた

——痛てて……もう少し優しく手当てして……痛つたあ!?」

「一々やかましい、大人しくしていろ」

——レント、その怪我どうしたの!?まさか昨日の成功から増長してリラさん相手に
挑んだんじや…

「そんな命知らずな真似ができるかつ!——あ、痛たたたたつ!」

「いきなり傷だらけで転がり込んできた——訳を聞いても何も言わん」

「ボオスたち：じやないよね？」

「はんつ……今更あいつら相手にやられるかよ——相手は親父だよ」

「あつ……」

「親父？ 親子喧嘩にしては、ずいぶん容赦ないな、骨折一步手前の打撃だぞ」

「あれでも元傭兵だからな：腕つ節だけは強いんだ：今じやただのゴロツキだけどな」

「また殴られたんだ：いい加減村の人に相談した方が……」

「相談したところで、何も変わりやしないさ、誰も彼も煙たがつて遠巻きに見てるだけさ
——実際そつちの方が安全だし助かるがな」

「なるほど、傭兵崩れのならず者か」

「そういうこと…どこ行つても鼻つまみ者の乱暴者——故郷のこの島に帰つても同じで、母ちゃんも逃げちまつた」

「レント…」

そう呟くしかできないライザは、再び自身の無力さを認識し、悲しげに俯かせる

「あんな奴の息子だからって俺まで皆につて痛つたあ!? いきなり叩かないでくれよリラさんつ!」

「私は愚痴に付き合うつもりはない」

「つ…だよな、ごめん——」

「——だから解決策だけ言つてやる、親父よりも強くなれ——それだけですべてが変わる」

「つ!!——そう……だな……ああ……そうする、絶対にだ!」

「ありがとうリラさん…」

「感謝されるほどの助言ではなかつたはずだ、後はライザ、お前が手当てしてやれ——これも訓練だ」

「うんっ! リラさんの代わりにあたしがやるか——レントだし傷薬さえあればいいでしょ」

「この扱いの差よ……でも、傷薬があるなら助かるな、頼んでいいか?」

「じゃあすぐに作つて来るね! 少しだけまつてて!」

そうライザが言うと飛び出すように屋根裏部屋に向かつていった

道中ライザは旧市街からラーゼン地区へ入ると見知った顔を見かける

「あれ？ タオ？ あんたどうしたのよ、 そんなに大急ぎで走つて」

「あつライザか：ごめん、 今急いでるんだ――向こうでボオスとランバーに出くわしちやつて…」

「こうして、 本を守つて逃げてるのは、 僕がライザたちと出歩いた成長の証だよ」
「いでしょ！」

「こうして、 本を守つて逃げてるのは、 僕がライザたちと出歩いた成長の証だよ」

そうタオが誇らしげに掲げる本は、 傷も汚れも一つもついていなかつた

「——散々冒険に付き合わされたおかげで、こうして本を守れるくらいには逃げられるようになつたんだ、ケンカは元々得意じやないし、例えケンカで勝っても手を怪我したら折角の本が読めないじやないか！——僕にはそれで十分なんだよ」

「そういうもん…かなあ…？」

「相手は魔物じやない、ボオスたちなら命の危険もない——なら面倒くさいことはせずに逃げれば解決、これが僕の結論さ！」

「…なんか変なところで図太くなつたわね…」

「なんせ切望した古書を読めるようになつてきたからね——余計な事には気を遣つてらんないよ」

「割り切つたわねえ…そういえば一度聞きたかつたんだけど、あんたつて本で得た知識を何の役に立てたいの？」

「役に立てる…？」

「…えつ？ 何でそこで疑問符なのよ」

「いや…考えたこともなかつたから…僕は知識が面白くて楽しくて本に夢中になつてたから…」

「なかつたつて…じゃあ何のために必死で解読しようとしてるの？」

「何のために…か…ライザも知つてるだろ？ 僕の家の書庫」

「あたしの爆粉うに以上のあの山ね…」

「ひい爺さんが事故で死んじやつてからは、あの本の山は誰に読まれるでもなく何十年も埃をかぶつてたんだ——僕は知りたかつた、物心ついたころにはあつた謎の文字に記号、図面…それらの意味を——山積みになつている量だけの何かが、きつとそこに込められているはずだつたから…」

「——そして、今アンペルさんのお蔭でようやく一步を踏み出せた——まだ完全
じやないけど、ちゃんと意味があると分かつた——だから知りたいんだ。あの本に書
いてあることの全てを!——ライザに言われて、いま改めて感じたよ、何のために
だつて?——ただ知るためにさ!!」

タオのその叫びは本能の渴望：タオの原初の願い——何のため？人の役に立てる
？意味がない——自分の為、目の前にあつた疑問を解決する、そう自分自身の為に知
る——それ以上でも、それ以下でもない、徹頭徹尾自分の為——普段のタオからは
感じさせない傲慢なまでの自己欲求——しかしそれは責められるものではない、歴史
を動かしたのはいつだつて自分の為と真っ先に動けた者なのだから

「…なんかすごいわね」

そんな中ランバーの声が遠くから聞こえる

「はあ…はあ…あつ！あんなところに！ボオスさん、タオがいましたよー！」

「——そんなわけで、僕は余計なケンカはせずに逃げるからね！また!!」

そう言い残し、疾風の速さで遠ざかるタオを見つめライザは呟く…

「これも…成長…なのかな？」

自身の渴望を見つめなおしそこに向かってひた走る——これも間違いなく成長で
あろう

最後に踏み出す

——タオとの一幕はあつたが、それはさておき屋根裏部屋に着いたライザ
 「よつし！早速傷薬を作っちゃおう！」——この前作ったグラスビーンズをベースにレ
 シピ変化で…うんっ行けそう！」

まずはグラスビーンズと同じ材料を投入した後、新たに「苦い根っこ」を入れ、品質
 を高めるために、さらに花と苦い根っこを入れる…

「よつしできた！——「施しの軟膏」つてどこね」

ライザが掲げるそれは、グラスビーンズとは異なり液状だが粘度のある塗り薬・色の
 み深い緑色の共通点があるくらいか

「——早速持つて行つてあげなきやね」

——再び貸家に戻ってきたライザ、それをリラが迎える

「早速傷薬を持ってきたようだな——ん、効果もよさそうだ、レントこれを使え」

「やれやれ、助かつたぜ：ありがとうな」

「対して強い薬でもないと思うけど、骨まで折れるわけじやないんなら何とかなるんじゃないてきたな」

「しかし、傷薬を持ってくると言つて、すぐに鍊金術で作つてくるあたり、鍊金術士っぽくなってきたな」

「えへへ…そつかな？」

「全くだ、新しい武器も作つてもらえたし、頼りになるぜ」

「（そつかあ：それならちよつとくらい自慢しても…いいかな？——でも、自慢話に付き合つてくれそうのはいつもの男ども以外だと：クラウディアに話に行こう）」

—————思ひ立つたが吉日、同じ旧市街に住処を構えてるのもあり、早速クラウディアの屋敷を訪ねるライザ

「——やつほー、クラウディア、遊びに来たよー」

「いらっしゃいライザ、せつかく来ててくれたしお菓子とお茶の準備をするね」

「え？ いいの？ ありがとう…つてそれ目当てできたところもあるのよねー」

「ふふつ…この前に貰つたクッキーのお礼とでも思つてくれていいよ」

そうして少女は仲良く部屋で談笑をする

「——さあ、できた、どうぞ、召し上がれ」

「わあ……お菓子もおいしいけど……クラウディアが淹れてくれたお茶もすごく香りが良くておいしい……」

「そう? お茶はいい葉を使つてるかもしないけど、お菓子は私が焼いたクッキーなんだよ……この前貰つたクッキーが美味しかつたから少し真似てみたんだ」

「へえ、すごいなあ……あたしそういうの全然ダメでさ……クラウディアのこと尊敬しちゃうなあ……」

「料理なんて、やる気さえあれば何とかなるものだよ、ライザ」

「う、つ……それ言われると少し弱いかもなあ……」

「——私より、ライザたちの方がずっとすごいよ……あれからみんな頑張ってるんでしよう?」

「まあね、レントもタオもそれぞれ理由があるからがむしやらに突っ走ってるよ、カイルも最近レントの実力が追いつかれそうになつてるからって、アガーテ姉さんに鍛えなおすして貰つてるみたいだし」

「そんなライザだつて、鍊金術を頑張つてるんでしょう?」

「うん、だんだん調合のコツがわかつてきた気がしてさ——もう、どっぷりハマちゃつてる」

「へえ……確かにこの前屋根裏部屋で見せてもらつたときにすごく楽しそうにやつてたもんね」

「あはは……なんかそう改めて言われると照れるな……採取とかする時には3人に手

伝つてもらつてるから、遠出にも皆慣れてきたみたい

「(いいなあ…)

そう小さく呟くクラウディアには友達と言いつつ、一人冒険をできないことへの寂しさを感じられた

「——私も、みんなと冒険に行つてみたい…」

「えっ!?……うーんと…そう…だね…」

「やつぱり…ダメ?」

「ううん、そうじゃないの——わたしたちがクラウディアを守れるくらい強くなつたら、クラウディアのお父さんに相談しよう…約束するわ」

「本当っ!——ありがとう!ライザ!!絶対に約束だからねっ!」

「う、うん…約束ね…」

——こうして二人の少女は約束を交わす、いつかみんなで新しい地へ冒険に行くために…

数日後、屋根裏部屋にて

いつもの様に鍊金の研究をしてると、下から母の声が聞こえてくる

「ライザー！お客様よー？バレンツのお嬢さんー！」

「はーい！上がつてもらつてーーーなんか、お母さんクラウディアにだけ態度が違
うんだよなあ…」

「それは、オレたち悪ガキ4人組じやないからだろ」

「……それもそうね」

「失礼します、こんにちはライザ」

「いらっしゃいクラウディア、本当に何もないけど、ゆっくりしていって」

「ありがとう——今つてライザ一人？」

「——すまんが、オレもいるぞ、レントとタオは用事で居ないが……つてそのフルート：オレはお邪魔だつたかな？今抜け——」

「——すうー……はあー……よしつ！——ううん、待つて、2人が相手なら……勇気を出せ
ると思つて……その聞いてほしいの……私の……フルート……」

「フルート……聞く……つて、聞かせてくれるの!?」

「みんなが頑張つて聞いて、私も考えたの…ううん、違う――羨ましくなったの…」

「クラウディア…」

「どう…かな?」

「いいよ、もちろん大歓迎!…でもあたしつてそういう音楽とかの教養っぽいのとか、全然分からんんだけど――それにカイルもいていいの? 邪魔なら追い出すわよ?」

「そんなこと関係ないよつ! ただ聞いてくれる…それだけでいいの――それにカイル君とはこの前ライザたちが冒険で居ない時にお話ししてね? ライザたちの幼いころどんなだつたかを話してくれたお礼と思つてくれれば…」

「うえつ!――ちよつとカイル! 変なこと教えてないでしょ? う!!」

「うん? ライザ考案の落とし穴とか、家の下に穴ほつて脱出計画に使おうとして失敗した話とかしかしてないぞ」

「碌な話ないじゃん! まつたく、それじゃクラウディアよろしくお願ひします」

「ふふつ…それじゃあ改めて聞いてください…」

——クラウディアはフルートを口にあてがい、ゆったりと吹き出す



その音はとても透き通っていて、まるで森のせせらぎを思わせるような優しい音色
だつた

「（音楽のことは分からぬけど…凄くキレイでステキな音…）」

「（――ん？なんか魔力が…？気のせい？しかし、こう、心が安らぐ…）」

「――ふう…ご清聴、ありがとうございました」

クラウディアがそうお辞儀するとライザもカイルもようやく現実に帰つて来たようにハツとする

「――すごく…すごくキレイな音だった、クラウディア！何というか…とにかく…こう…すごいキレイだった!!」

「——語彙力皆無かよ……いや、でも本当にすぐかつた：思わず我を忘れて聞き惚れてしまつた…」

「あ、ありがとう……私も…すぐ、すぐーく嬉しい！2人ともっ！——勇気を出して…よかつた…——そ、それじや、私、戻るね！——今日はフルートを聞いてもらうために來たからつ…！」

そう言うと少女は緊張からか顔を赤く染め、慌てるよう部屋を出ようとすると

「うん、また聞かせてね！」「ああ、是非もう一度聞きたい」

「うん！いつか、また！」

そう言い残し今度こそ部屋を出て行くクラウディア、それを見送ったライザとカイルは顔を見合わせる

「…あんなに照れなくてもよかつたのにね、すぐくステキだつたし」

「ああ……正直音楽なんて首都にいた頃も触れなかつた分野だ……あんなに心に響くとは
…」

こうして島に来たばかりの少女も遂に一步を踏み出す――これは今後の大冒険を
予感させる素晴らしい物語の幕開けになるのだつた

――それと同時に一つの影もこの島に密かに近づいていた……

——「小妖精の森・最深部」
いつもと変わらぬ日々を過ごす森、魔物であるオオイタチですら今この瞬間は安寧を
享受していた

——ソレの影が見えるまでは

この辺りどころか、普段ならお目にかかるないような体躯の4足のナニか、外見はカ
ブトのような角を持ち、亀のような大きな甲羅らしきものを背負っている、その甲羅の

背には雰囲気には似つかない鉱石宝石が生えている：

見たことないナニか、あまりの異様な気配にオオイタチは威嚇の声を上げると同時に逃げ出した

——そいつはただ森を見つめ、歩みを進めるのだつた：

第二幕

まずは一步の始まり

完

ゲーム風ステータス集（第二幕終了時）

○カイル・シュナイダー

L V ————— 20

武器：片手剣

アクティアブスキル

「剣戟」

敵単体に物理ダメージを与える、APを回復する

「カウンターライトニング」

行動を行えなくなる代わりに、敵の次の攻撃をかばい無効化する、中確立で麻痺を付与する（全体攻撃と大技は無効化できない）

+ 麻痺の付与確率が上がる（TLV25）

+ 麻痺を確定で付与し、追撃を行う（TLV5）

「スラッシュ」

※ノーマルオーダー達成時に発動

敵単体に魔法ダメージを与える

???

パツシブスキル

「在りし日の約束」

与える魔法ダメージが上昇する

「お人好し」

ライザ、レント、タオのいずれかがPTにいると、WTが減少する

「頑強LV1」

最大HPが少し上昇する

「鉄壁LV1」

防御力が少し上昇する

外見

光の加減によつて薄董色にも金色にも見える淡い髪色、髪色とは正反対に深い海を思わせるような藍い瞳、身長は170cm前半程、体は度々よく鍛えてるのか、筋肉質というよりは程よい機能美を感じる、服は海の色を思わせる青色で統一された軽装

○ライザリン・シュタウト

L V ————— 15

武器：「杖」（ヘリオプロクス）

アクティブラッシュキル

「ライザスペシャル」

敵単体に物理ダメージを与える、APを回復する

「コーリングスター」

敵単体に魔法ダメージを与える、ノックバック量が大きい攻撃

+ブレイク値が上昇する（TLV2↓）

+ノックバック量が増加する（TLV4↓）

「シャイニートレイル」

敵単体に魔法ダメージを与える

+効果範囲が全体になる（TLV3↓）

独自設定：スフィア型の起点を先に上空へと投げて、任意のタイミングで発動する異

型魔法

「アストラルスファイア」

※アクションオーダー達成時に発動
敵単体に魔法ダメージを与える

パツシブスキル

「ポジティブスタンス」

敵に与えるブレイク値が上昇する

「全力系鍊金術士」

タクティクスレベル3以上だと、与えるダメージが増加する

「頑強LV1」

最大HPが少し上昇する

「鉄壁LV1」

防御力が少し上昇する

「爆弾魔」

（爆発）を持つ道具の与えるダメージが上がる

○ タオ・モンガルテン

L v ——— 15

武器：「槌」（クレアエンパシー）
アクティブスキル

「黒鳥の羽」

敵単体に物理ダメージを与える、APを回復する

「闇夜の帳」

敵単体に魔法ダメージを与え、中確立で毒を付与する

+ 毒の付与確率が上昇する（TL v2→）

+ 高確率で呪いを付与する（TL v4→）

「操術・絡縛り」

※アクションオーダー達成時に発動

敵単体に物理ダメージを与える、ランダムな異常状態を1個付与する

パッシュブルスキル

「追撃の心得」

ブレイク時の敵に与えるダメージが増加する

「強制Lv1」

攻撃力が少し上昇する

「虎視 Lv1」

クリティカル値が少し上昇する

○ レント・マルスリンク

Lv——15

武器：「大剣」（コロツサルエツジ）

アクティブスキル

「マーシャルアーツ」

敵単体に物理ダメージを与える、APを回復する

「ブラッドスラスト」

敵単体に物理ダメージを与える

+攻撃力を低下させる（Lv2）

+与ダメージの一部を回復（Lv4）

「タービュランス」

※アクションオーダー達成時に発動

敵単体に風属性の物理ダメージを与える

パツシブスキル

「頼れる兄貴分」

ブレイク耐性が上昇する

「我流の剣術」

タクティクスレベルが2以上だと、与えるダメージが増加する

「頑強LV1」

最大HPが少し上昇する

「鉄壁LV1」

防御力が少し上昇する

第三幕 変わりゆく人々

一人前として

——各々が一步を踏み出し、新たなる生活が始まつてから数日後のライザの家にて

「——ライザ！いい加減、農作業を手伝つてちようだい！」

「だから、今は鍊金術の研究で手が離せないって言つてるでしょ！」

「またそれかい：わけわからないものに熱を上げて、農作業を疎かにするなんて、母さん許さないからね！」

親の心子知らず——母であるミオから見れば、鍊金術というのはナニかよくわからぬい変なものにしか見えない、そして、そんなわけ分からぬのに熱を上げるのなら、農

作業もして最低限の知識等もつけてほしい：ライザもライザでミオに對して説明をしていないのが、誤解に拍車をかける

「わ、わけわからないものつて何よ!?」

「変な道具使つて変なこと始めたつて方々で噂になつてるわよ…まつたく」

「何でそこで「まつたく」なんて感想になるのさ！——言うなら「すごいわね」でしょ！？」

——正直に言えば、ライザの感想も強ち間違いではない、それが鍊金術士がありふれてるとは言わないが、そこそこいる大きい町などでは：しかしここは閉鎖された辺境の島、新しい＝不気味にしか思えない固執した考えが凝り固まっているのである

「いつもみたく、レントやタオ、カイルと遊ぶだけならまだしも、今度はバレンツのお嬢さんまで巻き込んで…」

「なによ……お母さんは何にも知らないくせに！——鍊金術は遊びなんかじやない!!」

そう叫ぶとライザは屋根裏部屋に駆け込んでいった

「あつ……ライザ……あたしは心配でしようがないよ……何か危ない事でもしてるんじゃないかって……」

子の心親知らず——ある意味頑固な似た者親子であつた：

————暫くしていつもの面子が屋根裏部屋に集まると、思わずライザが愚痴る

「——つて、鍊金術のことを変な遊びとかお母さんがさ！皆もひどいと思わない？」

「色々頑張つてるつもりだつたけど……ミオさん——いや、村の連中の認識も、その程度なんだろうな」

「島にこもりつきりの大人たちの頭の固さは筋金入りつてことだよ…まあ、わかり切つてたことだよ」

「新しいことは何でも、うさん臭く感じるわけだ——新しい商売を始めるモリツツさんがましに見えるな」

「まあ、みんなそんなに邪険にするな…大人たちだつて大人たちなりに考えてるんだ——それにライザもレントもタオも今やつてることを、対岸に行つて魔物を倒してることとかちゃんと説明してないだろ?——なら多少なりとも不審に思われても仕方ないさ」

「いや…まあ、それはそうなんだが…」「…僕もそれを言われると弱いな」

「とにかく…こんながみがみ言われるような環境じや調合に集中できないつてわけ!…そこで!——あたしに1つ、とんでもなく素晴らしい名案があるので!!」

「3重で自画自賛するな…」

「はーいはーい、伺いましょうか、鍊金術士殿——何でしようかね、その名案つてのは」「レントそんなに茶化して……いいわ、後悔させてあげる——名案とは、あたしたちだけの秘密の隠れ家を作る、よ!!」

「——なるほど……出入りするだけで何か言われるなら、実家の屋根裏部屋から、本拠地を移しちゃうってわけか」

「本当に名案じやねーか、恐れ入つたぜ」

「ふふん！もつと褒めなさい！」

「すぐくステキな案だと思うよライザ——私たち……私たちだけの隠れ家、だもんね」

「そうつ！あたしたちだけのね……あつ、でもアンペルさんやリラさんには教えておきたいかも」

「まあ、あの二人も仲間みたいなものだしな」

「それで、肝心のその隠れ家とやらは、どこに作るつもりなんだ、やっぱり対岸か？」
「もちろん、小妖精の森の半ばの魔物が寄り付かない広場があつたでしょ？ あそこなら
いいと思うんだ」

「対岸…確かに村の人には絶対に見つからないね」

「ああ、土台も遺跡のを使えば地盤工事とかも考えなくて済むな——確かに名案だ」

「すごいよ、ライザ！ 自分たちだけで家を建てるなんて…そんな難しそうなこと、私じゃ
絶対に思いつかないよ」

「うんうん…そうでしょそうでしょ…あたしの発想は…つん？…家…？」

「えつ?」 「オイ」 「ええ:」

「———一応聞いておこうか、家を建てずにどうやつて隠れ家になるんだ? まさか野晒つてわけにもいかんだろう」

「あははー…そういうえば、隠れ家つて…家が必要だつた…かな?」

「かな、じやねえ…つたく、気分だけで盛り上がりが馬鹿みてえじやねーか:」

「隠れ家つて自分で言つただろうに…」

「それは、こう…鍊金術でパパーつて建てる…つてわけにはいかない?」

「何でオレらに聞くんだ: 鍊金術士なのはライザでしょうが…」

「ア、アンペルさんに相談してみるのはどうかな?…何かヒントをくれるかも」

「そうだね…うん、 そうしようかな」

——場所は変わつてアンペルリラの貸家の前にライザとカイルは居た

「いや…オレ付き添う意味あつたか…?」

「いいのよ、あんた大工もどきみたいのも出来たでしょ、なんかそういう観点でも助言聞けるかもしれないじやない」

「いや、確かに漁で使つてる小舟は作つたが…ちゃんと教えられた技術じやないぞ?」

「いいのよ、タオもレントもそう言うのはダメだから多少なりとも知つてる人に付き添つてほしかったのよ」

「まあ、それでいいならいいが…」

「つべこべ言わない！早速行くわよ」

そうして二人は家に入つて早速事情を説明するのだつた

「——そんなわけで、隠れ家の建て方とか鍊金術とかを使つてできたりなんてしないかなー……なんて」

「確かに気軽に頼れとは言つたが：独り立ちしたばかりだろうに——自分たちの為の隠れ家作りで早速ねをあげるのか？」

「…それもそうよね…」「まあ、 そうなるか」

「大体、鍊金術士が作ろうと思ひ立つたなら、それがなんであれまず自分でレシピを想像するべきだ——安心しろ、鍊金術士としての腕前はおまえさんもう一人前だ、だからこそ私の教えにとらわれない独自の閃きを探せ」

「えつ…？」

「柱なら柱。壁なら壁……いや、家丸」とすらも調合の結果として捉え、そこからレシピを想像する……」

「レシピを……想像する……他に鍊金術で作る道具みたいに……？」

「重要なのは、想像と創造を直結させる：勘だ——私なら材料は想像を実現するための踏み台……触媒と考える」

「やっぱり鍊金術って魔法に近いものがありますよね……自分の思いを具現化する術が魔法でもありますし」

「魔法程自由の幅は広くないがな、その代わり魔法は個人の範疇に収まるが、鍊金術は材料によつて左右する……つまり使うものによつては一国の価値に相当するものですからできるという強みがあるがな」

「……あたしたちの隠れ家……創造……想像……材料……うん！なんとなくわかつたかも

!!

そう言葉を発すると、勢いよく家を出ようと駆け出すライザ

「——あつ！……ありがとうアンペルさん！」

「——ふん、お前が私の独り言をどう活かそが私の知つたことではない……精々驚かして見せろ」

「分かつた、凄い隠れ家を作つて、二人を招待するからねっ！」

そう最後に言い今度こそ家を飛び出すのをアンペルとリラは見送るのであつた

「——つて、おい、ライザ！……たく、つれて来ておいて置いていきやがつた……」

「…くくつ」

「——なんだ」「どうしたんですリラさん?」

「いやなに、鍊金術士というのはどいつもこいつも可愛いくないとなれんのでは、と考えていただけだ」

「…ふん」

「…まあ、何となく言いたい事は分かりますね…」

「…それはそうとお前はあいつを追わなくていいのか?」

「…いや、まあ…あいつに振り回されるっていうか、あいつが一人で突っ走っていくのは慣れてるんで——だからこそ、オレはあいつらを導けるように、急いでいかなきゃな……それではお邪魔しました」

きっと今のことではない抽象的な表現でカイルなりの思いだつたのだろう、その言葉を二人は黙つて聞き、カイルが家から出るのを見送るのであつた

「——リラ、お前さんは私を可愛いというが、私はああいうのを可愛いって言うと思うんだがな」

「どちらかというとあいつらが可愛いのかもしれんな……いつの時代も若いやつらは眩しいな」

「私をお前さんと同じような年増と一緒にされちゃ困るな……あつ、いや、また、撤回する、だからその振り上げた拳を——」

そうして、貸家では暫くアンペルの悲鳴が響いたという…

レシピ5——薪割り斧

ライザはアンペルの貸家より走つて屋根裏部屋へ帰つてきて、勢いよく扉をあけ放つ

「——分かつたわよっ！」

「——うわっ！？：何だライザか、びっくりしたなもう…」

「…分かつたつて…？もしかして家を建てる方法！？」

「そんなに大きくならないだろうとは言え、仮にも家だろ？そんなすぐに思いついたのか？」

「そうだよ、あんまりテキトーに作つても、崩れるんじや…」

「ん……アンペルさんみたいに上手く説明はできないけど……あたしの隠れ家の完成形をイメージしてみたの」

「イメージ？」

「そう！ 家ならどんな材料が必要で、どれくらいの量がいるとかある程度推測できるじゃない？ —— それが分かれば、鍊金術でどう調合すればいいのかもなんとなーくわかつてくるつてわけ」

「へ、へえ……そなのか……」

「ちょっと待つてね……ええつと……コレと……あとコレにコレも……」

「そう呟きながら何やら棚をあさるライザ、普段その棚にはこれまでの冒険で集めた素材の目録等を置いてあることから、何かしら必要であろうモノを見ているのであろう

——できた、多分この目録の材料があれば、隠れ家が建てられる……はず」

そう言つてみんなに見せたメモには

- ・アイヒエ（木材）×5つ
- ・その他木材×5つ
- ・木の実×5つ
- ・風化した石材×5つ
- ・その他石材×5つ
- ・燃料類×5つ
- ・塩草×5つ
- ・やわらかい砂×5つ
- ・砂類×5つ
- ・水類×5つ

「――…やたらと多いな…いや、家を建てるにはむしろ少ないの…か？」

「この3つというか、3分割？した意味つてあるの？」

「うん、上から順で大まかに屋根、壁、装飾かな?」

「なるほど…いや、理解したわけじゃないが」

「――この材料から調合…そして組み合わせて完成へと繋がっていく…あたしの…鍊金術士としての確信つてヤツ――信じてくれる?」

「…ま、面白そうではあるか…このメモの材料を用意すりやいいんだな?」

「僕もどうやつて隠れ家が出来上がつていくのか興味が出てきたよ」

「(私も…採取についていけば、本当の仲間に…)

「ん?クラウディア何か言つた?」

「う、ううん、なんでもない――私にも何か手伝えることってないかな?」

「クラウディアには、完成後に手伝つてほしいかな、レントとタオやカイルのセンスだと、どうしてもオシャレになるイメージないし」

「ずいぶんな言い草だな：折角手伝つてやるつて言つてんのに」

「あんたも完成したら使うんだから手伝うのは当然でしょ！」

「ライザはもう少し僕らがいるありがたみについてちゃんと認識してほしいところだよね…カイルだつていつも…ん？ そういうえばカイルはどこに行つたのさ？」

「え、カイル？ あたしと一緒に――あつ…」

「ライザと一緒に出て行つたから、てつきり帰つて来る時も一緒に…おかしいなとは思つていたが…さてはまた気がせつて飛び出して来たんだろう…」

「あははー…ま、まあカイルだしいいかなつて」

「——聞こえたぞライザ、全く無理やり連れだしておいて置いて行くとは…」

「げっ!? カイル」「噂をすればってやつだな」「あ、カイルおかえり」「おかえりなさいカ
イル君」

「それでどんな感じに纏まつた?」

「あ、うんそれでね——」

「——なるほどな、それでこのメモが：しかし木材か：細い枝なら剣でも斬れなくは
ないが：」

「家に使うくらいだからそこそこ太目の丸太がいいかも：」

「だよな……何本か切り倒さないといけないだろうしな……ん？ そういうえば草刈り鎌も作つてたよな……斧とか作れないか？」

「ん……作れそう！——今作つちやおつか！」

「え？ 別に今作れとは——」

そういうと善は急げとばかりに鍊金釜へ、木材、アマタイト鉱で作つたインゴット、自然油を入れるライザ——そしていつもの輝きを放ち

「できたー！ 薪割り斧よ！」

「……瞬で出来たな」

「まあ、それを使つて木材は確保するか」

「じゃあ、私はみんなが採取してる間、お弁当やおやつを用意して待ってるね」

「本当? 前に貰ったクッキー美味しかったんだ、俄然やる気が出てきたよ」

「むしろそれの為だけに手伝うのもアリだな…」

「ああ…あれは美味しかった…きっと将来の旦那さんは幸運だな」

「そんな…私の腕なんて大したものじゃ…照れるよ…」

「あんたらねー…クラウディアが可愛いからって…――あつそーだ、作つた材料の管理はみんなに任せていい?」

「ん?・またどうしてさ」

「いやー…あたしが持つてると鍊金術の素材にしちゃいそうで…」

「…それもそうだな、気がついたら使つてたとか容易に想像できるな」

「そうそう！」

「いや、偉そうに言うなよ……何にしてもやることは決まつたわけだ」

「ああ、早速素材を集めて隠れ家を作りに行こう」

「」「「おーー..」」

——場所は変わつてクラウディアを除いた4人は小妖精の森へ来ていた

「——アイヒエつてこの木…だよな？」

「そうそう、それそれ…じやあこの斧をあげるからちやちやつとやつてちようだい」

「つて俺がやるのかよ…」

「そらそうよ、木の切り倒しなんてか弱い女の子にやらせるんじゃないわよ」

「…か弱い？」

「あーあ…タオも学習しねーな」「ナム…」「あ…今の…無しじや…ダメ?」

「…タオ、あんた後でそこの草むらの後ろに来なさい」

「そ、そんなあー…」「まあ、致し方なし」「成仏してくれ」

「――うつし、遊んでないでやるか！そ―れっ！」

カコーン・レントが振り下ろした斧が木に当たり、森にいい音が響く

「——いつたあ!?」

「うわっ!? 何よレント?」

「あーあ・切り倒すのに斧の柄をあんなに握りしめて振りぬいたら衝撃が手にもろ伝わったんだろ——レント貸してみな、切り倒すときはこう腰を落として斧を握りしめすぎず、気に打ち付ける瞬間脱力して衝撃を逃がす……!」

「なるほどなあ・ついいつもの大剣の感覚でやつちまつた」

「魔物相手にも注意だぞ? たまに剣じや倒せないような固い相手に握りしめて打ち付け
ると、反動で手が痺れる…あれはつらい」

「やけに実感のこもつた発言ね」

「ああ…冒険しはじめのころにゴーレムの奇襲を受けてな…」

「ええ!? 大丈夫だつたの!?

「偶々よけれでな、そのあとびっくりして力んだまま反撃したら、こう固い鉱石の部分を打ち据えてな…」

「うわあ…そのあとどうしたのよ」

「手が痺れて剣を落としてしまい、止むを得ずゴーレムと殴り合いの泥沼勝負に…ボロボロになりながらもなんとか勝つたが、島に帰った後アガーテ姉さんに大目玉を食らつたよ」

「僕が知ってるカイルは最初つから強かつたけど、そんな時もあつたんだ」

「もちろん、最初から強い奴なんていないよ」

「うつし、カイルの昔話も聞けたところで、やりますかね」

—— そうして暫くカコーンという音が森に響いた

「よつし…ライザこんなもんはどうだ」

そう言うレントの目の前には、鍊金釜に入る程度の大きさに切り分けられた丸太が積みあがっていた

「そうねえー…うん、足りると思う、レントが切ってくれてる間に木の実も集まつたわ」

「よ一つし…今日は終わりにしようぜ」

「…ねえ、今更なんだけど、この丸太ってどうするの?」

「どうするつて…そりゃ鍊金術で使うのに——」

「——鍊金術って…屋根裏部屋だよね?」

「そりや、鍊金釜がそこにあるから当たり前でしょ」

「——ねえ、この山を運ぶのは…?」

「あつ…」「…そういえば運搬は考えてなかつたな」「あちやあー…」

「——全員で分担して持つわよっ!」

「「「はーい…」」

なお小舟に一回で乗り切らず、2往復した

レシピ6～8 簡易木材、簡易石材、海草土

次の日屋根裏部屋にて

「――今日も採取に行くと思ってみんなのお弁当作って来たよ」

「うわあ…おいしそう…！」

「マジかっ！ ありがてえ：ありがてえ…」

「本当に作つてきてくれたんだ…！」

「サンドウイッチに…」これは紅茶かな？」

「ふふつ…あたりだよ、昼食を食べる頃には冷めちゃうけど、火が起こせれば温めなおせるように金属ボットだから安心して」

ライザ、レント、タオはサンドウイッチと紅茶の入ったバスケットを覗いてはしゃいでいる、そんな中カイルがクラウディアへと語りかける

「…なんだか貰つてばかりで申し訳ないな」

「ううん、好きでやつてることだから気にしないで…あつでもカイル君」

「ん?なんかあつたか?」

「そうじやないんだけど…あとで少しだけ相談に乗つてもらつていいかな…?」

「ああ、オレにできる事なら喜んで」

「――ん?何二人でコソコソしてるのよ」

「氣のせいだよライザ、少しそのサンドウイッチの作り方を聞いてただけさ」

「ふーん…」

「そんなことより、今日はどこへ行くんだ?」

「そうねー…」

そう言つてメモ書きを取り出すライザ

- ・アイヒエ（木材）×5つ
- ・その他木材×5つ
- ・木の実×5つ
- ・風化した石材×5つ
- ・その他石材×5つ
- ・燃料類×5つ
- ・塩草×5つ
- ・やわらかい砂×5つ

- ・砂類×5つ
- ・水類×5つ

「うん、上段は集め終わつたし、下段はほぼ対岸の船着き場で手に入るのよね……だから今日は中段の素材を集めたくて……」

「中段つて言うと……また重そだな……この燃料類つてのは自然油じやダメなのか？まだ余つていた気がするが」

「あー……それは他のに使いたくて……だからカイルには今回ハチミツを採取してもらいたいのよね」

「ハチミツ……？」

「燃料類つて書いたけど、ハチミツが良さそうなのよね」

「お菓子の家でも作る気か……？やはり鍊金術つてよくわからないな……まあ、わかつたハ

チミツをビンで5つほどでいいんだな?」

「うん、お願ひ」

「それでどこに行くんだ?」

「水没坑道なら全部集まるんだ、この前の試験で色々調査して何が採取できるか分かつてることからね」

——バスケットの中のサンドウイッチに夢中になつてたレントとタオが会話に加わる

「なるほど……じゃあ今回オレは小妖精の森でハチミツ採取で、みんなが水没坑道で石集めか」

「うんお願い……多分昨日と同じで一回で集めきれないから行動の入り口で素材を積んで、最後の運搬を手伝つてもらうつて感じでいいかな?」

「りょーかい、時間が余つたら船着き場近くで下段の素材も集めとくよ」

——クラウディアを除いた全員で対岸に渡つて、カイルとライザたちが分かれ行動を始めた数時間後、無事素材を集めたライザたちは小舟に荷を積み終わりカイルを待つていた

「……カイル遅いわね」

「何かあつた…とか？」

「カイルに限つてそれはないだろ、小妖精の森でも浅いところにしか潜らないって言つたしな——あそこ程度で負けるほどカイルは弱くないのはタオも知つてるだろ？」

「それはそうなんだけさ……」

「——あつ、帰つて來た！」

ライザの言う通り、小妖精の森から出てきたカイルが少し草臥れた顔で歩いてきた
「おいおい：なんか疲れた顔してるとけど、なんかあつたのか？」

「いや…逆に無かつた…というのが正解だな」

「なかつた…？」

「ああ…ハチの巣を見つけていつもの様に燻してハチミツを採取しようとしたんだが
…」

「だが？」

「ハチミツがあんまり取れなくてな」

「ん？ それっておかしい事なの？」

「いや、一つだけなら偶々で済む話なんだが：今日オレが見た巣では全部が採れる量少なくてな……今までで見たことない現象だから警戒したが特に何もなくてな：その警戒と一回でどれの量が少なくて時間がかかっちゃった、すまないな」

「ううん、何かトラブルとかなくてよかつたよ」

「それじゃあ、帰ろうぜ！——と言つても石とか多くてまた往復する羽目になりそうだがな……」

「…いろいろな意味で疲れた後にこの運搬はきついな…」

こうして少しの違和感を感じながらもこの日は隠れ家に必要な材料のほとんどを集め終わつて冒険を終えるのであつた

・アイヒエ（木材）×5つ

- ・その他木材×5つ
- ・木の実×5つ
- ・風化した石材×5つ
- ・その他石材×5つ
- ・燃料類×5つ
- ・塩草×5つ
- ・やわらかい砂×5つ
- ・砂類×5つ
- ・水類×5つ

——次の日、屋根裏部屋にて

「よしつ！早速素材も集まつたし調合をやるわよ！」

「ん？ライザこの水類ってのはいいの？」

「ああ…それを使うのは最後に調合するから、あたしが上段と中段の調合してある間に汲みに行つてほしくて」

「ああ…なるほどな、ただの水でいいのか——それじゃ行つてくる」

「よろしく——さて、水汲みはレントに任せて、やりましょうかね」

そう言うと慣れた手際でいつもの様に材料を並べるライザ、そして鍊金釜へ順番にアヒエ、木材、アブラ木の実と対岸で渡る途中で手に入る七色葡萄を入れ、鍋をぐるぐると回すといつもの光を放ち——

「できたつー！」

光が収まると見るからに鍊金釜を飛び出して木の板のようなものが出来上がつていた

「いやなんでそうなった!!？」

「え？」

「え、じゃないが、明らかに鍊金釜から木の板が飛び出しているが」

「ああ、これ？——あたしが一から作ったレシピで名付けるなら「簡易木材」って言って加工のしやすさを目的で作ったの」

「いや、そうじやなくて…釜の中で謎色の液体ぐるぐるしてたと思つたら急に固形が飛び出して——」

「——鍊金術つてそういうもののなのよ、気にしたら負けよ」

「——まあもういや…」

突っ込みに疲れたようにカイルが肩を落として呟く

「——おーいライザ、水汲んできたぞー」

「あ、ありがとう！そちら辺において置いて」

「あいよー」

「さあーて！次よ次」

そう言つて今度取り出したのは風化した石材、ハチミツ、砂岩……それを先ほどと同様にぐるぐる……光を放ち鍊金釜の中にはレンガとも、石材のブロックのようにも見えるものが何個もできていた

「——これは？」

「うん、さつきと同じで「簡易石材」ってどこかな？」

「これも加工がしやすいように？」

「そりそり」

「いつも何んとなーくで見ていたが…」

「やっぱり鍊金術つて凄いんだねえ…」

「材料が…なんか一つになつていいくなんて…まるで魔法みたい…」

「いや、クラウディア、魔法はあそこまで不可思議じゃないから…」

ぐる…
今度は塩草、白灰砂、やわらかい砂、先ほど汲んできた水…そしてまたぐるぐるぐる

「できたー！」

今度は鍊金釜の中に粘土質の土塊のようなものがあつた

「今度はなんか粘土っぽい？」

「うん！石材同士のつなぎとか壁の漆喰とかに使えると思って」

「ライザもいろいろ考へてるんだな…」

「ちよつとどういう意味よ、普段は考へてないみたいなもの言いは」

「それはその通りだと思うよライザ…」

「…まあ、いいわ、これで一式、あと4セットつくるわよ！だから作つてる間にじやん
じやん小舟に運んでね！」

「森の広場まで、出来上がつた物を一つ一つ運ぶのかあ…すでに結構な量があるので、ま

だまだ増えるんでしょ？重労働になりそうだなあ…」

「いつそのこと森で調合すりやいいだろうに――何で態々ここから運ぶんだ？」

「調合は簡単に見えて集中力がいるの、いつ魔物に襲われるかもわからない野外で出来るわけないでしょ――それに量も多いし、ここでじっくりやりたかったのよ、隠れ家さえできればこんな手間もなくなるんだから文句を言わず運んだ運んだ！」

「ライザもなんかほんとの鍊金術士みたいなもの言いをするようになつたね」

「ああ、今俺も同じこと思つた」

「ホントの鍊金術士なの!!」

「もう…一人とも、張り切つてるライザの邪魔がしたいの？カイル君なんて何も言わずに運びに行つたよ？」

普段のクラウディアからは考えられない少し強い言葉にアルカイックスマイル：明らかに怒つてますよという雰囲気に腰が引ける男二人

「わわつーーー、ごめんなさい」

「そう言うのじやなくて：俺たちなりの励ましというか：」

「本当に？」

軽い言葉とは裏腹にクラウディアの背後よりゴゴゴゴゴゴゴと言つた気配にビビつたタオが先に逃げ出す

「あわわ…僕、運びに行つてくるね、それじゃ！」「つておい、おいて行くなタオ…！俺も行つてくる！」

「まつたくもう―――あ、ライザ私もあんまり持てないけど手伝うね」

「あ、クラウディアはいいの、こんな重労働しようもない男どもに任せればいいのよ（一瞬お母さんと同じような怖い気配を感じた…クラウディアって怒ると怖いんだ…あたしは怒らせないようにしよ…）」

「ん？ 何か言つたライザ？」

「はい！ 何も言つておりますん!!」

「??」——変なライザ

そんな会話がありつつも、調合で出来た素材は島の入り江へどんどん運び込まれるのであつた

タイトルコール

「——よーし！一通り完成!!」

「わあ…これが隠れ家になるんだ…」

「——それで最後か、粗方の荷運びもとりあえずいつもの入り江に積んどいたぜ」

「うん、今日は入り江に積んで明日対岸…広場まで運んで、家作りよ！」

「あの量の建材だと…3、4往復つてとこか…」

「うへえ…やつぱり重労働だよ…」

「台車みたいの使えば早かつたんだけど…街道を通るならともかく、森の中を進むのは無理なのよねえ…」

「諦めて手持ちで運ぶしかねーか、これも鍛錬だと思えばいいな」

「レントは前向きだなあ：」

「——それにしても、アンペルさんが来てから急にみんな忙しくなったね、あたしは毎日鍛金術の調合してるし」

「俺も古書の解読で大わらわだよ——それ以上に楽しくはあるけどね」

「俺もリラさんに毎日、戦士の心得を学んでるぜ」

「オレは漁が忙しくなくなつたかと思えば、みんなが急成長して慌ててアガーテ姉さんにもう一回鍛えなおして貰つてるよ——そして、これで隠れ家が完成すれば……」

「ふつふつふ…いよいよ、お母さんの小言から抜け出して、自由な新天地へ…！」

「スケールの小さい自由だなあ…」

「うつさい！——小さくても大事なことなの！あたしは隠れ家で、毎日こんな島に居たんじゃ出来ない新しいことをするつもり！もつと、もーっと楽しいことしてやるんだから！」

「ライザの望みは大きいんだか小さいんだか分かんねえな…まあ、俺も楽しみなんだが」
「僕だつてそうさ、自分の部屋に入らないようないっぱいの本棚とか、並べられないかなあ…」

「いいじやんいいじやん！頑張つてカイルとかに作つてもらわないとね！」

「あ、大工仕事はオレになるのね…」

「そこは鍊金術でパパつと作れないのか？タオの背丈を超えるようなどでかいやつ」

「背丈を超えるようなデカいやつかあ：憧れではあるよね、絶対にいざ使うと身長が足りなくて使い勝手悪いんだろうけど…僕もレントとは言わないけど、カイルくらいには大きくなりたいなあ…」

「…なんか背の高いタオつてのも想像つかないわね」

「ひどいっ!?」

「あたしは後はそうねえ…アンペルさんに鍊金釜を貸して貰つて、今使つてる鍊金釜を大きくしたり、調合で作つた道具とか飾る棚とかほしいかも——あとは昼寝用のベットでしょ、お茶をするテーブルも欲しいし…あとは…えーっと…」

「どんだけ物を置く気だよ…」

「大丈夫大丈夫、ちゃんと皆の物も置けるように設計してるから——レントは何を置きたいの？」

「ん、俺か？俺は…とりあえず、親父がいないノンビリできる場所なら何でもいいさ」

「んー…まあ、そういう切実な願いを叶えるのも隠れ家の役目かなあ…カイルは？」

「オレはそうだな…特段何もないかな…クラウディアは？」

「私は…うん、お菓子とかお茶を作るちょっととした台所みたいのが欲しい…かな？」

「そうね、あたしのお菓子とお茶のグレードを上げるためには欠かせないわね」

「たかる気満々かよ…」

「まあ、内装は後でいくらでも変えれるし、今は家を完成させないとね…今日はここまで！——明日、朝一番で荷運びを終えて、隠れ家作り始めるわよっ！」

「「「おー！」」」

——次の日、朝早くに対岸の船着き場に5人の姿があつた

「——ふう……入り江からここに持つてくるだけでも大変だつたわね……」

「ああ……カイルの舟も貸してもらつたとはいえ、小舟2隻じや積める量なんてたかが知れてるしな」

「まあ、2往復で済んだからよしとしよう」

「でも、クラウディアこんなに朝早く抜け出してきてお父さんに怒られない？対岸にも来ちやつてるし……」

「ふふ、みんなに島のあちこちを案内してもらえるから楽しみで早く出掛けるつて言つてあるから大丈夫だよ、それに今日もお父さん忙しそうだし、対岸に来たことはばれな

いと思うよ」

「おおう…純粹なクラウディアがこんなに逞しく…一体誰の影響かしらねえ…」

「鏡を見ろよ」「自分の胸に手を当てたら?」「…ライザだな」

「ちよつと!?たしかにあたしが一番クラウディアと接してるけど、次に多く接してるカイルにも責任の一端はあると思うんだけど!?——責任取りなさいよ!」

「おい、バカ、やめろ!なんて人聞きの悪い!?」

「ふふっ…不束者ですがよろしくねカイル君?」

「クラウディアまで乗らないでくれ!?收拾がつかなくなるつ!」

「うわあ…なんかお母さんが好きなドロドロとした感じの小説の場面だあ」「カイル…お前いつか刺されるなよ?」

「——お前らも乗るなつ！」

——そう悲痛な叫びをカイルがして、みんなでひとしきり笑いあつた後、森の広場に向けて荷運びを始めるのであつた

——そうして材料をすべて運び終わった時には昼手前であつた

「——さて⋮材料も一通り揃つて、後は最後の工程の組み立てね」

「運び込むのは大変だつたが⋮しかしなんだ、やろうと思えば何でもできちまうんだな」

「うん、想像と現実って、僕が思つてたよりも近いんだなあ…」

「ちよつと、感慨にふけるのはまだ早いわよ！今まで準備で、ここからが本番なんだから」

「そうだね、でもこの山ほどある部品を間違えずに組み立てられるかな…？」

「大丈夫、完成した形と部品は、しつかりイメージで繋がってるから、あたしの指示通りにして」

「まあ、オレたちには分からないしな…ライザだけが頼りだ」

「改めて思うけど、鍊金術士つて凄いもんだね」

「そうだな…よつし、それじやあ始めようぜ！」

——そうして始まつた隠れ家づくり、ライザの指示が飛び、完成へ近づけていく

「——ほら——そこ！手を休めない！」

「ライザも命令ばかりじゃなくて、ちょっとは手伝えよ！」

「いいのよ、あたしは指示出し係なの！全体を見て判断する人が必要でしょ！」

「ぼ、僕は肉体労働向いてないのにー！カイルそつちの仕事変わつてよー！！」

「ダメよタオ！あんた意外と手先不器用なんだから、屋根の加工なんてできないでしょ！泣き言言つてないでキビキビ働くつ！」

「ん……ライザ——！屋根つてこんな感じに削ればいいか——？」

「もうちょっと反るように削つといて——！」

「肉体労働する予定のカイルがまさか加工の方に取られるとは……」

「しようがないでしょ、土台や柱、壁ならともかく屋根の加工なんてみんなやつたことないんだから、それなら小舟を作つたことあるカイルに任せた方が安心でしょ！」

「へーい……」

「——みんなー、お茶が入つたよ——！」

「わあ……休憩よ、休憩——！」

「いつの間に……焚火なんて……」

「これでも一応旅商人の娘なんだよ？焚火くらい作れなきや——お昼も過ぎちやつたし、サンドウイッチも持つてきたよ」

「ありがてえ……」

「ああ、前に食べさせてもらつた味がなかなか忘れられなくてな……特にタマゴのヤツ、あれつてどうやつて……」

「今度レシピ教えてあげるよ、さあ、ちょっと遅くなっちゃつたけどみんなお昼にしよう——お茶もあつたかいうちに飲んで」

——そんな会話を挟みながらも順調に作業を進めていく5人、ライザが指示を飛ばし、レントが柱を立て、タオが壁を積み、カイルが屋根を作り、その屋根をクラウディアが着色する……

そしてついに

「—————できた」

そのライザの小さな咳きがすべてを物語つていた

「ああ……できた……な」

「完成……だよね？」

「ああ、間違いなく」

「できちやつた…本当に…」

そう5人が見上げる前には、魔女のとんがり帽のような茜色の屋根、躯体は六角形を2つ合わせたかのような見た目をしており、扉は深緑を思わせる緑色、片方の壁にはテラスが設けられ、晴れた日にはいい談笑の場となるだろう、またクラウディアが持つてきてくれたタペストリーが掛けられオシャレも感じさせる

「…一応中も確認しようぜ」

——家に入ると、奥に見慣れた鍊金釜、左の壁際には簡易なベットが設けられている、右にはこれまた見慣れた収納箱に戸棚、中央には黄と橙の丸型のカーペットが設けられ見るからにライザの鍊金研究と言った体である

「右側の部屋は鍊金の場兼みんなの共用の休憩スペースってとこかしら」

「んで、こっちの左側は…」

そこはまだ机1つしかないが今後各々が持ち込んだものであふれる憩いの場となるであろう

「——ちゃんと鍊金釜も置けたし」

「書き物ができる机とかも持つてきちゃったよ！」

「色々持ち込めるでつかいスペースも今後に期待だな」

「外には鍊金釜の過熱兼竈もあるし……」

「みんなでのんびりできる……私たちの隠れ家……」

「完成だ———っ！！！」

「いよっしゃ——」「やつたあ——」「ああ……！」

「信じられない…！本当にできちゃった!!——すごいよライザ！」

「本当、鍊金術士様々だよ」

「俺たちにできる事、やつたことってのが今、目の前に…！」

「うん、私も少しは手伝えてうれしい…」

「——そうだ、隠れ家の名前はあたしが決めていい？」

「ああ、ライザがいなけりやできなかつたんだ、当然だ」

「それでどんな名前にするつもりなの？」

「うーんと…アトリエ…『ライザのアトリエ』で、どうかな？」

「いいんじやない？飾り気無さが家主にピッタリだ」

「一言余計よ、まつたく：」

「——何か名前を付けると思つて用意してたかいがあつたな」

そう呟くとカイルは家の裏に向かいなにやらゴソゴソとしている

「ん？カイルどうしたの」

「…ちょっと待つてくれ…今…よしつ！——レント屋根にはしごをかけてくれ」

「おお？わかつた」

そう言つてカイルは家の裏から何やら楕円形の板を抱え屋根に上る

「——ライザ、ちょっとだけ目を瞑つてくれないか、出来ればみんなも」

「何よそれ…まあいいわ」

「これを…こうして…よしつ！目を開けていいぞ」

「いつたい何を…――えつ？」

ライザの目に映つたのは先ほどまで屋根になかつた一枚の板、そこには

R A
Y T
Z E
A L I E R

「——やつぱり、隠れ家で名前まで付けるって言うんだ、看板が無ければカツコつかないだろ？」

「良いじやねーか！」

「いつの間にこんな作ったのさ」

「屋根を加工してるときに看板だけ加工して、文字は後でつくれるようにな

「すごい……瞬で出来るものなんだ……」

「大した加工じゃないさ、焼いた金属の棒か何かで木材をなぞると焦げ跡で文字が書けるんだ気に入つてもらえた——ライザ？」

みんながライザに向くと、そこには静かに涙を流す姿があつた

「わわっ！…すまん気に食わなかつたか!?」

「…ううん、 そうじやなくて…なんか、 嬉しくなちゃつて…」

「よかつた…泣くほど感動してくれたか」

「もう…茶化さないでよ――でも、 ありがとう」

――そう泣きつつもライザは満面に笑みを浮かべ、 感謝を述べるのであつた

番外編——とある記者の娘の独白

ザブツ：ザブツ：ザブツ：

小舟が波を搔き分けクーケン島の近くを遊泳する：

船の上には2つの人影があり、1人は本作の主人公であるカイル：
もう1人はそのカイルの妹であるジエナだ

今日はカイルが以前約束した通り、小舟でジエナと遊泳をする日だ

「——悪かつたなジエナ、中々約束を果たせなくて」

そう、カイルの言つた通り、ジエナと以前約束してから大分日が経つてしまつていた

「ううん、大丈夫だよ、兄さん：兄さんも忙しそうなのに」

「大事な妹との約束だ、果たさないわけにはいかないだろう」

「ありがとう、兄さん——じゃあ、冒険のお話を聞かせてくれる? この前凄いのの相手したんでしょ?」

「ああ、あれは凄かつた: 真紅の体躯に翼を広げれば——」

「(——やつぱり兄さんは昔から凄くて、やさしい……)」

——私には1つ: 島の人にも家族にも: 大好きな兄さんにすら言つてない秘密がある…

——私が私を自覚したのは母のお腹より産まれたその瞬間である…

他の子が言うような、ほんやりとした記憶じやない、はつきりとした：今でも思い出せる記憶である：最初は他の子と同じように言葉がわからなかつたし、物事の善悪すら判断はついてなかつた、ただ両親はすごく優しい人なんだなど、漠然と感じていた

産まれてから1ヶ月位経つた頃、この頃になると言葉もなんとなくわかってきた：そんなある日、家に黒い服を纏つた見慣れないヤツが居るのに気がつく、当時の私にとつて、見たことある相手というのは、同年代の赤ん坊と両親の友達の大人だけであつた、しかしソイツは大人というには小さくて、赤ん坊というにはデカかつた：結果を言えばソイ

ツを目にした途端私は何をされるかわからない恐怖から泣きじやくつた
しかし、泣きじやくつたのがいけなかつたのか、ソイツは妙に困つた顔をしながら近
づき、私を両手で持ち上げる：

まだ首は座つてない頃なのに、ソイツは私を雑に持ち上げて、あやそうとする
——痛い、痛い！やめて！そんな抱き方しないで！

私は必死に泣いて訴えるが、一向にソイツは理解する気がない（今にして思えば、赤
ん坊が泣いてるだけで意思を汲み取れって方が無理だが…）

そんな私の泣き声に母が慌てて駆けつけて来てくれて、ソイツから私を救つてくれた
…そして、雑に抱いたことを母に叱られている

——ふふつ！ざまーみろ！！

しかし、そんな思いの中母は再び私をソイツに抱っこさせようとしてくる

——なんでつ!?どうしてつ!!——いやっ!!!

しかし、今度は母に教えられながら私に負担のない抱き方で抱っこし、ソイツは困ったような恐る恐ると言つたような顔で私を覗き込んで来る

——見るなよう!!

視線を逸らしたら負けなような気がして、ずっとソイツを眺める…気が付いたら私は泣き止んでずつとソイツと睨めっこする…両親と同じ深い深い藍色の綺麗な瞳がやけに印象的だった…しばらくそうしてると、ソイツは何が面白いのか急に笑みを浮かべ私を優しく揺する

——な、なんなんだよおコイツはあ…!!

しかし、私もまだ赤ん坊、心地よい揺れを感じると眠気に襲われるままに夢の中へと旅立つてしまつた…

——次気がついた時、家の中からソイツは居なくなつていた、母と父の話を聞くに

ソイツはどうも『おにいちゃん』と呼ばれる存在らしい：あんな真っ黒な服着て迫り来るソイツはまさに私の恐怖の対象だった

——今日は酷い目にあつた：もう、アイツが来ませんように！

しかし、その願いも虚しく、アイツは週に1、2日間隔で私に会いに来ては私に構つてくる

——やめろ！頭を撫でるな！私の頭を撫でていいのは母だけだぞ!!（父のは痛いからやだ）

一々アイツに会うたび泣いていたら疲れる事に気が付き、いつからか会つても泣かなくなつた——結果、余計にアイツが絡んで来る、解せぬ

そんな生活が半年程続いたらどうか、ある日両親が矢鱈と浮き足立つて、夕飯をいつもよりかなり豪勢に用意してるのが目に入る：

——今日は何かあるのかな？楽しみっ！

そう思つていられたのはアイツが来るまでだつた

——なんだ、また来たのか…シッシッ！今日は楽しい事がありそうなのに来るんじやないよ！

しかし、その豪勢な用意はどうやら、ソイツの為になされたものらしい…なんでも『そつぎようがー』とか『すゞいせいせきだー』とかよく分からぬことを言つてる

——まあ、どうせ、またすぐ居なくなるだろうし、そしたら母に甘えよう…

しかし、その日アイツは家から出て行かなかつた…それだけではなくあまつさえ、私と両親の至福な睡眠の間に挟まつてきやがつた、まだ言葉は話せないので腹いせに耳元で泣き叫んでやつた——そしたら慌てて飛び起きて右往左往してる、ハハツ、ざまーみろ——母に嗜められた、解せぬ、母よ、アイツのせいなのだ!!

その日を境にアイツはほぼ毎日、朝と夜、家に姿を表すようになつた

朝はまだいい、何やらアイツはいつも慌ただしそうに家から飛び出してどこかに行つてゐるから…しかし、夜、これが困る、私の姿を見ては私に毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日毎日構い倒すのだ！最近少しだけ喋れるようになつたから意思表示をしてみる

——あ～！（いやーー！）

何故か両親共々余計に騒がれた、解せぬ

——そんな日がさらに半年程過ぎ、私の首も座つて、少しならハイハイもできるようになつた頃、いつもならアイツが家から出て行つた後、父が家を出て、母と2人で過ごすのが今日は母に抱えられアイツと一緒に家を出る、なんでも『おしごとのちょ

うしをみさせてー』とか母は言つてゐる、はて、おしごととはなんぞや? そういえば父も家を出るのはおしごとの為とかなんとか言つていた

そうして母とアイツと私が今まで見たことない町並みを進み、見たことない家に入つていつた、そしてアイツがその家の主と何か会話している、特に興味もないのに聞いていなかつたが、母はアイツに興味津々な眼差しを向けるのが気に食わない

そうしてゐるとアイツが主に招かれ奥の『だいどころ』なるものに案内された——そこには私にもわかる『ひ』なる熱くてアイツ以上に怖いものを扱う『かまど』なるものが崩壊してるのがわかつた

そして、アイツがそのかまどにむかつて何やら手をフリフリしてゐしなんならブツブツ言つてゐる、大丈夫か、こいつ?

それをちょっと眺めていたら、急にかまどが震えだし、見る見るうちに崩壊してたのが治つていつた——なんだあれ、すごい:いや、までまで、アイツがやつたとは限らない:あ、アイツがやつたのね、ちよ、ちょっとだけ、すごいつて認めてやつてもいい

かしら…

それからだ、たまに母が忙しかつたり体調が悪くなると、私をアイツ：いや『おにいちゃん』なるものに預けられ、色々なところに連れ出された、毎回共通してるのはおにいちゃんは色々な人の所に顔を出しては不思議な力でなんかしている、でもその何かが終わるとみんなが笑顔になつてゐる、子供も大人も、おにいちゃんはみんなを笑顔にしていた：きつとこれが母の言うおにいちゃんの『おしごと』とやらなのだろう、気に食わないが、笑顔がいいことなのはわかる…だから特別にアイツじやなくておにいちゃんつて呼ぶ事にした

——おいーちゃ（おにいちゃん）

両親の前で初めてそう呼んだのがいけなかつたのか嬉しそうにはしゃぐおにいちゃんと対照的に絶望した顔の両親が印象的だつた…なんか、すまぬ

そんな日が半年程続いただろうか、ある日唐突におにいちやんが家に帰つて来なくなつた、しかも両親の顔色も日に日に悪くなつていく、おいおい、私の両親を悲しませるなんて、おにいちやんは本当にダメだな！でも、また暫くしたら帰つてくるだろう…

しかし、1日…1週間…2週間…3週間…待てども待てどもおにいちやんは帰つて来なかつた、父は顔色が悪いのに忙しそうに家を出入りしてゐるし、母はおにいちやんを見なくなつてから体調をよく崩すようになつてしまつた…なんだよ、早く帰つてこいよ…お兄ちゃんが居ないと…さ、寂しい…じやないか…

そうして見なくなつてから1ヶ月が経過した頃、ここ最近では珍しくお父さんが喜色の笑みを浮かべ、みんなである建物に向かつた『ちりょういん』とか言うらしい

そこには、多少痩せたものの、元気なおにいちやんの姿があつた、なんだ、元気なんじやないか…さあ、早く帰ろうよ

そうして建物を出たら、何やら人混みに不穏な空氣を感じとる…そして人混みから何か大きな声でおにいちやんに向かつて叫んでいると、視界の隅におにいちやんに向かつ

て何か飛んで来るのが見えた

危ないっ！…そう言えればもしかしたら避けられたかも知れない、しかし意味はわかつてもまだ赤ん坊の体、言葉は出さずに小さくあう！と言うだけに終わる：そして、飛んできた何かがおにいちゃんにあたる——視界に入る赤いナニかそれが何なのかなは分からぬが、きっと溢してはいけないナニかなのは漠然とわかつた、やめて！おにいちゃんに酷いことしないで！…そう、言葉が紡げたらどれほど良かつただろうか

おにいちゃんはただただ投げられてるそれに耐えている、いつも見たいに笑顔が無く、俯いて、悲しげに震える…多分、そんなに時間は経つてない筈なのに、永遠にも感じられる残酷な時間…

そんな時間に終止符を打たれたのは、私に向かつてナニかが飛んできて当たった瞬間である、この時のキズは未だ額に薄く残つてたりする…よく目を凝らさないと見えない程度だが…

——痛い！…なにすんのさつ！？

そう、叫ぼうとした瞬間である…いつも…いつも笑顔で誰に対しても優しかったおにいちやんが憤怒の顔を浮かべて絶叫する…

そしておにいちやんから、いつも人々を笑顔にしていた謎の力が強烈に吹き出す——
——それこそ初めて私の目に見えるくらいのが

その衝撃波は私を抱えていた母ごと軽く吹き飛ばし、母は尻餅をつく

強烈な力の濁流、本能でわかる危険……普通なら恐怖を覚えてもいいだろう、実際に先程までおにいちやんにちよつかいをかけていた有象無象はもう居なくなつている、そんな中、私は一つの心で埋め尽くされていた

——キレイ…

おにいちやんより吹き出す薄紫色の力も当然だけども、その荒々しさすらもキレイだつた……そして何よりおにいちやんの心の色が私には見えたような気がする…

普段から笑顔が絶えないおにいちゃん…私がイヤと言つても困つたような笑顔であの手この手で構つてくる憎たらしいひと…そんなおにいちゃんが、私の為に：私の為だけに怒つている…

怒られた事がないわけじやない、私がダメな事をすればダメと両親もおにいちゃんも怒る…だが、それは嗜める程度のものである、私も自意識があり、ちゃんと理解して、同じことをやらなかつたつてのもある、だから本当に怒るつて言うのは初めて見た

衝撃だつた、吃驚だつた、驚愕だつた…私の為だけに本当に怒つてくれるその姿に感動し、私の目にも心にも灼き付いた――率直に言えば一目惚れだつた

島に来てから私が拙くも喋れるようになり、寂しい時も、まだ同年代の友達も出来なかつた頃遊んでもらつたから好きになつたんじやない…これが、私がおにいちゃん…うん、兄さんを好きになつた原初の瞬間である――

——そして時は、小舟に揺られカイルの冒険の話が終わつた頃になる

「——てな感じだ、どうだ、面白かつたか？」

「うんっ！ありがとう兄さん！」

その時、海風が私の髪を揺らし、兄さんに額の薄いキズが見える…そうすると、毎回何を言うわけでも無く少し悲痛な顔をした後、私を優しく抱きしめてくれるのである

「——どうかしたの、兄さん？」

「——いいや、なんでもないさ…少し寒くなつたからジエナの温もりを感じたくなつただけだよ」

「——変な兄さん…（正直言えば私を抱きしめてくれる理由もわかる…きっと優しい

兄さんの事だ、あの時の原因を自分のせいと責めているのだろう：ただ、正直兄さんがここまでスキンシップをしてくれるのは稀であるし、役得だから黙つておこう」

なんだかんだで岡太いシユナイダ一性の血をしつかりと引き継いでいるのであつた

次の日、いつものようにカイルは何処かに行く：最近のジエナの趣味は島に居る間のカイルのスト…監s…見守る事である、よつて今日もカイルにバレないようについていく…これら辺のやり方は父のピーターにさり気無く教わった、記者の娘としても血を感じさせるどこである

「…あんな事があつたんだし、私が兄さんを気にかけるのはしようがないよね、うん」

ちなみにこの尾k…スト…監s…見守りはカイルと両親以外にはバレてたりする、そ

らこんな狭い島だし、バレると言えばバレるに決まっている、今日もライザに見られていた

「……ジエナちゃんって普段しつかししてると、会話すればまるで同年代のような印象を受けるけど…ちょっと、ブラコンが過ぎるような…ちょっとアレなような…」

なんとか言葉を濁すライザ、傍目から見て正直変態の所業である…そしてふと視線を逸らした次の瞬間にはジエナの姿が見えなかつた

「あれ?…」

「——ライザさん」

「ひや、ひやい！」

唐突に後ろから声をかけられるライザ…びっくりして後ろを向くと先程までに前に居たジエナが何故か後ろに回り込んでいた…

「な、なにかなー？ ジエ、ジエナちゃん…」

「――ふふつ」

幼いのに妖艶な微笑み…真っ黒な雰囲気を醸し出すその笑顔にライザは見覚えがある…あつ、これ、怒った時のクラウディアとおんなじ滅茶苦茶ヤバいやつだ…と

「――言わなくとも分かりますよね…？」でも一応言つておきます…――ひ　み
つ　　ですよ？もし、兄さんに言つたら今度こそ言わなくともどうなるか…ふふつ
…」

「ひいあ…ひや、ひやい！不肖ライザリン・シユタウト！なにも！何も！見ておりません
！――そ、それじやあ失礼させていただきます!!!」

こうして少女は目撃者の口止めも忘れない…きっと将来、記者の道に行つたらとんでもない大物になるのは間違いないのであつた…

番
外
編

とある記者の娘の独白

完

誓い

——一同はアトリエが完成した喜びを分かち合つた後、再びアトリエ内に集まつていた

「——こうしてアトリエができたことだし、あたし、一つ誓いを立てようと思う」

「誓い?」

「我がアトリエ完成を機に、改めて誓います!——あたしは鍊金術士として、もつと上達する!!」

「なるほどな……それじゃあ俺は……俺は冒険者として、あの山の彼方にそびえる塔を攻略して村の連中に目にもの見せてやるぜ!!」

「僕は……僕は、家の書庫に積み上げられた文献を読破して、そこに記された知識全

てに触れたい!!

「私は…うん——私もいつか、誰の前でも：お父さんの前でも、フルートを演奏する!!」

「フルートか、そういうえば聞かせてもらつてなかつたな」

「誰の前でも、つて当然僕らも入つてるよね?」

「うん、頑張つてまず二人の前でも吹けるようになる——ライザたちの次はやつぱり二人だもの」

「楽しみだな：つて、ライザたちの次?」

「まあねー、ふふーん羨ましいでしょー」「ああ、偶々タイミングが良くてな」

「私が勝手に恥ずかしがって二人の前でしか吹けなかつたの…めんね？」

「謝るようなことじゃないよ」

「そうそう、慣れないいうちはそいつらで十分だろ」

「ちよつと、何よその言い草は！」「ひでえいわれようだなあ」

「それで、カイルだけ誓いを聞いてないわよ」

「ん？ オレか…」

「オレか、じやないわよ、なんかないの？」

「そういえばカイルの目標とか夢つて聞いたことなかつたような」

「そうは言つても、ある意味叶つてしまつたことだからな…」

「なんだ？漁師仕事でもするつて事じやないんだろう？」

「ああ、古い約束さ…みんなでいつか冒險するつて言うな」

「そんな約束もあつた…ような？」

「そんな約束僕たちしたつけ？」

「それは約束だし…夢…なのか？」

「そうよ、あんた自身がやりたいつてのは一個もないじゃない——それに一緒に冒險するつて言うのなら、もう叶つちゃたわよ？叶つたことを夢というのもおかしいじやない」

「それは…——そうか、叶つてるのか：何というか：唐突にナニかを失つた気分だな

…

——そう呟いている間に気付く：カイルの夢は幼き頃にライザと交わした『約束』それにつきていた、自身を救ってくれた言葉をひたむきに叶えようと努力してきた…少し大げさな言い方をすれば、カイルはその約束の為だけに約10年間を過ごしてきました：——いや、縋っていたというのが正しい、ボクを救ってくれた言葉に依存していた…しかし約束が果たされ、少し冷静に考えると分かる、約束は約束であつて夢ではない：自分はみんなの様に先へ踏み出そうとしてなかつた…？

——みんなの夢^{誓い}を聞き、自身のソレが勘違いであつた事に愕然とする…

「（オレは…みんなが成長する中、10年前から何も進歩してなかつた…？）——俺だけ夢も何もない…」

そう震える声で呟くカイルは、自身がみんなに置いて行かれるような、そんな焦燥感が襲う——ダメだオレはみんなより前に進んでなきや！

依存先

——少し昔話をしよう、カイルは物心ついた時にはすでに他人にはない強大な力を持っていた：幸い、周りにいた人たちが良い人たちばかりだったので、力に溺れることはなかつた：いや、いつそ力におぼれた方が止めてくれる人がいたかもしれない：結果を言えばカイルの原初の願い「役に立ちたい」という思いもあり、人助けを良くする責任感ある好青年へと育つた——誰にも、それこそ本人すら気づかない歪を抱えながら

幼いながらに力を持つ：それは責任感をカイルに植え付け、『力あるものが周りを助けなければ』という思い：それと原初の願いが合わさり『力が無ければ役に立てない』へと変ずる：そして最終的に『力があるのだから人より優れてなければならない』へと変じていた、それはライザに救われた後も続いた：いや、むしろ将来の為にと力を付けたことにより、強固になつた

逆に言えばカイルにとつて『人を助ける』＝『その人より優れている』ともなつてしまふ：穿った見方をすれば、新しいことを知つて周りに自慢したいだけの子供でしかない行動だつた——周りを含め本人も大人っぽいと思つてしまつていた：しかし実際は10年前から一つの約束に縋りついていた子供でしかない：化けの皮が剥がれた今、カイルはライザたちより優れてないと仲間で居られないと怯える子供でしかなかつた

「おいおい、これからつて時に腑抜けないでくれよ、まだまだ冒険は始まつたばかりだぜ」

「そうよ、街道の西側に行つたり、北の塔に行つたり色々有るんだから!――それに無いなら作るだけよ、あたしの鍊金術みたいに!」

「そうだよカイル君、無いならこれから作ればいい：それにここにいるみんなは、夢に向かって歩みだしたばかりの、言うなれば夢の初心者だよ?――だから、変に気負わないで自分の願い見つけ、みんなで一緒に歩もう?」

――クラウディアの言葉は無意識ながらもカイルを正す――約束をしてから力をつけ、知識を付け、みんなに教えてあげないと、と上から目線だつたカイルをみんなと真に対等にした

——カイル君もみんなと一緒に初心者子供だよ、みんなで一緒に歩もう：と——

そう、カイルの考え方違ひ：優れてるから助けなければ——そもそも仲間つて言うのはそういうものではない：得手も不得手もすべてを共有して、一緒に歩むからこそ『仲間』というのだと

「——ツ！！：みんなと一緒に夢の初心者…ははつ…ああ、変に大人ぶつて要らない責任感じて…ただみんなよりも少し知識があつて少し強いつてだけで、夢が分からなかつた俺が一番子供だつたかあ…」

「そうよ、カイルだつて大人びて見えるだけで子供よ」

「変に負けず嫌いなところとかも子供っぽいよね」

を見つける…友達として…仲間として、みんな一緒に夢に向かって歩み始めるために
！」

そう力強く宣言するカイルもようやく未来^夢へ歩み始めるのであつた――

柵を解き放つ

——カイルの誓いを聞いた一同は、無事に隠れ家も完成したこともあり、帰ろうかと外に出る

「……まだ細かいものが、色々足りてないかもな」

「必要と思ったものを、みんなで持ち寄ればいいでしょ——これからいくらでもおいて置けるんだからさ」

「いいねえ、それでこそ僕らの隠れ家だ」

「私も小物とか飾つてみたいけど……いいのかな?」

「変な遠慮しない——ここはクラウディアの隠れ家でもあるんだからさ」

「うん……ありがとう！」

「ああ、そうだな……みんなで持ち寄ればきっとより良い隠れ家になつていくだろうな……」

「カイルどうかした——ん……？」

「レントも感じたか……？」

「あ、ああ……」

そう二人がナニカを感じ取り見つめる先は奥の森であつた

「どうしたのよ二人とも」

「まさか……魔物?」

「そ、そんな…この広場には来ないはずじゃあ…」

「そのはずなんだが、嫌な空氣だ…森がざわついている…気がする」

「この前、ハチミツが取れないって話をした日にも僅かに感じた空氣だ…しかし、それよりも強く感じる…」

「言われてみれば…なんだろう?」

「き、氣味が悪いな…背筋がゾワゾワしてきたよ…」

「あつちか…?」

「ああ、森の奥の方からだな…」

レントとカイルはリラからの教えもあり、気配の出所に検討を付ける

「…様子、見に行つてみる？」

「なつ、なんでさ!?——危険には近づくなつてリラさんにも言われてるのに！」

「折角アトリエが完成したのに、これじゃクラウディアも安心して過ごせないでしょ」

「どう思うカイル?」

「…今のオレたちの実力なら、小妖精の森程度だと安全だ、と言い切れるが…正直この気配は感じたことも比較できるものとも遭遇したことが無いからわからん…」

「…どのみち、確認だけはすべきか…よし、様子を見るだけだ——リラさんに伝える分だけを確認したらすぐ引き返すぞ、ライザ」

「分かつてる…」

「よし、ならオレとレントが先頭で警戒しながら進むぞ」

「クラウディアはここで待つて、すぐ戻るから」

「うん…みんな気を付けて」

「任せておけって、危なくなつたときの逃走方法は一番最初に叩き込まれたからな」

「と、とにかく慎重に…慎重にね…！」

「ええ…行くわよ、慎重…かつ大胆に！」

——そうして森の奥に進む4人…しかし4人の予想と違つて森は意外にも普段通りであつた

「——どうなつてんだ、森中で気配はざわついてるのに見た感じは普段と変わつてない…？」

「確かに変だね：何が起きてるんだろう」

「この前もこんな感じだつた…しかし、この前と違つてずっとザワザワしている…」

「お、おかしいのが確かなら、もう帰ろうよ…その『何か』が起きてからじや遅いんだからあ…」

「今更ここにきて森がざわついてるから帰つてきました、じやりラさんにも説明できな
いだろ」

「何らかの痕跡は見つけたいな…」

そいつて歩みを進める3人：タオもガツクシと肩を落としながらも後に続く——

——そして森の最深部一步手前・ソイツと出会う

「…なんだ…こいつ…」

レントの啞然とした言葉は正しい…この森では見ないような外見、全長は6、7mはあり、全体的に白いカラーリング、太い四足もち巨体をがつしりと支えている、頭はカブトムシやサイを思わせる角をもち、背中からは宝石のようなものが生えている…

「ま、ま、魔物…なんか…すごい…魔物…だ」

「何なのこいつ…体が震える…」

「――ツ!! ぼさつとしてんな! 見るからにオレたちが敵う相手じやない!! 逃げ――」

カイルの咄嗟の叫びに反応したのか、目の前のナニかが荒々しく突進してくる――

その突進をカイルが止めようと剣を繰り出す

「スラッシュユ!!!」

カイルの魔法が乗った攻撃は、雷光の速さをもつてナニかに近づき、その剣を角と交わす

パキイーノ

小妖精にいる魔物程度なら、カイルの一撃でケリがついてもおかしくはなかつた：しかし目の前にいるソイツはただの魔物ではなかつた：結果カイルの剣は角との競り合

いに耐え切れず、折れ、明後日の方向へ飛んで行つた

「——ツ！」

なんとか受け身をとつたカイルだが、勢いを殺せず遠くの茂みへと吹き飛ばされた。しかし、ナニかの突進の勢いは止まらず、ライザに迫る――

「ウオオオオオオオオオ！」

それをライザの後ろより飛び出たレントの重い大剣の一撃が勢いを相殺する……いや、勢いしか相殺できなかつた

「……ぜ、全然効いてねえ……くそつ！逃げるぞ……！」

「に、逃げないと……ダメなのに……あ、足がすくんで……」

ライザのその言葉通り、タオとライザは完全に最初の突進の気迫にあてられ、腰を抜

かしてしまつて動けそうもない

「ひ、ひいい…来るな、来るなああああ!!」

タオの悲痛な叫び通り、もう一度突進してこようとするナニか

「今度はうまく防げる保証ねえぞ…コアクリスタルのフラムも近づかれすぎると使え
ねえ…!」

しかし、ナニかは容赦なくもう一度突っ込んでくる

その気迫に、無駄と分かつていても目を強くつぶつて耐えようとするライザ、突進があと数秒で当たるというとき、茂みから飛び出してきたカイルがナニかの前に立ちはだかり左腕を前に突き出す――

——時は少しさかのぼりカイルが茂みに吹き飛ばされたところ

「——カハツ!?……いつつう…!!……何とか受け身は取れたが：剣が折れた衝撃で右腕を痛めた…つ！」

その言葉通り何とか立ち上がるも、左手でかばいつつ力なく垂れ下がる右腕は折れた剣の柄だけを握っているのが精いっぱいだつた、しばらく役に立ちそうもない

「くつそ…」

そう悪態を吐きつつも何とか顔を上げたが、目に飛び込んできたのは2度目の突進がライザに向かう瞬間だつた

レントが底つて何とかしようとしているが、顔色を見れば形勢不利なのは一目瞭然、ライザとタオは腰を抜かしており、あのまま突撃を食らつたら命の保証も危ぶまれる……(——自分の至らなさを自覚して……これからみんど、一緒に……これからつて時に……)

これはないだろ……」

——1つ…1つだけ助けることが出来るかもしない方法がある

カイルは魔法の天才だった、その才気により魔法院の卒業認定を幼くして修めた

ここで魔法院の卒業認定について簡単に解説すると「魔法使用の諸々の許可」になる、これはかなりの優遇措置である、よつてこれについてくる義務も何個か存在する

その一つに「有事の際の魔法による助力の義務」というのがある、これは首都の近くで、魔物が大量発生とかした際、町を守るため手助けをしなければならないといったことである：手助けの方法は明記されてないが、戦力としての手助けを期待されており、卒業認定を持つものは須く武力を持つている…これは最年少クラスで卒業したカイルも例外なくそうであり、かなりの好成績を残したカイルはむしろ歴代卒業者の中でも上位の『強さ』を持っていた…そう、カイルがもし万全の状態であったのなら：剣を振るう今よりも魔法だけを使っていた昔の方が遥かに強いのである

——しかし、いまだ完全に癒えてないトラウマが足を引つ張る、カウンター系の魔法なら兎も角、自分から相手を傷つけるような魔法…それもナニかを撃滅するような高位の魔法はここ10年1度も使っていない…

「いやだ…いやだ…仲間を傷つけられるのは…助けなきや、助けなきや…」

しかし、魔法は発動する気配すらない…

——ここで走馬灯のようにクラウディアの言葉が蘇る…

「——この期に及んで助けなきや…？——お前は何様だ…！クラウディアに言わ
れただろう…仲間は対等だと…今思うべきことは…『何をしなきや』じゃない…『何
をしたいか』だ…ツ！」

「——助けたい!!」

——ライザを助けた、あの時もそうだった…トラウマを背負い魔法が使えなかつた
あの時、その後の約束に依存し、夢をはき違えるも、あの助けた瞬間、魔法は確かに発

動した：

そう、トラウマを抱えたひび割れた心であつても、あの時と同じ『助けたい』それは自分の願いには変わりなかつた…！あの後、約束に依存しようが、夢をはき違えようが、あの瞬間、あの時助けるという決意は自身の願いには違ひなかつた…！その決意だけは、傲慢さも何もなく、純粹な心だつた…！

——魔法とは心の持ちようで変わる…今この瞬間何よりも自分の為、仲間の為、共に歩むと誓つた未来の為！——その決意は過去のキズを超える力で魔力を取り戻す

「雷
装…！」
エンチャント

その一言共に魔法は発動する、カイルの足に雷を帯び、雷光の速さで突進するナニかの前に躍り出る

——そして場面は戻る

突進する何かに向かつてゆっくりと左腕を構えるカイル、そして言葉を紡ぐ

魔法

「——ディスチャージ……」

言葉が紡がれたその瞬間、カイルの左腕より極光が溢れだし、ナニカを飲み込んだ

——しかし、光が収まつた後もナニカは健在であつた

「……ダメか……」

久しく使つてなかつた上位の魔法、その反動は大きくカイルは意識喪失寸前で、2度
目は撃てそうにない：絶望が襲いそうになる中、ここで幸運がライザたちを救う

ナニかはカイルの魔法を食らつたせいか、気になることができたか、急に歩みを止め、森の奥へ去つていった

何が起こつたかは分からぬ、しかし目の前の脅威はライザたちに興味を失い去つた事だけは確かだつた

「…なんだ…どうした…?」

「カイルの魔法で逃げた…?…それとも、逃がしてくれた…?」

「ははは早く、いいから今のうちだよ!――今之内に逃げよう、逃げなきや、逃げるよ!!」

「いつたい何だつたの…アレ…つてカイル!?」

ライザの目の前でカイルは崩れ落ち倒れていた、慌ててみんなで駆け寄るも怪我は右

腕の脱臼だけだつた

「…すまんみんな…久しぶりの魔法で、意識が飛びそなんだ…レント肩を貸してくれると助かる」

「おうっ！タオの言う通りだ、他にも居るかもしけない…注意しながら急いで帰るぞ！」

――こうして4人は無事…とは言わないが、かなり格上の…それこそ死を想像させるような相手に対しカイル一人軽傷で済んで隠れ家に帰つて來た

「――あつ…みんな、どうだつた…つてカイル君!? 怪我してるの、大丈夫!?!」

「ああ、大丈夫だ…脱臼しただけ…いや、入れる時の痛み考えたら大丈夫じやないが…」

「カイルの腕なんていいから、クラウディア、話は後だよ、早く島に帰ろう！」

「…正しいことを言つてゐるんだが、釈然としないなあ」「ホラ肩貸してやるから、ぼやいでないで船に急ぐぞ」「ああ…ありがとう」

そうしてライザはカイルの呟きを無視しつつクラウディアの手を引き、急いで島へ帰還するのであつた

クラウディアの頼み

島へと帰つて来た4人はアンペルヒリラに事の経緯を説明するため、貸家へと駆けこむのであつた

「——というわけで、折角のお披露目も台無しになっちゃつて……——クラウディアには先に家に帰つてもらつたけど……このままだとまたあそこに行くのも難しそうで……」

「あの広場が安全だつて確認できるまで、迂闊に隠れ家としても使えないしな……」

「ああ、まさか完成した途端使えなくなるなんてな……」

そう嘆く4人をアンペル、リラは神妙に見つめる

「…」

「——二人とも、あの奇妙な魔物について何か知らない……？絶対に普通じやない感じだつたんだけど」

「……」「……」

「さつきから難しい顔で黙りこくつてるけど……やつぱり、怒つてる？」

「態々見に行くなんて、無謀なことしたのは謝るよ……でも——」

そう釈明をしようとするライザとレントのセリフをリラが遮る

「——いや、むしろよく無事に戻った、それだけでお前たちに色々教えた甲斐はあつた」

「えっ？」「……怒らない、のか？」

「確かに無謀だが『奴ら』と出くわして、多少の怪我で帰つてこられた事実は。それだけ

大きい」

『奴ら』…

「やつぱり、お二人はアレについて知ってるんですね…」

「ああ、村での聞き込みでは成果が無かつたから、ここは無関係かと判断しかけていたんだがな：（――これだけ遺跡が散在していながら、伝承の1つもないのは考えてみれば不自然だ…何か理由があるのか…？）」

「…アンペルさん？」

「――ん、すまん…遭遇した場所は小妖精の森なのは間違いないんだな？」

「ああ…隠れ家からそこそこ離れた場所だつた…」

「小妖精の森の最深部一步手前つて場所だつた…」

「なるほど…わたしが調査した時には気配のカケラもなかつたんだがな…一体『奴ら』はどこから来た…?」

『斥候』が遠出するとも思えん：北部のあそこか？——しかし、あれは『奴ら』と戦う側のはず…——なあ、リラ

「ああ、構わんぞ」

「「「？」」」

「すまんが、今すぐ隠れ家に案内してくれないか？」

「いいけど…いずれ二人にもお披露目する予定だつたし…」

「よし、では行こう——『奴ら』への対処は、出来るだけ早い方がいい…」

——そうして早速アトリエに案内をした

「——ここが、あたしたちの隠れ家…『ライザのアトリエ』だよ！」

「ほう……なかなか立派なものを作つたじやないか……宣言通り、十分に驚かせてもらつたぞ——さて……」

そう言うとアンペル、リラの二人は隠れ家周辺の地面や木々をなにやら触れて確認している

「そつちはどうだ、リラ」

「幸い、この付近に痕跡はないな…森の中でのより詳しい再調査は必要だが」

「森と、その近辺の再調査か……ライザ、それにお前たち、無料を承知で頼むが、この隠れ家に私とリラを見張りとして住まわせてくれないか？」

「アンペルさんたちを、アトリエの見張りに？」

「俺たちには願つたり叶つたりだがよ……島の方の家はどうするんだ？」

「村での暮らしにこだわりはない、引き払うだけさ——元々、私たちは旅がらすだからな」

「それに『奴ら』や遺跡を調査するにも、対岸のここに本拠地があつたほうが便利だ」

「その……『奴ら』のことは？」

「すまんが、もう少し状況をつかむまで待つてくれ……——迂闊に話せることではなくてな、話したが最後お前たちを巻き込みかねん……巻き込まずに済むならそれに越したことはないんだ」

「分かった……でも、万が一の対処の仕方だけは教えといてくれよ」

「ああ…そうだな、オレの剣も折られるわ、肩を痛めるわと…まともにやりあおうとしたのが間違いだつた」

「レントのような大剣で対応するならまだしも、片手剣で正面から受けようと/orするバカがいるか！——生還は喜ばしいとして、無謀のツケはしつかり体に叩き込んで、後の戒めとしなければな」

「うえー…」「…おう」「はーい」「ああ…」

「ふむ、もう日が暮れるな…今、森の調査をするには少し危ないな…リラ、一旦島へ帰還して…」への引っ越しの準備をするぞ」

「——ツ!？」

「何を驚いている…って、お前さんは引っ越しの荷造り荷解きが大嫌いだつたな…」

「…まだ、荷を解いてから、そんなに時間たつてないぞ…それを思えば辟易の1つでもする」

「リラさん旅慣れしてるので苦手なんですか…？」

「…確かに意外っちゃ、意外だよな」

「…お前たちもそのうち経験するさ…鍊金術士の荷はやたら多いし、変なとこを触つて爆発何てこともあり得る…山ほどあるそれを違う場所に移すんだぞ…？」

「…なんか、自分の将来見てるかのような不安が…」

「…頼むライザ、命は惜しい、屋根裏部屋からの本格的な引っ越しには俺を呼ばないでくれ」

「…（死を覚悟して真っ白に燃え尽きているカイル）」

「…あんたたち…絶対に手伝わすわよ」

——そんな会話がありつつも、全員で島へ戻り、この日は解散するのであつた
——次の日の昼前、ライザは昨日の出来事を、途中で家に帰して事情を知らな
いクラウディアに伝えるべく屋敷へとお邪魔していた

「——いらつしやい、ライザ：昨日は大変なことになつちやつたね……アトリエ
の方はあれからどうなつたの？」

「アンペルさんたちが周りを住み込みで調べてくれるつて…あたしも驚いたよ、あんな
恐ろしい魔物…初めて見たからさ」

「近くにいないつて分かれば、私もアトリエに出入りする許可がもらえるかな…？」

「実際にアイツを見てないとはいって、度胸あるなあ・タオにも見習わせたいくらいだよ」
「こう見えても、お父さんと色々な場所を旅したからね――タオ君やつぱり怖がってる？」

「かなりね・でも、怖さが突き抜けちゃったのか、魔物のことが書いてありそうな本への興味が勝ったのか、今必死に調べてるよ」

「へえ・でも、そんな凄そうな魔物なら島の人たちや、それこそカイル君なら知ってるんじゃ?」

「あんな魔物が居るなんて一度も聞いたことないよ、実際カイルも知らないって言つてたし、村の誰も知らないんじゃないかな」

「そんなに恐ろしい魔物なら、伝説とか伝承に残つてもよさそうなのに:」

「島の外にはあるかもしないけど・あたしたちは先祖代々何百年も島の中だけで暮ら

してゐからね」

「何百年…クリント王国があつたころからずつと島暮らしつて事?」

「そうだつて聞いてるよ——そのせいでみんな頭は固いわ、外に出るのも新しいことも嫌がるわで…」

「そ、そこまで言つたら悪いよ…」

「良いのよ、その通りだから…」

「——ねえ、ライザ…私も…連れてつてくれない…かな?」

「アトリエに?うーん…アンペルさんたちはまだ早いつて言うんじゃないかなあ…」

「——そうじやなくて…私もみんなと一緒に冒険へ!!」

「冒険…つて、ええつ！？：ダ、ダメよ！危ない場所にクラウディアを連れてけない！」

「ライザやみんなだつて危ないのに出かけてるじやない！」

「う、つ…それは…」

「私も…私もみんなと冒険に行つて、本当の仲間として過ごしたいの…！」

そう叫ぶクラウディアは悲痛な顔し、今にも泣きそうな目でライザを見つめる

「そう言つてくれるは…嬉しいけど…最悪、今度の魔物と出くわすかもしないし、ある程度戦えないと危ないんだよ!?」

「それは考えがあるの…！」

「で、でも、アトリエを作るとき、こつそり島の外へ連れ出したのも反則というか…撃破りみたいなもので…」

「…………お願い」

「顔を俯かせ、瞳から涙を流し懇願するクラウディアに、ライザが折れる

「――もう…その顔はするいつて…しようがないなあ…分かったよ」

「――本当!絶対に約束だからね!!!」

顔を上げたクラウディアはさつきの雰囲気と打つて変わつて満面の笑みを浮かべ喜ぶ

「…えつ?…今のつて…ウソ泣き…?」

「…」、「…めんねライザ?」ここまでしないと多分頷いてくれないかなつて…」

「…た、逞しくなちゃつて…――一度言ちやつた言葉は覆えさないけど…無理だと思

うけど、お父さんの許可が取れたらね！——無理だと思うけど！」

「ありがとうライザ!!——ふふつ……大丈夫、絶対に説得して見せるから……」

普段の純粹さとは違う、小悪魔のような笑みを浮かべ、黒いオーラを纏つてゐるかのような雰囲気のクラウディアに腰が引けるライザ

「そ、そう……きよ、許可が取れたら、おしえて……ね？」

「うん、ちょっと時間はかかるかもだけど……明日の昼過ぎにまた来てくれる？」

「わ、分かったわ、明日また来るね？（じ、時間がかかるって言つたのに……一日でケリをつける気だ……い、いつたい、純粹なクラウディアを誰がこんな逞しく……!?）」

——大体ライザのせいである

賭ける

——次の日、約束通りライザは昼過ぎにクラウディアの屋敷の前まで来ていた
「——なんであんたがここにいるのよ？」

「いや、何となく察しが付くが、オレも昨日クラウディアに呼ばれてな……」

そう、ライザだけではなく、何故かカイルまで呼ばれていたらしい

「ふーん……その理由つて？」

「まあ、話してもいいが……憶測の域を出ないし、クラウディアに関係してゐるかも知れない事をべらべら喋るわけにもいかないって」

「まあ、それもそうね、聞いたあたしが悪かつたわ」

そうして2人は屋敷に入る――

「――いらっしゃい、ライザ、カイル君」

「よく来たね、二人とも」

「あつ…ルベルトさん…お邪魔します」「お邪魔します、ルベルトさん」

「――早速だが、昨日クラウディアから話があつた件だが…うちのクラウを村の外の冒険へ行きたいと…当然だが許可できるわけないだろう」

「ですよね…」「そんな会話があつたのか…」

「お父さん!――私には私の考えがあるの!軽はずみな思い付きで言つてる――」

「――まあ待てクラウ、そこら辺の言い合いは昨日しただろう…今まで、ここまで自分

を主張したクラウは見たことが無い、だから私も頭ごなしに否定するのは忍びなくてな
……よつてライザ君」

「は、はい！」

「私は、君のことは娘の命の恩人だと思つている…しかし、それだけでは娘を預けるのに
は心許ない根拠だ…よつて、島の人の評価でとりあえず『預けるに足りるか』どうかの
検討することにした」

「…というと？」

「この村では君は割と有名な、跳ねつ返りだとか…」

「う、つ…」

「あ……それは否定できないな、ライザ」

「——しかし、最近は村の困っている人を助けているという話も僅かだが聞いている——だが、その『僅か』ではまだ判断しかねる……だからまず私と話したいなら、村の困っている人を助け、その評判を覆してみなさい」

「は、はい……」

「ごめんね、ライザ……」

「——クラウが見込んだ友人だ、きっとそれくらい直ぐにやつてこなすだろう……期待しているぞ」

「は、はいっ！——じゃあ、早速行ってきます！」

「……それで、オレはライザの手伝いの為に呼ばれたんですか？」

「いや、カイル君キミには少し別の相談がしたくてな……私の部屋に来てくれるか？」

「分かりました」

「では早速——」

所は変わつてライザの視点に戻る、早速依頼をこなそうにも一人だと手が足りないし、カイルは何やらルベルトさんと話してて使えない…よつてレントとタオを招集する

「——というわけで、クラウディアの為に力を貸してほしいの…お願ひつ！」

今までの経緯を2人に話、両手を合わせ拝み倒すライザ

「——なんだよ、水臭いじやねーか」

「そうだよライザ、クラウディアはもう僕らの仲間だ、困つてたら助け合うのなんて当たり前だよ」

「……人とも……ありがとう」

「おうつ！……それに、俺たちにもメリットはある話だしな」

「うん、そうだね……村での僕らの評判が変わればこれから冒険もきっと楽になるだろうからね……大賛成さ」

「なるほど……あたしもお母さんにガミガミ言われなくなるかな……？」

「……それはきついかもな（ね）」「

「なんですよーっ！」

——— そして現状を把握した3人：此処からは獅子奮迅の活躍だった

——バジーリアさんの配達仕事を手伝つたり

——腰が悪く、出歩くにも困つてたバーバラさんに『施しの軟膏』を作つて持つて行つたり

——元染物屋を営んでたパットさんへ普段使いの魔石の欠片を納品したり

——カイルがエドワードさんに頼まれてた薬草を代わりに納品したり

——島の子供たちの先生であるシンシアに鉱石を納品したり

——ライザの家の取引先でもある女商人のロミイさんへヴァツサ麦を納品したり

結果を言おう：ルベルトさんに言われてより、僅か2日…たつたこれだけで村の評価は一新：とまでは言わないが、かなりマシになつた

そして再び、ルベルトを訪ねるライザ

「——こんにちは、ルベルトさん」

「——来たね、ライザ君……やればできるじゃないか」

「えっ？」

「ん、いや何でもない、忘れてくれ——君たちの活躍は私の耳にも入るほどだ、私の
言つたとおりにしたという訳だな」

「は、はい……」

「で、あれば君たちが、良識がありそれなりに誠実だと判断して話をしよう——改めて
確認するが、うちのクラウを冒険へ連れ出したい……という話だつたね？」

「はいっ！…クラウディアが頑固つてのはありますけど…やつぱり仲間で友達…ですか
ら！」

「君たちが冒険…野外での活動に優れている…というのはアンペルさんたちよりも聞いて
いる…保守的な村には珍しい、外界への好奇心の強さには旅商人として、共感は大い
にできるどこもある——だが、度々商隊を離れる迂闊なクラウに余計な刺激を与え
増長されるようでは、私も困る」

「…」

「クラウ…お前にもお前なりの理由があるのだろう…しかし、親としての私の心配もお
前は察してほしいところだ」「

「そ、それは…」

「多少、腕に覚えがあるという程度では、彼女らに大切なクラウを任せることにはいかな
いだろう——」

「ツ!!——ねえ、お父さん」

「ん?なんだ」

「——商人が一度吐いた言葉は取り消さない：それが信用だつて前に言つてたよね？」

「なんだ唐突に…ああ、商人が言葉を覆してしまつては、それは商人として死んだも同然だ、それだけはやつてはいけない」

「なら…なら逆に言えば、ライザたちが『多少』じゃなければ、お父さんは認めてくれるつて事だよね？」

「!!——な…」

「——ライザたちが十分に強くて、一緒にいても安全だつて証明できればいいんだよ

ね？」

「へつ？」

「な、なぜそうなる？——いや……そうだな……」

「旅商人にとつて、行く先で出会う人物の見極め、繋いだ縁こそが最上の宝だつてお父さんいつも言つてたよね？」

「ああ……」

「私は、ライザたちなら大丈夫だつて見極めたつもり……ううん、仲間なら：何より友達だからこそ、この判断が間違つてないつて言える！——それを、お父さんにも見極めてほしい」

「——なるほどな……そこまで言うからには、何かしらの用意をしよう……しかし、その見極めが間違つていた場合どうするのかね？……あえて、商人として言おう、信用はタダで

は買えないぞ」

「…私が間違っていたら、今後絶対にお父さんの言う通りにする…それにもう商隊を離れる…ことも絶対にしないって約束…ううん、誓う――これじゃ足りない?」

「クラウディア!!」

そうライザが悲痛に叫ぶのも無理はない、クラウディアが父からの信用を勝ち取るために賭けたもの、それはクラウディアの『未来』そのものだった

今までクラウディアは父の言いつけを破り商隊を勝手に離れてたりした…そういう意味では信用は無いに等しい…そう『信用』とは今までの行いによつて積み重なるもの、それを破つてきた者に今の信用は絶対に無い…なら、クラウディアが賭けられるものは今ではなく未来を賭けてこれに挑む

「――お願ひ、ライザ…」

「もう…分かった、クラウディアの為、全力を用いて挑むよ」

「私はクラウから自由を奪いたいわけではないんだがね…だが、その覚悟確かに受け取つた――では、見極めるためいくつかの依頼を出そう…また日を改めてくれ、それまでに用意しておこう」

「ありがとう、お父さん…ライザお礼つてわけじやないけど、部屋に案内するよ、お茶とお菓子を出すね」

「本当…あつ、ルベルトさん、失礼します」

そう言つてライザとクラウディアは部屋に入つていった――

「…これが、娘のとしても、商人としても成長というもののなのかもしれない…私は、私にできることをしよう」

そう、ルベルトは何かを確信して呟いた

レシピ9——インデュービタブリンク

——次の日の昼前、ルベルトさんの依頼を受けるため、いつもの5人が屋敷に揃つた

「——みんな……ありがとう」

「事情はライザから聞いてるぜ」

「クラウディアも思い切つたことをするね：僕たちにできる事なら何でも手伝うよ」

「ああ、何度も言うがクラウディアはもう仲間だ、助け合おう」

「ありがとう：ライザも巻き込んでやつてごめんね」

「ううん、いいよ——クラウディアの役に立てるならあたしも嬉しいし」

「――どうやら集まつたようだな」

そう奥から顔を出したのはクラウディアの父、バレンツである

「おはようございます、ルベルトさん」

「ああ、おはよう…早速だが以来の話をさせてもらつていいかね?」

「はい! お願ひします!」

「まずは一つ目の依頼だが…鍊金術士としての実力を見てみたい」

「鍊金術士としての…ですか?」

「ああ、旅の途中アンペルさんと話してた時に、冒険に一人鍊金術士が居ればありとあらゆる困難と想定外を乗り越えることもできる…と聞いた、それが本当かを確かめたくて

な

「なるほど：何か状況にあつた物を作つて持つてくれればいいんですね？」

「話が早くて助かる、丁度よくと言つていいか分からぬが、実は地下室に水漏れが発生してな…それを直せる何かを頼みたいのだ」

「お父さん！ 錬金術士をそんな便利屋みたいに…！」

「怒らなくていいよ、クラウディア——一つ目から無理難題だつたらどうしようかと思つてたところだもの、最初に試す課題としては丁度いいと思うの」

「最初の課題は、あまり手を貸せそうもないな……にしても、村の連中も水漏れしている家を貸すなんて何を考えているんだか…大事な客人だろうに…」

「いや、引っ越してきた当初は何ともなかつたのだ——ただ、少し前に地震があつただろう？」

「地震…？ そんなのあつたっけ？」

「あつたよ、真夜中に、ほんの少しだけだけど」

「それなりに大きな揺れだとthoughtたが…あるいはこの家の耐久性に問題でもあるのか…？」

「村の連中が慣れてるだけだと思ひますよ…僕が気が付いたのも、偶々調べもので起きてたからですし」

「まあ、それはいい…問題はその地震の後に地下室から水が漏れだして、浸水していると…いうことだ」

「旧市街は地盤がもろいって言われてますからね…地下はよく海水がしみだしていくんですよ」

「ルベルトさんとクラウディアは旧市街すぐの岸辺つてもう行きました?——あの辺りに沈んでる建物は、元々旧市街の一部だつたんですよ」

「あの沈んでたのが…あれも地震で?」

「まさか、そんな大きな地震ここじや起きたことないよ…っていうか、昔は地震 자체が無かつたって言うし」

「ゆーつくりと海水が浸食してああなつちまつたんだとさ、俺らが生まれるよりずっと前の話だけどな」

「なるほど…確かに、この島を囲むエリップス湖は汽水湖だつたな——海水の塩分が浸食を助けてるのかもしねんな」

「…キスイコ?」

「外海と繋がつてて、潮の流れで海水が出入りする湖のことだよ」

「ああ…そういう…初めて教わったわ」

「難しい話はそこまでにして、地下室に案内してもらえますか？やつぱり現場を見てみないと判断もつきませんし…」

「それもそうだな、案内しよう」

そうしてルベルトに連れられ地下室…それは見事に浅いところでも30センチほど浸水していた

「——ここだ」

「うわあ…かなり水浸しになつてるね…もはやこれ池とかそういうのだよ」

「どうだライザ、鍊金術で何とかなりそうか…？」

「うーんと…水が出てる個所は1箇所っぽいし…そこを塞げば…多分だけど」

「何か思いついたのか？」

「まあね、何が必要かはうつすら浮かんだかな、素材も手持ちの物で出来るはず」

「ほう…」

「待つててくださいルベルトさん！すぐ調合して来てつかえるようにしますから!!」

「手伝えそなことはあるか？」

「うーんと…じゃあタオとレントはこの地下室であたしが見つけた穴以外に水漏れしていないか調べててよ、カイルは舟漕ぎ兼荷物運びの為にアトリエについてきて！」

「りょーかい」「わかった」「ああ」

——そうしてアトリエに着いたライザとカイル

「——うえ!? しまつたあ!!」

「!?——なんだつ!?」

「あはは——…素材足りるかと思ったけど、この前使ったの忘れてた…」

「なんだそんなんとか…何が足りないんだ?」

「『ふにふにの玉』がたりないな——…なんて」

「…つたく、色は何でもいいのか?」

「できれば青がいいかな——…」

小妖精の森

「なら、ここで青ぶにを狩れるな、よし行つてくる……つてしまつた……」

「え？なんかあつた？」

「剣が無い……」

「え？……あつ……」

「オレの魔法だと、多分手加減が効かなくて、青ぶにだと素材ごと消し飛ばしかねない……」

「……腰に佩いてたから、てつきりアガーテ姉さんに新しいの貰ったのかと……」

「いや、これ折れてる剣だな……つい、いつもの癖で……」

「……ねえカイル、その剣あたしに託してくれないかな？」

「託す…？」

「うん…元の剣より弱くなっちゃうかもしないけど、多分折れた剣を素材にすれば、新しい剣として生れなおせると思うんだ」

「…」の剣は、また使えるようになるのか…？」

「ダメ…かな…？」

「いいや、ダメじゃない…むしろ、お願いたいしたいくらいだ…この剣はアガーテ姉さんのお古を譲つてもらつたんだが、結構強引に強請つてな…當時、何とか交渉をしてアガーテ姉さんから模擬戦で一本取れたら譲つてもらえるようになつたんだ…」

「ええっ!? アガーテ姉さんから一本を…でも、持つてゐることは一本取れたんだよね？」

「ああ…当時は嬉しさのあまりはしゃいだが、今思えば特大の手加減付きで取つた一本だ、端から譲る気だつたのかもしれない——それを自分の未熟で折つてしまつた」

「カイル…」

「アガーテ姉さんにはいの一番に報告したさ、そこまでして譲つてもらつた剣を折つてしまつた…と、そしたら怒るでもなく微笑んで赦してくれた…だが、自分で自分を許せる気にはならなくてな」

「でも、あの時はあたしたちを助けるために無理矢理——」

「いや、それもわかつてゐる、何なら結果論だが魔法まで使えるようになつた…でも、アガーテ姉さんとの絆を生贊にして魔法を取り戻したみたいに感じてな…」

「カイルは昔から考えすぎなのよ…もう…」

「それも最近よくわかつてゐる…だから、この剣とまだ歩めるなら…——ライザ、頼む」

「——任せなさい！」

そうしてカイルから剣を受け取り鍊金釜へ向かうライザ：収納箱より取り出したのはコベリナイト、アマタイト鉱、ブロンズアイゼン、中和剤・黄：そして、カイルの折れた剣、それを順番に鍊金釜へ入れていく

——そして、いつもの輝きを放ち鍊金釜からライザが一振りの剣を取り出す

——前の武骨な見た目と多少なりとも似通っているが、大きな違いは刃の色が薄青みがかり、根元の部分には流水や風を思わせるような意匠が施されている、さらに鍔は以前より多少短くなつており、流線形を描いている：

「……どう……かな？……多分前に使つてた剣つて対人用に作られてるから、鍔とか長くて、魔物相手に振り回すには重しになると思つて：逆に攻撃を受け止める時は片手剣だしまともに受け止めたら怪我しちゃうから、受け流せるようにした：つもりなんだけど……」

「ああ…前より振りやすい…この青みがかつた刀身は?」

「やつぱりあたしの今の腕じや、前の剣より性能いいのが作れなくて…だから、多少力バーできるようにほかの付加価値を付けたんだけど…」

「付加価値…?」

「うん、カイルが魔法を使えるようになつたつて聞いて、魔力を通して增幅さられるよう に『杖』としての役割も持たせたの」

「…なるほど…立派な魔道具つて事なのか、この剣は…」

「銘は前のを引き継いで貰つて——」

「——無いぞ」

「え?」

「前の剣…今はこの剣が、あれには銘が無かつたんだ」

「結構な一品だと思つたんだけど…あれでも無銘なんて…首都の武器屋つて凄いんだ…」

「だから、ライザがこの剣に新しく銘を与えてやつてくれないか?」

「…そうね…『インデュービタブリンク』つてのはどうかしら…?」

「…それは…何というか恥ずかしいな…だが、有難く受け取ろう」

そうして、新しい片手剣を手に入れたカイルは、早速『ぶにの玉』を回収し、アトリエへ帰還するのだつた

確執

——剣が新しく生れなおし、無事青ぶにから素材を剥ぎ取りアトリエに持ち帰ったカイルは『ぶにぶにの玉』をライザに手渡す

「——こんなもんで足りるか?」

「えーっと…うん、足りそう!——剣はどうだつた?」

「ああ…前より軽くて振りやすい、魔法の方はまだ試せてないが…」

「よかつた…よし、早速水漏れを直す道具をちやちやつと作っちゃうわよ!」

そうして鍊金釜に向かつてパルマの実、ぶにぶにの玉、中和剤・赤、七色葡萄を順に入れる…そしていつもの輝きを放つ

「できたー！」

「…どれどれ…ってこれは…粘土…いや、ゴム…？」

カイルの言つた通り鍊金釜の中には焦げ茶色の粘土の様にやわらかい塊があつた
 「割と小さめの穴から水が入つてきてるみたいだし、そこを塞げば直ると思うのよね…
 それで粘土のようなものなら隙間なく埋められるかなーって」

「でも、粘土じやそのうち剥がれないと？」

「何のための鍊金術よ…これはやわらかいだけで、水にさらして暫くすると硬質化して
 石のようになるんだから！…たぶん」

「不安だな…ちょっと端っこ切つて試してみるか」

カイルが謎の塊の端を親指程切り落とし、水につけてみる…そうすると僅か2、3分

で石のようないわくに固い物質になつた

「わっ…すげえ…本当に力チコチだ」

「ふふーん、当然でしょ!——名付けて『軟式ゴム石』の完成よ!」

「じゃあ早速屋敷に戻るか」

——ライザたちが屋敷を出てからわずか数時間後、再び屋敷に戻る

「——ルベルトさん、持つてきましたよ!」

「早いな、まさか依頼を出した今日中に持つてくるとは…それでこれが?」

「はい、これで上手くいくと思います」

「ふむ…実際にやらんと分からんな…よし、やつてみせてくれ」

「はい！」

——そうして地下室に降りた一同は他に穴が無いか調査してたレント、タオと合流する

「——お？ やつと帰つて來たな」

「ああ、お帰りライザ…穴の調査はレントとやつたけど、最初にライザが見つけた1箇所以外はないと思うよ」

「本当？ ありがとう、一か所ならすぐに終わるわ」

そしてライザは『軟式ゴム石』を問題の穴に埋め込む

「隙間ができないように押し込んで…よしつ！できましたっ！」

「確認してみよう——確かに、水の流れはなくなつたように見える…まあ浸水している水を汲みだす必要はあるが…」

「へへー…どうも…これで課題は合格ですか？」

「確認はまだだが…いいだろう、最初の課題は合格だ——まさか課題を出した当日に解決するとは、鍊金術とは大したものなのだな」

「はいっ！…って…最初のつて、やつぱり複数あつたんですね…」

「まあ、そうだよな…」「ですよねー…」

「察しが良くて助かるよ、今回は鍊金術というものを確認したかつただけだからな——娘を預けると判断するには早すぎる」

「お父さん！」

「クラウディア、ルベルトさんの言うことが正しいよ…娘さんを預けるのに、家の浸水を直したつてだけで任されたら、それはそれで怖いわよ」

「うむ、しかし、こんなに早く解決してくれるとは思つていなかつた…よつてまだ次の依頼は用意できていない、また準備が出来たら連絡を出そう」

「ごめんねみんな…お父さんつてこんな言い方しか出来なくて…」

「いいつて、あたしもなんだか楽しくなつてきたし」

「ああ、俺たちもまだ何もしないしな！」

「僕は出番が無かつたらそれに越したことはないんだけどね」

「まあ、何であれ、どんとこいつて感じだな」

——そう和気藹々とする娘たちの姿を見てルベルトは呟く

「——友達としての付き合いだけなら、見極めるまでもないな」

そう薄く笑みを浮かべる姿は、まさに子供を見守る父のソレであつた：

——二日後、ライザはアトリエに行くためいつも顔を呼ぼうとボーデン地区に足を運んでいた

「ふふんふーん♪今日は何を作ろうかなー?——あつ：」

そして、ロルフの便利屋の前あたりで何やら揉めてるのを見つける

「……ボオスっ！……それにクラウディアにまで……！」

その言葉通り、揉めているのはライザを除いた面子とボオス、ランバーの二人組だつた

慌てて駆け寄りボオス、ランバーと相対する

「――フン……これで勢揃いってわけか、お前たち最近は冒険ごっこに飽き足らず流れ者とつるんで、怪しい真似してるらしいな」

「ボオスさんの言う通りだ、ウロチョロと御用聞きして回ってるつてあちこちで聞いてるぞ」

「怪しい真似って何よ、鍊金術よ、鍊金術――言つたでしょ、もう構つてやる暇はないって」

「フン、今更物珍しいからって当てられて、ガキみたくはしゃぎまわってるのが目障りなんだよ!——どうせ冒険ごつことやらもそこの何でも屋もどきにおんぶ抱っこなんだろうよ」

「誰がガキみてえだつて!?」「何でも屋もどき…」

「フン、そうやつてすぐムキになる辺り図星なんだろうよ」

「…ボオスこそ、ランバー引き連れて気分はガキ大将つてわけ?——どつちがガキよ」

「こいつは剣の稽古相手だ、遊び歩いてるお前らとブルネン家の跡取りである俺と一緒にするな」

「——…どうして、そんなにライザたちを目の敵にするんですか?」

「——…啖呵を切る二人の間には軋み…埋ることのない溝があつた

「（）いつらは…っ！」

「「「…」」

「（…）いつらは…そこの何でも屋もどきを除き、いつまでもグズグズ燻つて、くだらない夢ばかり語つてる…！島の為に何かするわけでもなく、問題ばかり起こし、やれ閉鎖的だ、やれ頭が固いだの…！他人にばかり自分を押し付けて、自分は少しも変わろうとすらしないくだらないやつらだ…っ！——俺は違う！…俺は、ブルネン家の男として勉学も、剣の稽古も、日々なすべきことをしている…！」

「でも、ライザたちも今は…」

「流れ者やお前という刺激を受けて浮かれてるだけだ！——じゃなきや、カイルの時に既に…ッ！」

「ボオスてめえ…昔馴染みだと思つて我慢してりや、つけあがりやがつて…！」

「我慢・我慢だと?——つけあがつてるのはどつちだ?こつちは十年だぞ、俺がつけあがつたんじやない、お前たちが上らなかつただけだ!それが、昨日今日で何が変わるというんだ!」

「いいわ、確かにボオスの言うことも確かだもの」

「ライザ……」

「——でも、昔のままつて決めつけられるのも気に食わないわ……だから見てなさい、あんたに分かるくらい、しつかりと見せつけてあげる!」

「……チツ、余計なことまで喋りすぎた……——フン、見せてみろ……そして旅商人が出て行くまでは飽きずに続けるんだな、そいつとの付き合いが気まずくなるだろ」

「…」

そう吐き捨ててボオスはランバーを連れ歩き去つていった

「——聞いたわよね、いつまでも馬鹿にされてたまるもんですか、やるわよ！」

「ああ、俺たちのやつてることが本気の本気だつてあの野郎に：村中に見せつけてやる！」

「僕だつて変わつたつもりだ——ボオスの前じや怖くて言えないけど：」

そう意氣込む3人を見つめ、クラウディアは呟く

「…もしかして、以前はみんな仲が良かつたのかな…？」

「クラウディア、その件については深く聞かないでやつてくれないか、ライザたちに——
—そしてボオスにも」

「カイル君何か知つて…?——ううん、カイル君がそういうにはきつと何かあるんだ

ね…？」

「――そこで何二人でコソコソ喋つてるのよ」

「ん、いや、クラウディアは今日は何の用事だらうかつてな」

「うん、その件なんだけど、ライザたちに話があつたの」

「話…？あつもしかして…」

「うん、お父さんが次の課題を出すから、お呼びしなさいって」

「待つてました！…次も乗り越えてやるわよ！」

「ふふつ…詳しくは聞いてないけど、私の家の近くで行うみたい」

「分かった…さっそくみんなで行つてみよう！」

「おお！」「うん」「ああ」

そうして5人は旧市街へと歩みを進めるのだつた⋮

笑み再び

——旧市街へ来た5人は、そこでルベルトともう一人：先ほどまで揉めてたボオスの父、モリツツに出迎えられる

「こんにちは、ルベルトさん…と、モリツツさん？」

「来たか、悪童どもめ…ブルネン家の間を待たせるとは、はずいぶんと偉くなつたものだな」

「あ、悪童…モリツツさんにとつて僕らはまだ遊びまわつてた子供の頃のままなんだね…」

「何を言う、私にとつては今も遊びまわつてる悪童よ…まあ、子供に見られたくないなかつたら私の年齢を超すことだな」

「絶対に無理じやねーか：」

「まあ、それはさておき：課題の話つて聞いたんですけど、どうしてモリツツさんが？」

「うむ、次の課題が村からの依頼にもなるためだ——あそこに山積みになつた瓦礫があるだろう」

そうルドルフが目を向けた先には壊れた外壁やら、廃木材、さらにはよくわからいものまで山積みになつてゐる

「言われてみれば…なんだか色々ありますね」

「先日の地震で出た瓦礫が集められてる…なぜかそれ以外にもいろいろあるようだが…」

「はじめはそんな量でもなかつたのだが、ここに集めればいいと思つた連中が居たらしくてな…そいつらがゴミ箱の様に色々なものを破棄していきおつたのだ：まったく、遂

には往来に支障が出て、苦情まで上がりよつた——村の安寧を守るこの私としても放つてはおけん」

「そ、」で私が丁度良いと掛け合つてみたのだ」

「そうだ、お前たち、最近何だつたか……れん・レンコン……？」

「鍊金術ですっ！」

「おお、そうだ、そのレンコン術とかいう便利なものでパパッと片付けられんかとな」

「鍊金術ですっ！」

「どおでもいいわい、そんなことは——それで、出来るのか、出来んのか？」

——ここでモリツツはいくつかミスを犯した

鍊金術はある程度なんでもできる便利な事程度の認識であつたこと、そして何よりライザが本気でのめり込んでることを知らず、やる気を引き出すためつい煽りすぎた事：

——結果、ライザに火が着いた、着きすぎてしまった

「——ねえ、モリツツさん」

「ん？なんだ？やはりできんのか？」

「その瓦礫って、無くすならどのような手段でもいいのよね…?」

「おお、やつてくれるのか、うむ、かまわん好きにやつてくれたまえ」

「——分かりました、今からちよつと試してみるので下がつてください」

「なに? そんなすぐできるほど鍊金術とやらは凄いのか、どれ見てつてやろう」

モリツツのその言葉を聞いたライザは無表情で懐からコアクリスタルを取り出しそして——

「——待て待て待てつ! ストーップ! スタアアーップ!!」

「落ち着けライザっ! …いや、頼む落ち着いてください!!」

カイルとレントに羽交い絞めで止められた・タオは何かしらのトラウマが蘇ったのか青い顔で膝をガクガク振るわせている

「何で止めるの二人とも？あたしは冷静だよ……」この目の前のゴミを吹き飛ばす為に

「さて、さりげなくモリツツさんの方を見るな!?」

「??」

「不思議そうな顔をしてダメだッ!?」

そうカイルが必死に説得しているとモリツツが余計なことを口に出す

「なにをピークパーケーク焦つておるのだ、男ならもつとどつしりと構えなさい――
私を待たせないで早く見せたまえ」

そして最大のミス、男どもがここまで焦つてライザを止めようとしたことを深く考え
ずに、催促してしまった事……後々に語る、ここで止めておけばよかつたと…

「もう知りませんからね？」

「??」

「よし、レント、タオ！あっちの物陰まで避難するぞ…クラウディアとルベルトさんも早
くっ！」

「えつ？・えつ？」「な、なんなんだね」

こうしてライザは瓦礫の山より少し離れた位置に…そしてモリツツはその少し後ろ
の特等席に

そして再びコアクリスタルを取り出し言葉を紡ぐ

破滅の呪文

「
消
し
飛
べ
ラ
ム
ツ
!!!」

チユドドドドドドドドド才才才才才才才才才才才才才才才才
才才才才才才才才才才才才才才才才才才才才才才才才才才

「アハツ……すつきりした!!」

全てが終わつた時、そこに居たのは、尻もちをつき完全に啞然とした表情のモリツツと恍惚の笑みを浮かべるライザであつた

「――、今日は一発で終わつたか？」

「た、たぶん…」

「なんか、聞いてたよりもかなり威力高い気がするんだが…」

カイルは例のライザを見たことが無いが、レントとタオに当時の状況を聞いていた、だがその時の話よりも爆弾の威力は高く感じた

——そう、以前の水没坑道の時より、ライザは密かにフラムの威力を上げる研究をしていた…そのお披露目がこの場になつたのである

「——な、な、なんなんだねこれはっ!?み、みみが!?みみがあつ!?

「い、言わんこつちやない…」

「まあ、偶にはモリツツさんも痛い目見ることがあるつてことだな…」

「——どうですかモリツツさん?綺麗に…カタズケマシタヨ」

「も、も、もういいわ!!」

そう言い放つと脱兎のダとく逃げだしたモリツツ…

「——い、一応よくやつたとほめてやろう!ではなつ!」

少し戻ってきて、褒めたモリツツ…それだけ言うと今度こそ逃げだした

「あ、あれだけのことが目の前であつて捨て台詞まで吐けるのはブレねえなあモリツツさん…」

「あの精神力はオレたちも見習いたいとこだな…——そういうえばルベルトさんとクラウディアは無事ですか?」

「あ、ああ…私は大丈夫だが…なんというか鍊金術というのはすさまじいのだな…」

「…カツコイイ」

「えつ?」

「あつ…ううん、なんでもない」

「あ、それでルベルトさん、課題は合格でいいですか?」

「う、うむ…これで二つ目は合格でいいだろう…いささか派手に過ぎるが…」

「お父さん…やつぱり3つ目も用意するの…」

「ま、まあ、親つてのはそう簡単に子供を認めちやくれないさ…（なんならアレを見て預ける事に不安を覚えられなくて助かつたぜ…）」

「しかし、ふむ…折角モリツツさんの息子からの提案で課題にしたが…こうも簡単にクリアするとはな」

「え？ ボオスが…？」

「あいつのことだ、嫌がらせ半分で雑用を押し付けたんだろう…」

「なんだか逆にありがとうつて感じだね…」

「ふむ、クラウの為にも是非このまま村の雑用をこなして評判を上げてくれたまえ」

「お父さん！」

「別に雑用でも構わないよクラウディア、今更だけど村の役に立るからね」

「では次の課題……と言いたいが、この課題ですら1日どころか小一時間で終わってしまったため、まだ用意ができるていなくてな……また知らせを出すまで待っていてくれ」

「はい、わかりました！」

こうして次の課題に備えるため、この日は解散となるのであつた

「…にしてもよカイル」

「…」

「今回も俺たち何もしなかつたな…」

「だから言うなつて、虚しくなるだろう…」

「い、一応僕たちはライザの爆弾作りの素材集め手伝つてるから…」

「それはそれで余計に虚しくなるな…」

「…帰るか」

「ああ…」

「うん…」

こうして何もしてない男どもはトボトボ帰宅したのであつた

意固地

——次の日、ライザは一人アトリエで鍊金術の研究をしていた、タオは例によつて家で調べもの、レントは最近島の手伝いをし始め力仕事に駆り出されてる、カイルは最近何やらコソコソしているが、態々聞くのも野暮だろう：：そんな感じで一人で小舟を漕いで対岸に居た

——うーん：：フランの威力をこれ以上あげるのは素材的に無理かなあ：：もつと貴重なものとか使えばまだ上がりそうな気はするけど：：

——口クでもない事を考えていた：：そんな思考を遮つたのは来客があつたためで
ある

「——ん？ カイル：：つてクラウディアアっ！」

そう、カイルだけならここにきても不思議じやないが、何故かクラウディアまで引き

連れて入つてきた…やたらと憔悴した顔をしたカイルがすぐ気になるところである

「——こんにちはライザ」

「おはよう…ライザ…」

「ど、どうしたのよカイル…それにクラウディアまでここに来て、大丈夫なの?」

「うん、2人にフルートを聞いてもらいたくて…それに、私…私たちの隠れ家を使いたくて…無理言つてカイル君に連れて来もらつたんだ…」

「無理つて…」

「…懇願からの交渉…最後には泣き落としまで…なんか、悪徳商人に騙された気分だ…」

「あら、悪徳商人なんて失礼しちゃう、それにカイル君だつて私のフルート聞けるかもつて喜んでたでしょ?——感謝してほしくらいだわ」

悪徳商人という単語が気に入ったのか、茶目っ気に、イタズラな微笑で少し尊大に言うクラウディア：実はこの面子のなかでふざけ始めると一番ノリノリになるのである

「…………大変至極光栄なことでござります、クラウディアお嬢様……」

そうガツクシと肩を落として答えるカイル、ぶつちやけかなり尻に敷かれていた

「カイル、あんたもなんか大変ね……」

「あの泣き落としは卑怯だろ……」

「ああ：カイルも食らつたのね……」

「ライザも食らつていたのか……」

「あれを断れる人いなくない……？」

「ふふっ…2人ともそんなに褒めてもお菓子とフルートしか出でこないよ?」

「褒めてないです…」

普段振り回す側のライザと振り回される側のカイルが揃って肩を落とす、その両名を振り回すのだからなかなか強かな子である

——
それはさておき
閑話休題

「それで、結局黙つて抜け出してきたのね?」

「うん、だから聞いてもらつてるのに厚かましいんだけどお父さんには…」

「言わない言わない、クラウディアもここに来てもらえてあたしも嬉しいし」

「ふふつ、ありがとう——それじゃ、早速聴いてもらえる?」

「待つてました!」「ああ」

——そうしてささやかな演奏会が行われた



「——ふう……清聴ありがとうございました」

「――うん! すゞくいいよ!!――前より肩の力も抜けてる気がする」

「ああ、やっぱり何度も…?」

「うん? 何度も…?」

「あ、いや、前回と今回でまだ2回目か…言い間違えた…」

「変なの――にしても、あたしたちの前でもう緊張の『き』の字も感じられないじやない、これならレントとタオにもお披露目できるんじやない?」

「そ、それはまだ早いかも…」

「――入るぞ」

そう言つて新たな来客…今はここに仮で住んでいるアンペルとリラが帰つて來た

「——3人とも来ていたのか」

「お帰りー…うん、今はここに住んでますしこっちの方がしつくりくるや」

「ふむ、そう言うなら倣つたほうがいいな、ただいま帰つたぞ——少し恥しいな」

「私たちは旅がらすだからな、誰かに出迎えてもらえるつてのは新鮮だ——ただいま
から」

「家族…家族か」

「?——どうかしましたリラさん」

「いやなに…久しく忘れていたが、少しいいものだなど考え深かつただけさ」

「遺跡の調査お疲れ様です——あれから例の魔物は……？」

「この近くにはいないようだ：一応いい事ではあるんだが——」

「——それはそれで謎が増した、リラの言う通り安全に越したことはないが、出所が分からんと言うのもな……」

「一応、隠れ家の周りだけでも安全ならよかつたあ……これでクラウディアが気軽に来れるようになるよね」

「——そいつをこつそり吹く為か？」

「えつ？——あ、これは……」

「ははっ、別に隠す必要はない……最初にあつた時も楽器ケースを持っていただろう」

「え？ 2人ともクラウディアのフルートのこと知つてたの？」

「フルート…まではケースに入つてたから分からなかつたが、旅先でも何度か見たことがある——別に言い立てる事ではないと思つていたが」

「そ、 そなんだ…」

「人目につかないようにこつそり練習してたというわけか」

「お父さんには秘密にしていただけると…」

「ふむ、なるほど何かしらの理由で秘密にしたかつたのだな、それで商隊を離れて森に入り込んだわけか——たしかに、ここならだれにも知られずに練習できるな」

「お父さんにだけじゃなくて、ボオスに見つかつたら何言われるか分かつたもんじやないしねー…」

「ボオス…君つて、私にも意地悪…するのかなあ」

「するする、あたしたちが嫌がる事なら、なんでもね…秘密にしてることも、もし知られたら――」

「――あまり友達のことを、悪く言うものじやないぞ」

ひとり熱くなりかけてたライザにアンペルが割り込む

「友達い？――あんな奴、友達なわけ…」

「ふむ、何はともあれ悪く言うものじやない――言靈つていう言葉がある、あまり不用意な発言をしていると、本当に言葉自体に惡意・害意がのり、自分や他人を傷つけてしまう、何かが起こってからでは後悔しかできぬいぞ？」

普段はあまりこういう風には諫めないアンペルが態々割り込んでまで発言した『重み』…ライザはバツが悪くなり素直に謝る

「…」めんなさい」

「なに、まだ何も起きてないしそこで素直に謝れるならこれから直していけばいいさ——練習の邪魔をして悪かつたな、私たちはもう一回りしてこよう」

「ああ、それじゃあな、機会があつたら私たちにも聴かせてくれ」

「は、はい！いつか…いつか必ず…！」

そうして2人は再びアトリエを後にし、調査へ戻つていった

「…」

アンペルに言われたことを反芻し、黙るライザ

「ライザ……それじゃあ、私も戻らせてもらうね、聴いてくれてありがとう」

今の自分にできることはないと感じ、クラウディアは大人しくアトリエを去る

「…クラウディアにまで気を遣われてるぞ」

「うん…」

「オレも詳しいことは聞いたことない：でも、ライザが何かしらの負目があるのはわかる」

「うん…」

「ライザは見返すつて宣言した：じゃあ見返した後、どうする？ボオスを貶すか？」

「それは…！…そんなこと、しない…でも…」

「なら、一度自分がどうしたいのかを見直さないとな」

「…」

そう言つて扉から出て行くカイル、そして扉が閉まる瞬間咳く

「——オレはライザが意地つ張りだけど勇敢で優しくて：そして変わろうとしてる：いや、変わったところを見ている、だから確執なんて殴り捨てて…きっと向き合えるつて信じてる」

そうして扉が閉まつた…

——暫くして両手で自分の頬を張る

パチンツ：

「…よつし！うだうだ考えるなんてあたしらしくないし、今は答えが出ないっ！ボオス
は言つた『つけあがつたんじやない、お前たちが上らなかつたんだ』つて…なら、とり
あえず同じくらいまで駆け上がって、そこで改めて考えるつ！そこでなお気に食わなけ
ればフランでもプレゼントしてやるんだからっ！――それに、仲間カイルに信じてるなんて
言られて裏切れないわね」

少女は決意する、今一度過去にあつた出来事と向き合うと…

カイルの頼み（レシピ10——おいしい練り餌）

——次の日、心機一転したライザはぶらぶらと港にいい物でもないかなとボーゼン地区を歩いていた、そうすると見知った声に呼び止められる

「——あつ、ライザ！」

「うわっ、アガーテ姉さん!? あたしなんかやらかしたつけ!?!」

「いやいや、いきなりやらかすって出てくるあたり不安だな…」

「つてカイル：？」

そう、声を掛けたのはアガーテ一人じゃなく、カイルとの師弟コンビで声を掛けたのである

「全く…今日は説教しに探してたわけじゃないんだ」

「えつ？違うの？てつきりいつもの流れで怒られるのかと…」

「いや、今日は少し相談…というか頼みたいことがあるんだ」

「頼み…？」

「ああ、アガーテ姉さんが相談されてる時にオレも加わってな…ちょっとどうにもできそうにもなくて…ライザならもしかしたらって…」

「??？」

「まあ、ここで説明すると二度手間だ、当事者に直接聞いた方がいいだろう…ついてきてくれ」

「どこに行くの？」

「——クーケン港だ」

場所は変わってクーケン港、今回ライザを頼ったのはカイルの仕事仲間で
ある漁師の青年である、元々村でも相談相手として大人気のアガーテに相談してた
が、そこにカイルが通りかかり、自分にも関係あると話し合い、カイルがライザになら
もしかしたら…と言つた経緯でここに来てもらつたのである

「——カイルや村の人たちより最近お前が：鍊金術っていう便利なものを学んでるつ
て聞いてな」

「それであたしに相談を？——ふふつ、なんだかアガーテ姉さんに頼られるつて凄い
嬉しいかも…」

「という訳で、すまないがさつきの話をもう一回ライザにも説明してくれないか?」

「どうして漁師の青年は話を切り出す

「話して何とかなるなら、何度だつて話すよ…実は最近、漁で船を出しても前に比べて全然魚が取れなくなつちまつたんだ」

「魚が…不漁つてヤツ?」

「ああ、ここ最近だが、いつもの漁場から魚が消えちまつたんだ…」

「それのせいでオレも漁の手伝いに呼ばれなくなつてしまつてな…正直収入が減つたんだ…」

「それで最近カイルは漁を手伝つてなかつたのね…つてことは村全体での出来事なのね?」

「ああ、そうだ…別の漁場を試してみたり、網を変えてみたり…色々やつてみたが、全部空振りになつてるんだ——正直お手上げさ、網元も爺さんにも相談したがこんなのは初めてだつて言つてる」

「なるほど…」

「オレも普段から世話になつてるからどうにかしたくてな…何とかできそーうか?」

「んー…あたしにできそーうなのは強力な餌を用意するつて」とくらいかなあ…」

「解決できるなら何でもいい…とにかく頼む…!…このままじや俺たちも干上がりつちまう…」

「改めて俺からも頼む…」

「分かりました!…この鍊金術士ライザリン・シユタウトにお任せあれ!!——それにやつとカイルが素直に頼つてきてくれたんだもん、任せてよ」

「ありがとう…」

「まだ解決できたわけじゃないし、お礼はその時でいいわよ」

「すまんなライザ…よろしく頼む」

「うんっ！」

——ライザとカイルは早速調合に向かう為に対岸の船着き場に居た、いつもならアトリエ横の海岸に直接行くが、少し素材が足りないとのことと素材回収がてらアトリエに向かうことになった

「——オレから頼んだことだから、喜んで手伝うが：何をすればいい？」

「うーんとねえ……餌を作るのに虫を何匹か捕まえてほしくて……」

「虫かあ……あんまり捕まえたことないなあ……まあ草むらをあされば何匹かは手に入るかな……？」

「物は試しだね……よっし行こう！」

こうしてアトリエに行くまでの道すがら草という草をかき分け、時には木の根元を掘つたりして何匹か捕まえた：ナナホシ、灯籠ホタル、ハニーアント、ローズビー：なおローズビーを捕まえる際、カイルが刺されるというアクシデントはあったが少しだけ集まつた

「——思つた以上に捕まえられなかつたな……素材としては足りそうか？」

「たぶんいける……かな？」

「なんというか全然捕まらなかつたな…刺されたし…手持ちの毒消しを持つてなかつたら腫れてたぞコレ…」

「なんか悪かつたわね…今度毒消しも作つとくし…虫取り網も作つておくわ…」

「是非に頼む…——よし、アトリエに入ろう」

そして早速鍊金術の準備をするライザ…鍊金釜へ順にヴァツサ麦をすりつぶした小麦粉、ハチミツ、灯籠ホタル、クミネの実、クミネの実、クミネの実…

「——ん？…待て待て待て!!」

「何よ、こつから纖細な作業で忙しいんだけど」

「いや…クミネの実入れまくつてるけど…」

「え？ ああ、私の勘でこれが使えるなって」

「クミネの実つて一応…毒だよな…？ 大丈夫か？ 痺れ餌なのか…？」

「そんなわけないじやない…毒入れたからつて毒になるわけじゃないのが鍊金術なのよ」

「た、頼むぞ…？ いや、本当に…」

「そうして鍊金釜からいつもの輝きを放つ——そして鍊金釜の中にはクツキーのようなものが入つていた

「出来たー！…名前は、単純に『おいしい練り餌』でいいかな」

「これはクツキーみたいだな…ちょっと持つてみてもいいか？」

「良いわよ、少しやわらかく作つてみたから、最初に撒き餌として碎いてみてもいいか

も」

「なるほどな…ちつと失礼」

そう言うとカイルは練り餌をいきなり口に放り込んだ

「ちょっとつ!?な、なにしてんのよつ!？」

「いや、餌は人が食えるほど美味しいとよく効くんだ…うん、凄くおいしいなコレ…いや、マジでうまいなコレッ!?」

「あたしが大丈夫って言つたけど、仮にも毒の素材を入れたモノを良く怖氣ずに食べれ
たわね…」

「まあ、最悪舌に刺激とか感じたら吐き出す気だつたしな…もう一個食べていいか?」

「ダメに決まつてんでしょっ!!――でもカイルがそこまで美味しいって言うのも気に

なるわね……」

「〔…〕

結論から言うと『おいしい練り餌』はもう何個か余分に作ったとか……

——そして再びクーケン港に来た2人、早速アガーテに説明と漁師連中に練り餌を配る

——これつて、撒き餌…か？いや、釣り餌にもできそうだな』

「まあ、そんなところ、ちょっと漁の種類とかは分からぬから色々試してみてほしいのよ…でも結構強く作ったはずだから、あまり一気に使わないでね?」

「エリップス湖はやたらと深いから、撒き餌は効果が薄くあまり使つたことなかつたな…わかつた、明日早速使つてみるよ」

「よろしく、あ、汽水湖つて潮目が変わると外海から魔物が入つて来るつて言うから気を付けてね?」

「ほう…」

「魔物なんて嵐ですら入つて來たことないんだけどな…まあ、一応気を付けとくよ…それじゃあ、明日の漁の準備をして来る」

「また明日感想聞かせてねー!」

「オレも明日の朝漁に出て少し様子を見てくるよ」

「うん、カイルも感想聞かせてね」

「…」

「ど、どうしたのアガーテ姉さん、そんなに見つめて…」

「いや…極めつけの悪ガキも、年月を経ればそれなりに成長するんだなと…少し感動していただけだ」

「それ、ちょっとひどくない？」

「今までの行いを顧みてからもう一回言つてみるんだな」

「…そ、それちょっとひどくない？」

「結局言うのかよ…」

「くくっ…すまんすまん…結論から言えば鍊金術士としてのお前を応援してるんだ」

「ホントかなあ…」

「ホントだとも、イタズラをしていた頃より、顔を輝かせているんだ、しかも村の皆の役にも立つていると…それは応援するに決まっているだろう?」

「へへっ…今が一番楽しいからね——それじゃ今日は帰るね、またね!アガーテ姉さん」

「オレも帰らせてもらいますね、ではまた」

そうしてライザとカイルの背が見えなくなつてからアガーテは呟く

「ああ…本当に成長したな…あとはあいつらの関係さえ蟠りが解ければ…」

未来に幸多かれと願わずにはいられないのだつた

最後の課題

——次の日、ライザ、クラウディア、アンペル、リラの4人がアトリエに居た
 「——それでさー、あのアガーテ姉さんが目をキラキラさせて『鍊金術士としてのお前
 を応援する』って言つてさ…」

早速昨日の出来事をクラウディアに自慢しているのであつた

「すごいね、ライザも村の人たちに鍊金術士として認められてきてるんじやないかな?」
 「そうかな?認めてくれるつて言うのなら悪い気はしないけどさ…へへへつ」

自身の言動とは逆にすごい嬉しそうなライザ、褒められ慣れてないつてのもあつた

「自慢話より、潮目の変化で外海の魔物が入り込むという危険性はちゃんと漁師に伝え

たのか?——魚が消えたのは大型の魔物が湖に入り込んだかもしれないんだぞ?」

「それもちゃんと説明しましたよ……それにカイルも漁に出て伝えてくれてるはずですし」

「湖を渡るときも、水面に影や揺らぎが無いかしつかり見張るのを忘れるなよ?」

「リラさんや、カイル君に教えてもらつたコツはしつかり守つてるので大丈夫だとは思うんですけど……」

「——ライザッ! 居るかつ!!」

そんな会話をすると慌ただしくカイルとタオがアトリエへ飛び込んできた

「うわっ、びっくりした!……な、なんなのよ」

「餌だよ、餌！」

「はい？」

「魚が大変だつたんだ！」

「え？…な、何か問題でもおきた!?」

「あつ…いや、そうじゃなくて…えーと…」

「何慌ててるのさカイル…いいよ、僕が説明するから——ライザが漁師さんたちに渡した餌のおかげで、ここ最近にはなかつた豊漁だつて大評判なんだよ、実際にカイルも使つてみて今までにない食いつきだつたって」

「な、なんだ…びっくりさせないでよ…それにしても上手くいったんだ…よかつたあ…
——あつ、れ、鍊金術士として勿論確信があつたけどね！」

「すごいよライザ！本当に鍊金術士として村で有名になつたんじゃない」

「うんうん、仲間の僕やカイルがライザに頼んでもつと餌を作つてくれつて頼まれるくらいにはね！」

「ふふつ……大したものんじやないか、鍊金術士ライザリン・シユタウト？」

「ア、アンペルさんに茶化されるとなんか照れるな……」——この調子で評判を聞いたルベルトさんがクラウディアの冒険を許してくれると、大手を振つてここに来れるんだけど……」

「すうー……ふうー……ああ……やつと落ち着いてきた、すまない、漁師の皆の盛り上がりに充てられて興奮していた——餌の件もあつたが、本題はソレじやないんだ」

「本題？」

「ああ、ルベルトさんに頼まれたんだ、用があるから来てくれつて」

「お父さんが…？このタイミングで呼び出しつてもしかして…」

「うん、きっとそうだね：とりあえず行つてみよう！」

こうしてアンペルとリラを除いた面子は島へ戻るのであつた

——屋敷には途中でレントも合流し、全員でルベルトを待つていた

「——いてて…クソ親父め…飲んだくれの癖に馬鹿力だけは健在だな…」

「レントを見なかつたのつてまた…？」

「もしかして、お父さんに殴られたの…？」

「ああ、ウチのはちょっと困り者でさ…クラウディアの親父さんとは真逆だよ」

「だが、最近傷も減ったし、やられっぱなしでたまるかよ？」

「ああ、もちろんだ…やられっぱなしでたまるかよ」

「それにも今回はどうしてケンカしたのさ」

「アレだよ、今朝飲んだくれて港の前を通つたら、ライザが有名になつててな」

「え？ あたしのせい！？」

「まさか、そんなわけあるか——要は自分の知らないところでライザに釣られて俺も有名になつてるのが気に食わなかつたつて事さ」

「どつちにしても八つ当たりだな…」

「俺としてはざまあ見ろつてとこだけどな……って俺のつまらねえ話は終わりだ」

そう言つた直後、見計らつたようにルベルトがライザたちの間に姿を現す

「こんにちはルベルトさん」「「「、「こんにちは」」

「ああ、こんにちはみんな」

「今回あたしを呼び出したのつて…」

「うむ、察しの通りだ——新しい…いや、最後の課題を出そうと思つてね」

「本当!？」

「やつたねクラウディア！これをクリアすればいよいよ…！」

「気が早いよ二人とも…」

「その通りだ、まだ達成されてないからな」

「そ、そうだよね……課題の内容はんですか？」

「課題は……まず私自身が鍊金術士というのを見てみたかった一つ目、そして二つ目は村からの信用を得るために顔役であるモリツツさんの提案を受け、君たちに任せてみた

…」

「は、はあ…？」

「あのライザが吹き飛ばしたガラクタにそんな意味が…」

「そして本来なら三つ目は君たちの実績を村中に広げようとしたが…」

「まさか…練り餌…ですか？」

「その通り、私が依頼したしたことではないが、君は自ら進んで行い、村の人たちから確かな信頼を得た」

「あはは…あればカイルとアガーテ姉さんの頼みでもあつたし、成り行きでそうなつただけですけど…」

「私に頼まれたでもなく、自ら行つたつて意味ではより評価出来るとも言えるだろう—
—そして最後…本来の問題に立ち返つて、クラウを任せるに足るか…簡単に言えば実力があるかを見極めさせてもらう」

「ついに来たか…なんだかんだで、俺たちは何も出番がなかつたからな、腕が鳴るぜ!」
「そうだな…簡単に実力を示すだけなら魔物の討伐とか…かな?」

「近いが少し違うな——対岸の、我々の商隊も通つてきた街道に最近魔物が多く出没するようになつてゐるらしい…それらに対応しながら、北の分かれ道まで進み、また帰つてくるまでの競争をしてもらいたい」

「…競争？」

「またなんとも不思議な話ですね…競走したからって実力が測れるとも思えないが…」
「詳しく述べる…言うまでもないが、魔物と頻繁に戦闘することも考えられる…」
よつて当然危険だ、しつかり準備してから明日の昼前に対岸の船着き場に来てくれ」

「分かりました、やつて見せます！」

そうして屋敷から出た一同は明日に備えるために少し相談をする

「――にしてもまさか最後の課題が競争とはな」

「ああ、オレもつつき魔物の指定討伐当たりかと思つたんだが…」

「競争：つてことは、競う相手が居るんだよね？」

「当然そうでしょ、護り手の誰かかな？——流石にアガーテ姉さん相手だと少しきつい…かな？」

「全員で相手取ればワンチャン…かなあ」

「アガーテ姉さんが相手だつた場合に一応聞いておきたいんだが…どれくらい強いか知つてるかカイル？」

「そうだな…全力での相手はしたことないが…多分、リラさんには勝てないかもしけないけど追い縋るくらいは強いと…おもう」

「それって僕単体だつたら瞬殺では？」

「そうだな…幸い聞いた限りだと、仲間全員で事に当たれそだから、そこまで悲観することはないと思うが…」

「…まさか相手ってのはボオスたちとか？」

「言つちや悪いがこつちは実戦で鍛えてきたんだ、ボオス程度の実力ならとっくに抜いてると思うぞ」

「レントの言うことも確かにだな…ボオスの剣は少し対人向きで綺麗すぎる…魔物相手ならオレたちの方が2周りは上手だな」

「何はどうもあれ明日になんきや何も分からぬ…か」

「それにしても、ルベルトさんは街道に魔物が増えてる的なこと言つてたが、知つてたか？」

「アンペルさんやリラさんからも聞いてないな…小妖精の森はあいつと出会つた以降はいたつて平和でいつも通りだつたぞ」

「原因が分からないつてのも不安だなあ…」

「どの道連戦は想定しとくべきだな…あまりコアクリスタルのエネルギーを消費しすぎると後がきついかもしねん」

「節約気味で行こうつて話だな——ちゃんと聞いてたかライザ?」

「そこで何であたしに振るのよ」

「だつてすぐフラム投げたがるし…」

「その爆発で魔物が怖がつてくれればいいんだけどな…最悪寄つて来ることもありそ
うだし、明日使用制限だな」

「うんうん」

「なんですよーっ!」

そんなライザの叫びが空へ溶けていったのであつた

競争開始

——次の日、各々万全の状態でルベルトに指定された場所：対岸の船着き場へと四人は足を運んでいた

「——まさかと思って少し予想はしてたけど、アガーテ姉さんにボオスまで…競争相手つてのは…」

そう、ライザの言う通りこの指定された場所にはアガーテ、ボオス、ランバーの姿もあつた

「——少し訂正だな、実力を測るための競争相手として、同年代のボオス君とランバー君、そして護り手の二人が確かに競争相手だが、アガーテさんには審判として呼んだんだ

「なるほど…最悪の展開は免れただつてわけだな」

「フン、最悪だろうとそうでないだろうとお前たちが負けるのには変わりない、丁度いい機会だ、実力差つてのを思い知らせてやる」

「アタシはお前とランバー、それに護り手二人を加えた四人でライザたちと互角程度と思つてたから認めたんだがな」

「なつ…!？」

「驚くこともないだろう、それに向こうにはアタシの弟子であるカイルもいる」

「へつ、アガーテ姉さんの評価じや文句も言えねーな、お前とランバーはハンデつてわけだ」

「くつ…見ていろ…競争に負けて吠え面かかせてやる…！」

「ライザもボオスも最員はしない、判定は厳正に下す——ルールは簡単だ、この街道の

先にある北の分かれ道に小屋が立っている、その扉に刻んである旅人に向けた注意書きの上から三番目を書き写してくること…競走とはいえ速さだけが絶対じゃない、途中にいる魔物の対応も評価に加える」

「私の出した課題だが、街道の安全確保も目的だ——どちらもしつかりやつてもらいたい」

「まずは、俺たちの方から先に出発する——魔物は狩りつくしておいてやるから、精々ゆっくり来るんだな」

そう吐き捨ててボオス以下3名は街道へと走つていった

「——やれやれ、おつきには抑えるように言つておいたが…あれじや効き目は薄そうだな…」

「アガーテ姉さん、俺たちはいつ出発するんだ!?このままじや差を広げられちまう!」

「落ち着けレント、リラさんにも習つただろう、焦りは厳禁だつて——それにさつきアガーテ姉さんが言つてたじやないか、早いだけが評価じやないつて」

「ああ、その通りだ、それにちゃんと開始からの時間を計つてはいる——あとボオスには既に伝えたが……」

「なに?」

「お前らは詳しくは知らないと思うが、街道の途中に古い廃墟群がある——その廃墟付近で大きな魔物を見た、と旅商人の間で噂が立つていてな：一応気を付けておけ」

「大型の魔物……」

「まさか……」

「小妖精の森で見た……あいつ……じやない、よね？」

少しの不安を感じつつ暫く待つ一同…そして

「よし、そろそろ行つていいぞ」

「待つてました！…よし行こうぜ!!」

「カイルに言われたばかりじゃないか…」

「分かってる、焦るな、だろ？」

「とりあえず行きますか」

そうして歩き出した一同は見慣れた洞窟をくぐり抜け、いつもは進まない街道を直進し、中央ライム平原へと足を踏み入れた

「中央ライム平原」そこは旅人の道から北上したところにあり、平原の名の通り終始穏やかな道のりが続いている、街道の途中には遺跡群があり昔は街だつであろう痕跡が見える：魔物は広い平原を飛び回れる用にか、翼竜種が多いのが特徴である、さらに北上すればアガーテに言われた北方分岐路へと通じ、西側に行けば禁足地へ続いてると言われている：

「——ここからはあたしたちも未探索ね、カイルは来たことある？」

「遺跡群まではいったことがあるが…そこからは進んだ事ないな…その先は魔物が少し手ごわくてな…」

「うえつ！カイルですら手ごわいなら僕なんて無理だよ！」

「手ごわいって言つても一匹一匹は大したことないんだ、ただ翼竜が多くて飛ばれると少し面倒でな…それで手間取つてると翼竜が増えてさらに面倒に…つて感じでな、一人でまともに相手にするのはきついんだ」

「なるほど…今のカイルはともかく、ちよつと前まで遠距離攻撃出来る魔法使えなかつたもんね…」

「ここで喋つても仕方ねえ、とつとと進んでボオスたちを追い越してやろうぜ」

「また焦つてるよ…慎重に行こう、慎重に…」

「そうそう、慎重に…でもちよつと急いで出発—!!」

「…素材になつたそうして歩みを進め無事に遺跡群まで付く、途中は緑ぶにに何回か絡まれたが特に何事もなく撃退した

「——ここがアガーテ姉さんが言つてた遺跡群…」

「…気配は感じないな…レントはどうだ?」

「ああ、魔物の気配は普通にするが、アイツみたいにやばそなのは今のところ感じないな」

「安心していいんだか、魔物がいることに嘆けばいいのか…」

「あつ…」

「えつ？ なになに！？ やっぱり気配した！？」

「いや、気配は気配だけど…この感じは…」

そう告げる前にライザたちの目の前に灰色の翼竜…以前、ライザたちが危なげなくも討伐した『ミニワイバーン』がいた

「よっし、前からどれくらい成長したかの試金石だ…！ ライザ撃ち落とせるか？」

「はいはい、あたしにお任せってね——コーリングスター!!」

以前のライザであればコーリングスターは敵の一か所に向けて複数の魔力弾を投げつけてるだけだったが、飛んでる相手には避けられてしまう……だからサイコロの5の目を連想するかのように弾を飛ばし逃げ道を塞いだうえで確実に当てる……ダメージこそ少なくなるであろうが、怯んで地面に落ちてくれればいい——そうすれば確実に仲間が仕留めてくれるから

「ナイスライザ！」

地面に落ちてきたミニワイヤーベンは墜落する前に何とか体勢を立て直すが、素早いカイルの剣戟により、片翼の付け根を切り裂かれる……こうなつてしまえばもう飛べない「よつしや、これで終わり！」

ミニワイヤーベンが最後に見たのはレントの重厚な大剣であつた——

「——よつし、前みたいに奇襲じゃなく、正面から対応できるな」

「ああ、ライザがうまく地面近くに落としてくれたから楽だつたよ」

「へへーん、あたしだつてただ鍊金術の研究だけじゃなくてちゃんと戦えるように考えてるんだから！」

「僕は何もしなかつたなあ…」

「そんなことないぞ、レントの一撃でも仕留めきれなかつた時や、他の魔物の乱入の可能性も考えてすぐに追撃できるよう構えてたじやないか」

「ああ、タオのおかげで俺も心置きなく剣を振れるしな」

「い、いきなり褒めてなんのさ…」

「おつと、無駄話してたら5匹くらい近づいてくるぞ…」

「なるほど…視野が広い平原で戦闘するとこんな感じに集られるつてわけか…」

「翼竜ばつかでみんな足が速いから駆け付けるのも早いんだろうね…」

「一匹一匹相手にするのも時間がかかるな…よつし、オレが囮になるからライザ広範囲にシャイニートレイルを頼む」

「なるべく当てないようにするけど危なくなつたら避けてよね——シャイニートレイル！」

その言葉と共に光の玉がかなり上方まで飛んでいく…そしてカイルは宣言通り、5匹ほどのミニワイバーンのヘイトを集め、ライザの魔法の真下まで誘導する…

「わっ…よつ…あぶね！流石に5匹の相手はきついなあ…よしこら辺でいいだろう
——雷装、ライザ今だ！」

光の軌跡シャイニートライルがミニワイヤーバーンたちに刺さる

結果仲良くみんな一塊に地面に落ちた…あとはもう袋叩きである

「闇夜の帳！」「ブラツドスラスト！」

「——これもオマケでもつていきなさい！フラン！！」

「え？やつべ、退避——！」

——チユドドドドドオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオン——

「——よっし、これで片付いたわね！」

「おいこのあんぽんたん」

「あんぽんたんつ!?」

「誰がフラム使つていいって言つたよ」

「そうだぞー…危うく巻き込まれるとこだつたぜ…」

「いやあ…いつものノリで…つい?」

「——まあ説教は後だ、今の爆発音を聞きつけて魔物が寄つてきそうだ、先に進もう」

「助かつた…」

「後でアンペルさんとリラさんにも言つて説教な」

「当然だな」「うんうん」

「そ、そんなー…」

そんな情けない悲鳴をライザがあげつつ、一同は北方分岐路へと歩みを進めるのであつた

竜（ドラゴン）

「北方分岐路」それは中央ライム平原の先に続いてる場所であり、名前の通り分岐路になつており、東に抜ければ靈峰：「火山ヴァイスベルク」が、北へ抜ければ商隊も通つてきた「メイプルデルタ」へと通じる…ケン島へ向かう商人、旅人の休憩小屋が設置されており基本的には中央ライム平原と似たような場所である：

そうして北方分岐路へ差し掛かり、小屋の手前まで来たライザたちは正面より歩いてくる一団…ボオスたちと遭遇する

「――つ！も、もう追いついてきたのか…！よほど慌てて駆けてきたか？」

「おあいにく様、あたしたちはノンビリ歩いてこの速さよ――あまり冒険ごっこを舐めないでよね、そつちこそこんなところでモタついていいわけ？船着き場に着く前に追い抜いちゃうわよ？」

「おおー煽る煽る…」

「誰がモタついてるだつて！…くつ、速さがすべてじゃないってアガーテも言つていた…勝つの俺の方だ！」

そう吐き捨てて駆け足で中央ライム平原へと去つていたボオスたち

「——へへつ、ボオスのヤツ、珍しく慌ててやがったな」

「それにしても急かせるように煽つてよかつたのライザ？ボオスたちが急いだら到着タイムが早くなるかもよ？」

「いいのいいの、ボオスも言つてたけど、速さだけが評価じゃないって…魔物はびこる中慌てて駆けて評価高くなると思う？」

「アガーテ姉さんのことだ、むしろマイナス評価になりそうだな」

「でしょ？あたしたちはあたしたちの実力にあつた速さで行けばいいのよ」

「そんなことより俺たちも進もうぜ」

「確か…小屋に書いてある旅人への注意書きだっけ？」

「あれが小屋だな…」

そう見つめる先には小高い丘の上に小屋が建っていた

「えーと…扉にある…あつた、上から三番目…『南に下る旅人は、決して街道を外れる
な』…だつてさ」

「ん？それって村でよく歌われているわらべ歌じやん」

「あー…なんか聞いたことあつたと思つたらそれか、懐かしいな…確か、続annisは『西は悪
魔の野が迫り、東の城には竜が住む』だったか」

「へえ…そんなわらべ歌があつたのか」

「カイルは知らなかつたんだつけ？——今思えば東の城つて『流星の古城』のことだよね？村の近くにある一番大きなクリント王国の遺跡…」

「実際に竜を見たつて人は聞いたことないけど…アンペルさんもまだ未調査つて言つてたかな」

「村には、そもそも見に行こうつて考えるやつすらいねえな——悪魔の野はそれ以上の完全な禁忌になつてるが…」

「レントの目指す塔はその先…か」

「ああ、今更禁忌がどうこうのつてだけで目指さない理由にはならねえ」

「けど、塔どころか、すぐ手間の野に踏み込んでみようつて覚悟も実力もまだまだあたし

たちには足りないわね……」

「ああ、精進あるのみだ！」

「無駄話もここまでにして帰ろう……『決して街道を外れるな』だよ……」

「タオは行く時より帰る時の方が元気がいいわねえ……」

——そうして帰路についた一同は、後は船着き場へ戻るだけ……だつたが中央ラ
イム平原へと差し掛かつたあたりで爆発音が響き渡る

「うわっ！？——なにいまの！？」

「ライザのフラムか!?」

「そんなわけないでしよう!!」

「こんなところで爆発…？」

「アンペルさんたち…ってわけじやないよな?」

「よくわからないけど。確認しに行くぞ!」

「ええつ!? 何が起きてるかもわからないのに、危ないよ!」

「怖氣づいてる場合か! ボオスたちが危ないかもしけないんだぞ!!」

「ああ! それにその何が危ないかも確認しないと、余計に危ないかもしけないぞ」

「わ、分かったよ…何もありませんように…!」

——そうして中央ライム平原の遺跡群に突撃したライザたちは、ボオスたちが倒れているのを見つける

「——ボオスっ!!」

「何があつたんだ……！」

「と、とりあえず近づいて確認を……」

「——待てっ！上だつ！！」

そうカイルが叫んだと同時に、倒れたボオスたちを覆うように大きな影が現れる

口よりこぼれ出ている焰、すべてを見通すかのような鋭い眼光、深紅の巨躯にそれを支えるだけの力強い羽ばたき音、外見的特徴だけを言えば『ミニワイバーン』とほぼ同じと言えるだろう：しかし、その纏う雰囲気は完全に別物、その辺の魔物とは比較にならない威圧感——翼竜種ワイヤーバーンなんてちゃちなもんじやない、伝説に謳われるような竜ドラゴンであつた

「な、なんだありやあ!?」

「気配が上過ぎて気付かなかつた……！」

「ボオス！ランバー！——この、よくも!!」

「あわわ…ま、まままさか、あれって本当の竜!?」

「早くみんなを助けなきや…！」

「だからってどうする！完全にボオスたちの上をとられてるぞ……下手に刺激したらそれこそ踏みつぶされかねない……！」

そしてここで竜の瞳が完全にライザたちを捉える

「覚悟してたとはいえ完全に見つかったぞ……！」

「くつ……こうなつたらやるしかない……俺が囮になるからカイルは大技を頼む……！」

「倒せるか分からぬぞ……！」

「時間が稼げりやいい……俺たちが時間を稼いでる間にライザとタオはボオスたちを救助してくれ！」

「少し時間がかかるが奥の手だ……世界に遍在せし——」

緊張も高まり、開戦という段階でカイルが大技を繰り出そうと詠唱した瞬間、竜はライザたちに興味を失ったのか高く飛び上がり、東へと去つていった

「――た、助かつた…?」

「…よくわからないが引いてくれた…みたいだな」

「飛び去つて行つたのは…古城の方だ…」

「まさか、わらべ歌の通りになるとは…」

「そんなことよりボオスたちを助けよう!――早く!!」

「お、おう!生きてるよな、くそつたれが!!」

「死んでなきや、ライザ特性のグラスビーンズと施しの軟膏をたらふく食わせてやるか

らな……！」

——こうして全員でボオスたち四人を介抱する：幸い大事に至る傷はなく、手持ちの薬でとりあえず意識の回復と歩けるくらいにはなった

「――まざまざとしてると、また竜が来るかもしけないわよ！全員でアガーテ姉さんのところに運ばないと！」

「わ、わかったよ！」

こうして、竜との遭遇は無事と言わないが、大事なくやり過ごせたのだつた：

「――…くそがつ…」

一人の青年……いや、少年^{ボオス}の心にキズを残しながら……

——それから全員で船着き場へ戻り、ボオスたちを護り手たちに預け、アガーテに起こつた出来事を報告し終えた

「——お前たちみんな、無事で何よりだ……そして、怪我人を救つてくれたこと、心から感謝する——護り手の一人としては、同輩が成すすべなくやられて心苦しい限りだが……」

「アガーテ姉さんが気に病む必要ないよ……あたしたちも運が良かつたから助けられただけだし……」

「レントが古城の方に飛び去ったって言つてゐるから、あの竜つて間違いなくわらべ歌の竜だと思う…」

「それより、その…あいつらは、大丈夫なのか…？」

「ああ、幸いなことにな…爆風に巻き込まれて地面に打ち付けられたことで氣絶していただけだ——大事をとつて四人とも搬送させたが、あくまで念のためだ、そんなに心配するな」

「よかつた…」

「——この度は、こんなことになつてしまつて申し訳ない…私からも謝罪させて欲しい」

「別に、ルベルトさんのせいじゃないですよ」

「そうですよ、それにいつかは誰かが襲われてたかもしれない……そういう意味では今回人命にかかる被害が出なかつたのはむしろ良かつたと言えるかもしません」

「そう言つてもらえるとありがたい……ライザリン・シユタウト君、カイル・シユナイダー君、タオ・モンガルテン君、レント・マルスリンク君」

「「「「は、はい！」」」

「緊急事態下においても、君たちは最善を尽くし、みんなの命を救つて帰つて來た……娘を託すのに君たち以上の者はいないだろう」

「そ、それじやあ……」

「ああ、こんな時に言うのもなんだが：課題は見事合格、私の想定以上の成果だ——村に滯在している間、娘のことを頼んでもいいだろうか」

「もちろんです、任せてください！」

「やつたな、クラウディア…！」

「うん…！ありがとうみんな…!!」

「まあ、いいって事よ…へへっ、俺もみんなで冒険に行けるなんてワクワクするしな」

「危ないところに行かないよう、ライザのストッパーになつてくれると助かるなあ…」

「（それは無理だろうな…）」

「え？ カイルなんか言つた？」

「…いや、なんでもない」

「――それにしても古城の竜か…」

「アガーテ姉さん？」

「いや、竜については改めて村で話し合う必要があるな、とね……」

「……（確かに：森に居たアイツが現れたのと同時に今回の竜：何か関係性が……？）」

——こうして見事課題をクリアし、冒険に新たな仲間クラウディアを加え、歩み始めたライザたち：小妖精の森のアイツに流星の古城の竜：ここ数百年聞いたことが無いようなことが立て続けに起こつたのは何の前触れか：暗雲立ち込める未来を少年少女はきっと切り開いて行くのだろう：

第三幕

変わりゆく人々

完

閑話——クラウディアの戦闘力「前」

——次の日、冒険に行く事の許可が出たとは言え、クラウディアは旅商人の娘：正直戦闘能力を期待していないライザたちは、取り敢えず小妖精の森の浅いところに来ていて、ここなら青ふに位しか出ないので万が一も考えにくいということである

「——というわけで、今日はクラウディアの適正を探るつて事よつ！」

そうライザが取り出したのは片手剣、杖、短剣、メイス、棍棒、蛇腹剣、鋼糸：ありとあらゆる武器が用意されていた

「どうしたのさ、この武器の山は」

「言つたでしょ、クラウディアの武器を選ぶためよ、昨日徹夜で調合しまくつたわ！——取り敢えず数揃えただけの初心者用だから大した性能じや無いけど…」

「明らかにクラウディアが持てなさそうな物も混ざつてゐるな……」

「実際に華奢に見えるからなあ……最低限自分の守りが出来る位じゃないといざという時に困るからな……」

そんな会話してるとライザたちの前に青ふにが1匹現れる

「ん、現れたな……取り敢えず武器が決まるまでは試すわけにも行かんから俺が対応——」

「——ねえ、レント君、私にやらせてもらつてもいいかな?」

「ん? その武器の山からもう決まつたのか?——なら見守つてるとするかな」

そう言つてクラウディアはライザが用意した武器の山……をスルーして、自分の手持ちのフルートを取り出した

「え、クラウディア？流石に楽器で殴るのはちょっとお勧めしないかなあ…」

「大丈夫だよライザ、見てて」

「ふ、ふにー！」

青ぶにがクラウディアに突進してくる中、クラウディアは冷静にフルートに口をつけ
る…そして、突進が当たるかと思われた次の瞬間…



人の耳には感じ取れない音…いや、魔力がぶにに炸裂…文字通り弾けた

「ふ、ふに～…」

その一撃を受けて、ふには素材になつた倒された

「えつ?」「なつ…」「!?!」

ただ一人を除きライザたちがびっくりするのも無理もない、傍目から見ればクラウディアがフルートに口をつけたと思ったらふにが：正確にはふにに直撃する形で魔力が弾けたのだから

「ふう…うん、出来たよ、カイル君！」

「ああ、上出来だ！」

「え？ ちよ、ちょっと…どういう事なの!?」

「言つて大丈夫か?」

「うん、大丈夫だよ」

「よし、あれは——」

——時はかなり遡る、アトリエの素材集めをしていた時、カイルはクラウディアにとある相談事を持ちかけられた

「——態々、呼び出してごめんね?」

「いや、むしろ頼られると嬉しいよ——それで相談事つて言うのは?」

「あのね——」

そうしてクラウディアの口から告げられたのは、みんなと一緒に冒険に行きたい事、今はまだそう思つただけで、具体的にどうするかというのではないけど、ただ無力のままに冒険に着いて行けるとは思つてない：つまり極端に言えば、いつか冒険に行く為に、何かしらの武力を身につけたい：：というものだつた

「——なるほど…それにしても何故オレに？リラさんやアンペルさんに相談するのが先な気がするが…」

「うん、一回相談したんだけど…そしたら戦士であるリラさんは教えられる事は無いって言われちゃつて…」

「まあ、リラさん生粋の肉体派だからなあ…」

「そしたらアンペルさんが肉体的じやなくて、魔法なら強くなれるんじやないかつて…」

それで、教えてもらおうとしたけど忙しくて相手にできないつて…」

「なるほど…確かに魔法なら体の強弱に関係なく強くなれるかも知れない…でも、まだオレに聞きにした事が解せないが…」

「うん、リラさんがカイルなら魔力の扱いに優れてるから教えられるんじゃないかって」

「あー…確かに大規模な魔法は使えないが、教えるくらいなら…うん、ならオレに出来ることなら喜んで手伝わせてもらうよ」「

「本当!?」——あつ、冒険の件はまだみんなには…」

「わかつた、内緒だな?」

「うん! ありがとう」

「なら魔法の媒体として杖がいるな：初心者用の短杖なら売つてるかな：うん、じやあ

隠れ家が完成した次の日当たり魔石の森に来てくれないか?」

「魔石の森?」

「秘密の特訓なら奥ばつた所にいい場所があるんだ」

―――そうしてアトリエが完成した次の日の昼過ぎ……つまりクラウディアがライザに冒険に行きたいと宣言した後になる―――カイルはクラウディアに杖を渡し、魔力を流して魔法を構築する様にコツを教える……が

「うーん……なんかうまくいかないな……」

「ダ、ダめんね?――才能ないのかな私……」

「いや、魔力は流せてるし、量も人より多い……後は魔法の構築だけなんだが……馴染みのない道具でいきなりはきつい―――ん?」

「どうしたの…?」

「いや…もしかしたら…——クラウディア』

「??」

「家からフルートを持つてきてもらつていいか?」

「フルートを?ちょっとここで演奏するのは恥ずかしいな…」

「あ、いや吹いてもらうわけでは…いや、吹いてもらうためだけど…取り敢えず持つてくれ!」

そうカイルの押しに流されて、フルートを持つてきたクラウディア

「——よし、さつきの様に魔力を流してフルートを吹いてもらつていいか?音や演奏

としては出そうとしなくてもいい

「うん、わかつた…」

そうしてフルートを口につけて魔力を吹く…

そうして自然体のまま奏でられた音は優しい旋律でカイルを包む

「——これは…癒しの魔力…?」

「癒しの…魔力?」

「ああ、魔力って言うのは人それぞれ特性があるんだが…オレで言うなら雷の特性だし、ライザだと光だつたり…——その中で癒しつていう特性は結構貴重でな、魔力を魔法へ明確に構築できたら怪我や病気を癒してくれるんだ、いくら魔法が万能と言つても、こればっかりは癒しという特性がないと再現できない魔法でな…」

「でも、どうしてフルートを吹くといいと思つたの？」

「いや、前にフルートを聴かせてもらつただろ？その時に魔力の流れを感じた気がしてな…もしかしたら手に馴染む物の方が上手く行くんじゃないかと…」

「じゃあこれで私も魔法が使える…？」

「ああ！今のは特性だけが表面に出てきた不完全な魔法だけど…今度は明確に何をしたいかイメージしてやつてみるんだ」

「う、うん…！」

しかしその魔法は発動しなかつた

「ふうー…上手くいかないなあ…癒すつてなんだろう…」

「あー…こればつかしは本人のイメージが無いと上手くいかないなあ…さつきのは意識

しなかつたから発動したみたいなもんだし……

「じゃあ、意識しないでやつた方がいい?」

「それは無理だな、魔法は思いを形にする術……こうしたいつて理想を描かないといふの？」

そう言つてカイルは腰の剣を引き抜き、掌を薄く切り裂く

「何してるので!?

「大丈夫、薄皮が切れただけだよ……よし、この傷口をよく見ててくれ……」

カイルはクラウディアに傷口を見せやすいように向けると、腰のポーチから傷薬を取り出し、患部に塗る——すると血は止まり、傷もほぼ完全に癒えた

「——どう?」

「どうつて…」

「いや、癒すのイメージが湧かないなら実際にやつて見せた方が早いかなつて…」

「——二度とやらないで」

「え？ いやでも、見せた方が——」

「——もう一回言うね、二度とやらないで」

クラウディアには珍しい強い発言、カイルが不思議がり顔を上げクラウディアに視線を向けると

——
暗黒微笑
アルカイックスマイル

「ひつ…く、クラウディア…さん？」

「カイル君が私のために教えてくれるのはとても感謝してるよ？——でもその為に自分がわざと傷つくのはやめて、仲間だから…ううん、友達だと思ってるからこそ、その自己犠牲はダメだと思うの」

「あつ…いや、その…」

「——お願い」

普段の気弱な態度から一転、静かなる怒気に有無を言わさないお願い：

初めてみるタイプの怒りにたじたじになるカイル：しかし、友達という間柄で他者の為にという自己犠牲：それは健全な関係では無いだろう、クラウディアの怒りは当然である

「——ごめん、二度とやらないよ…」

流石に反省したカイルであつた

——結果的に、カイルが実際に見せたおかげってわけではないが、その後クラウディアは回復魔法：『癒しの旋律』を取得した

「——これって回復だけで武力は…？」

「あつ…」

少し抜けてるところがある二人でもあつた

閑話——クラウディアの戦闘力「後」

——次の日、カイルはクラウディア：正確にはクラウディア経由でルベルトに屋敷へ呼ばれていた：そこでルベルトがライザに村での評判を上げてこいと言われた後のこと

「…それで、オレはライザの手伝いの為に呼ばれたんですか？」

「いや、カイル君キミには少し別の相談がしたくてな：私の部屋に来てくれるか」

「分かりました」

「では早速——」

——そしてルベルトの部屋に招かれたカイルは早速話を切り出す

「——それで、相談……というのは?」

「ああ、先ほどのクラウの冒険に関する事だが……最終的に多分冒険に行こうとするクラウを私は止められないだろう」

「えっ!?: では一緒に冒険に行つても?」

「最終的にと言つたはすだ、何個か課題を出す氣でいる……が、これは経験則なのだが君たちは乗り越えてくれると思つていて――そこで、だ」

「はい?」

「クラウは今まで戦闘と呼べるものに関わつてこなかつた、旅商人として旅での知識や魔物とかの逃走術は教えたが、戦闘はさせる気はなかつたし護衛を雇えば済む話でもあつたからな……しかし、少し事情が変わつた……クラウ自ら冒険に行きたいと言つたんだ、そうなれば護衛される立場に甘んじさせる気はないし、それをしてしまつたら逆に君たちも危なくなつてしまふ――」

「――結論から言おう、クラウが一人でも魔物と戦えるように鍛えてやつてくれないか?」

「…ふふつ…似たモノ親子ですね」

「なに…?」

「つい先日です、クラウディアから戦える力が欲しいと相談されました」

「あの子がそんなことを…」

「はい、護られるために冒険したいんじやなくて、みんなと一緒に冒険がしたいから戦う術を教えてほしい、と」

「…実際キミの目から見てクラウは戦えそうかね?」

「まだ分かりません……たゞ、僅か半日で回復魔法をほぼ取得しています……魔法士としては非凡かと……」

「クラウが……なら改めて頼む、クラウを鍛えてやつてくれ」

「はい！」

こうして男同士の秘密の約束が交わされた、この約束だけは後々だれにもバレなかつたという――

そしてクラウディアが魔法を取得そたその日以降、二人はライザたちに隠れて秘密の特訓をした

「――よし、回復魔法はもう十分にできるようになつたね――あとは肝心の攻撃力か…」

「うん、やつぱり攻撃も出来ないと…カイル君たちに任せたなんて出来ない…ううん、私がしたくないもん」

「その心意気があればすぐ出来るようになるよ、魔法は精神のありようでほぼ何でもできるから」

「でも、攻撃つてどうすればいいんだろう…剣で切つてるわけでもないし…」

「そうだな…フルートを触媒にしてるから…クラウディアには音で攻撃つてイメージする」と分かりやすい…かも?」

「音で…?」

「ああ、爆音とかつて言葉があるだろ？だからフルートの音を目標に届けるイメージで……弾けさせる」

「音を……目標へ……弾けさせる……」

そうしてある程度のイメージが付いたのか、少し離れたところにある木を見つめフルートに口を付けるクラウディア……そして

パンツ：

乾いたような音が鳴り、木の表面に僅かだがキズができた

「……でき……た？」

「ああ！これで明確にイメージできて威力が上がれば立派な攻撃手段だ！——それにしても提案したオレが言うのもなんだが、すごい攻撃手段だ：視界と魔力が届く範囲なら実質射程無制限だ」

「これが魔物にも通じるように威力を上げるにはどうすればいいかな…？」

「さつきも言つた通り、もつとイメージを明確に持つたり、より強力なイメージを持つことかな…」

「より強力…？」

「ああ、魔法の弱点として、自分のイメージ以上のことは絶対にできないんだ、魔力が足りなくて実現できなかつたりはするけど…だからクラウディアならもつと大きな音と衝撃をイメージできれば…」

「分かつた、やつてみるね！」

こうして攻撃面でも努力をし、僅か1日で木が抉れるくらいの威力が出るようになつた

「——うん、ここまで威力が出るなら魔物相手にも十分に通用すると思う」

「本当!？」

「嘘じやないよ、実際に冒険に出たら不慣れもあるだろうけど足手まといにはならないと思う：旅商人の娘として旅慣れしてるみたいだし、体力はあるみたいだから、タオよりも向いてるかもね」

「なら…うん！」

こうして、ルベルトが最後の課題を終えるまでにクラウディアはある程度の戦闘力を身に着けたのであつた

——そして時は小妖精の森に戻る

「——なるほどねえ…なんか最近カイルがコソコソしてるとと思つたら、クラウディアと秘密のデートつてわけねえ」

「おいおい…何でそうなる…」

「ふんっ…クラウディアの頼みとは言えあたしたちに隠し事してたんだから、これくらいの嫌味は言わせなさいよ」

「あら、私とのデートは嫌味になっちゃう？」

「あつ、ううん、違うのクラウディア！」

「ふふ…分かつてるとライザ、でも程々に…ね?」

「はーい…」

「それにしても実際のところクラウディアってどれくらい強いんだ?」

「多分平原でそこそこ離れた位置での一対一ならタオとレントは勝てないかもしないな」

「まじか…!」

「僕はともかくレントまで?」

「相性つてのがあるからな…攻撃の予備動作がフルートを口につけるつてだけで、クラウディアの視界内ならどこに居ても攻撃が飛んでくる…それに耐えながら接近して攻撃つて出来ると思うか?」

「あー…確かに、俺とタオじや、ちゃんとした遠距離攻撃手段無いもんなあ…」

「そういうこと、クラウディアが戦力に加わってくれるなら、翼竜とか空飛ぶ敵にも有利をとれるようになるぞ」

「そいつはありがてえ！今までライザに任せっきりだつたからな」

「そ、そんなに大したことじゃないよ…？」

「謙遜することじゃないよ、それに回復も出来るんならライザのましいグラスビーンズを食べなくて済むから助かるよ」

「あつ…」「だからなぜタオは学習しない…」

「――…タオ、あんた後でアトリエに来なさい、試作したグラスビーンズの山をたらふく食させてあげるから」

「そ、そなんあー…」

「まつたく…ちゃんと回復アイテムを作つてあげてるあたしにも感謝してほしいところわ！」

「ちゃんと感謝してるさ、それにクラウディアだけに回復を頼るわけにはいかないだろ、折角のコアクリスタルだ、有効活用しないとな」

「魔力だつて無限じやないからな…」

「それにしてもこの用意した武器の山は無駄になっちゃつたかあ…」

「折角用意してくれたのにごめんね？」

「いいの、いいの、無理に合わない武器使つてもしようがないし、どの道武器が決まつた後にちゃんとした奴作ろうと思つてたから」

「ちゃんとしたやつ…？」

「そうそう、今の聞いた感じだと普通のフルートより魔力を通しやすい素材で作った方がきっと威力も高くなるんじやない？」

「多分…いや、絶対になるだろうな」

「なら決まりね…！――でもちよつとフルートの構造を理解させ貰うのに分解させてほしいかなー…なんて」

「おいおい、大切なフルートを壊すなよ…」

こうして後日ライザから新しい武器『クレプスクルン』を貰い、攻撃と回復ができる頼もしい仲間になつたクラウディアであつた

閑話——道具の見直し「前」(レシピ11——躍動シロップ)

——クラウディアが仲間になつて数日後、一同はアトリエで各々好きなことをしていた……そんな中、ライザが突然声を上げる

「——決めたっ！」

「うおっ、なんだ急に声上げて」

「何か思いついたのライザ？」

「最近色々なことがあつたじやない?」

「ああ、アトリエが出来てからヤツらと遭遇したり、この前なんて竜だもんな」

「そうそう、そこで色々思つたのよ」

「何をさ?」

「まずは回復アイテムね」

「施しの軟膏とグラスビーンズのことか?」

「ううう、ボオスたちが倒れてるのを見て、みんなが戦闘中に気絶とかしたら直ぐに起こして、なおかつキズとかを回復できるアイテムがあればいいなって……」

「確かに……今ある薬だと、傷は癒せても直ぐに戦線復帰はできねえ……」

「それって結構危ないじゃない? それに眠らせてくる魔物とかもいるし……」

「確かに、すぐにカバーできるアイテムがあるのは助かるな」

「という訳で新しい回復アイテム作るわよっ！」

そう意気込み、鍊金釜へいつもの様に素材を入れていくライザ：苦い根っこ、中和剤・赤、安らぎの花、シャボン草、クーケンフルーツ：

「…なあ、オレの記憶が正しければ前半の素材がほぼまんま施しの軟膏なんだが：」

「出来たー!!」

「いや、聞けよ…」

いつもの輝きが放たれ、鍊金釜から取り出したのは——施しの軟膏であつた

「やっぱり施しの軟膏じゃないか！」

「違うわよ？」

「いや、どこが違うんだよ…」

「見た目は確かに同じよ、でもちゃんと気絶回復効果も付けたんだから!…………たぶん」

「どうやつて使うんだ?」

「普通に傷に使いたい場合はいつも通り患部に塗るだけだけど…気絶回復効果を得るためにには口に含ませてあげてほしいの」

「食べるのか?」

「まあ、簡単に言つたらそうね」

「(なんか嫌な予感がするな…) ちょっとレント、試しに舐めてみてくれ」

「?――俺でいいのか? てつきりこういうのはいつもカイルが面白さで飛びつくと

思つたんだがな……じゃあ、ちょい失礼して

そう言うとレントは新しく作った施しの軟膏を指に掬い、それを口に含ませる…

「……カハツ…」

急に顔色を青くしたと思った次の瞬間、咳とともに床へ崩れ落ち、ビクンビクンと痙攣している

「——レ、レント——!!」

「あわわわわ……いつたい何をどうしたのさライザつ!?」

「レント君大丈夫?——き、気絶してるみたい…」

「あれえー? おかしいわねえ…」

「気絶回復が気絶薬になつてるじゃないか!——おい、レント! しつかりしろ!!」

そうカイルがレントの頬を叩くがまるで起きる気配がない

「うーん、おかしいわねえ…そだつ！もう一回口に入れたら起きると思うんだ！」

そう言つてライザは再レンントの口へ施しの軟膏を流し込む

「ぐつはあつ

!?!?????

結果的に起つことに成功したが、飛び跳ねるように起きたレンントは藻搔きのた打ち
回つている

「レ、レンントー!!」

「ほらやつぱり起きたじゃない」

「レント君、何かできることはない?」

「み?」

「み?」

「水を?」

そう呟き再び崩れ落ちたレントであつた

「いつたあつ！」

——鈍い音とともに水を飲んでようやく一息ついたレントのゲンコツがライザに落ちる

「なんでもん食わせてくれたんだ！」——つたく…」

「なんですよー：結果的に気絶回復にはなつたでしょ？」

「ちなみにレント、どんな味だったんだ？」

「——苦い」

「えつ？」

「ひたすら苦い、苦くて苦くてひたすら苦い」

「そ、そんなに凄かつたの？」

「まさか味覚の刺激だけで気絶するとは…くそ、ようやくリラさん相手にも気絶しなくなってきたのに…」

「一応参考までに聞くが、どうして気絶回復効果でこんな結果になつたんだ？」

「だつて、何かしらの刺激が無いと気絶なんて起きれないでしょ？――だから苦くしてみたんだけど…」

「気絶回復効果って言葉で…まかしやがつて…完全に気付け薬の類じやねーか…」

「なるほど…」

「でもこれで、回復アイテムの問題は解決ね！」

「解決なわけねーだろつ！封印だ封印、こんなもの普段使いの時に間違つて口に入つてみろ、戦闘不能がもう一人出るぞ」

「実際に気絶した人の言うことは説得力あるね…」

「えー？ もつたいないし何とか使えない？」

「…………そんなに使いたきや、使わせてやるよ…今な」

そうレントが立ち上がり例施しの軟膏の薬を手に取りライザに近づく…

「あ…いやー…その…あたしは遠慮したいかなー…なんて…ダメ？」

「ダメ」

そうしてアトリエにライザの絶叫が響き渡つたのである

——そうして再び落ち着いた一同

「——ひどい目にあつたわ！」

「立ち直りはえ——なさい：、お前が作つたもんだろうがよ」

「それにもしても、必ずしも刺激を伴わないと氣絶つて起きれんのか？」

「だつて、戦闘不能クラスの気絶よ…そんなのよつぱり強い刺激…あつ

「あつ、なんだあつ、つて」

「いやあ……別に苦みにこだわらなくともよかつたかなー……なんて」

「どううと?」

「鍊金術で、他の刺激……それこそ甘さとかおいしさの特性を引き出して高めたものなら
いけるのかなー……って」

「鍊金術については分からぬいな……」

「よつし、とりあえず作つてみますか!」

そうして取り出したのはハチミツ、銀のハチの巣、七色葡萄、パルマの実……

「見事に甘い物ばつかだな……」

「まあ、みてて……!」

そしていつもの様に鍊金釜へ入れ光を放つ：

「出来たー！」

そうライザが取り出したのは黃金色に輝く液体：ぱつと見はハチミツに見えなくもないが、ソレよりなお黃色い透明度ある液体である、甘い香りを放ちある程度離れてても食欲をそそる…

「これは…？」

「うん、『躍動シロップ』って名付けるわ！飛び上がるほど美味しいはずよ！――…たぶん」

「…それでこれどうやつて試すんだ？」

「そんなの氣絶した人に…」

そこから言葉は続かなかつた、ただ全員でまだ少し残つてゐる例の薬に視線が集まる

「「「「…」」」

「わ、私がいく…よ？」

「クラウディアにそんなことさせるわけ行かないじゃない！——ほら、男ども度胸見
せる時よ」

「お、臆病で有名な僕に振らないで欲しいかな!?」

「俺ももうやだぞ」

「——…：一度舐めた奴にもう一回やらせるのも酷か…」

そしてカイルは覺悟を決め施しの軟膏を手に取る

氣絶薬

「南無三ツ!!!」

この日、アトリエでは三人の戦闘不能を出す異常事態になつたとか：

——カイルが氣絶した後

「おーい、カイル……」

ライザがちゃんと氣絶してゐるかと頬をつつく

「うん！ちゃんと氣絶してゐるわね！」

「誇るなよ…そんな苦悶の表情を浮かべたカイルなんて初めて見たぞ…」

「早くその躍動シロップとか言うの試してあげなよ」

「分かつてるわよ…——ほら、カイル…あーん」

そうしてライザが躍動シロップをカイルの口に突っ込む…すると

「あつま—————い！うまい！！！」

カイルは飛び上がるよう起きたかと思うとそう叫んだ

「わっ…びっくりした」

「お、起きたな」

「うん、流石天才鍊金術士のあたしね！」

「それで味はどうだつたのさ」

「…いや、凄い甘いんだけど美味しいな…しかもなんか魔法的効果もあるのか、多分これある程度の回復薬としても使えるぞ」

「そんなに凄いんだ…ちょっと舐めさせてもらつてもいい？」

「うん、カイルで安全も確認できだし、ちょっとみんなで味見してみよっか」

——こうしてライザたちは新たな回復アイテムを手に入れたのであつた

る | ちなみに、後ほどアトリエに帰つて来たアンペルに目ざとく躍動シロップを見つけられ、全部食べられてしまい、もう一回作る羽目になつたのは完全な蛇足であ

閑話——道具の見直し「後」（レシピ12——レヘル
ン）

——次の日、また一同はアトリエに居た

「——つて違うのよっ!!」

そうして再びライザが叫ぶ

「今度はなんだ…？」

「昨日、色々思つたつて言つたじやない」

「確かに言つてたような…？」

「そうなのよ！ 昨日は回復アイテムだけで終わる予定じやなかつたのよ！」

「いや、お前の作ったアレのせいじゃねーか…」

「そういうさいつ！——ドラゴンとか見て色々思つたんだけど、フランつて一応火属性じゃない？」

「爆発のイメージが強くてあんまり火つて言われてもピンとこないが…」

「そこで万が一竜とかの相手をした場合——」

「——うえつ!? そんなの僕ごめんだよ!!」

「万が一よ、万が一、備えとくと気が樂じやない…それで口から火吹いてたし、多分フラン使つても大して効かないと思うのよね」

「確かに、同属性の攻撃は基本的に効きづらいから、あの竜もそうかもな…」

「んじゃあ、フラムが火だから…雷、風、氷のどれかで攻撃用の道具を作るのか？」

「その通り！雷はカイルと同じ属性だから態々かぶせるより、風か氷で作ろうかなって」

「なるほどな…そういうえば素材的にはどうなんだ？両方作れるのか？」

「あつ…ちょっと確認するわね…うーんと…えっと…——よし！氷を作るわよ！」

「素材足んなかつたな」「だね」

「そ、うつさい！——まあいいわ、早速作るわよ！」

そして順にうに、アブラ木の実、中和剤・青、きれいな水、アマタイト鉱、プルムル、アクア鉱、きれいな水、きれいな貝殻…：

「す、い入れるな…」

「ちょっと閃いて強そうなの作れ そうなのよ……！」

そしていつもより強い輝きを放つた後、鍊金釜の中には氷のような正立方体のものが
あつた

「……これは？ なにやらフランと同じで導火線みたいのがあるが……」

「使い方はフランと同じで、熱と衝撃の代わりに冷気と衝撃が出るはずよ」

「流石に試せるものじゃねーな……」

「名前は『レヘルン』ってどこかな」

こうして新たなる武器も作り未来へ備えるのだった

——その日の夕方、ライザは竜に出会つたり、クラウディアの武器を作つたり、回復アイテムや新しい爆弾（爆弾）を作つたりと色々なことがあり少し気疲れをしていた：気分転換がてらボーゼン地区を練り歩く…

「んうー…はあ…！偶にはゆっくり歩くだけってのもいいわねえ…」

「ん？…ライザか」

そうして歩いてると普段島では見ない人に声を掛けられる…アンペルとりらである

「あれ？二人とも島に来てるなんて珍しいね」

「ああ、島にも遺跡は多いからな…というかこの島は遺跡の塊みたいなものだからな、調べることにはいくらでもある——まるで島そのものが遺跡のような多さだ」

「普通に暮らしてると、その辺りピンとこないけどね——結構珍しいことなの?」

「ああ、大都会でもない一地域にこれほど遺跡が点在してるのはかなり:いや、唯一と言つていいほどの珍しさだ:過去にそれだけ何かしらクリント王国にとつて重要な何かがあつたのかもしれん」

「ふうん……すごい国だつたんだね……」

「本当にこれほどの遺跡があるのに、何の伝承もないのか……」

「知つてるのは昔にあつた大きな国つて事だけ……かな」

「そうだ、そこがさらに謎な部分もあるんだ」

「謎?」

「ああ、不思議に思わないか?これだけ生活に馴染むほど遺跡があつたってことはクリ

ント王国との関係も密接だつたはず……それが何の関係も伝わつてないなどあり得ると
思うか?」

「たしかに……」

「その代わりと言つては何だが、この村には禁忌は多い……なになにをするな、何処何処に
行くくななどがな」

「あたしにとつちやいい迷惑よ、息苦しいつたらありやしないわね——あたしたちを
襲つた竜も、村では定番の脅し文句でまさかいるとはね……ああいうのに出くわすと『渴
きの悪魔』もホントにいるんじやないかと思つちやうよ」

「渴きの……悪魔?」

「乾季を呼ぶつて言う、あたしたち農家の天敵だよ——湖を渡つてこれないから、島に
居れば安全つてお話……島から出る気持ちを抑えるための脅し文句つてあたしは思つて
るけどね!」

「…」

「どうしたの黙りこくつて?」

「――…もうすぐ乾季が来るんだつたな」

「そうだけど…? カラッカラな日がずーっと続いて水を持つてるブルネン家が威張るイヤーな季節」

「そうか…やはり調査を急ぐ必要があるかも知れないな…」

「??」

「最悪お前たちの力を借りるかもしだれん」

「う、うん? よくわかんないけど分かつたわ」

そうしてライザは自分の家へ帰宅していくた

「…どう思うリラ？」

「この段階にきて全くの無関係と考えられるほど耄碌はしてないつもりだ」

「ライザたちが遭遇したのは推定將軍級…間に合うと思うか?」

「間に合わせるしかあるまい…この平穏な景色を私の故郷の様にする気はない」
「そうだな…あいつらを巻き込みたくはなかつたんだがな…」

そう険しい顔で話す二人は、改めて何かしらの覚悟を決めるのだつた…

ゲーム風ステータス集（第三幕終了時）

○カイル・シュナイダー

L v ━━━━ 26

武器 : 片手剣（インデュービタブリンク）

品質 : C

H P : 0

攻撃力 : 18

防御力 : -5

素早さ : 20

効果 : 魔法杖兼剣（魔法ダメージが上昇する）

アタッカー : L v 1 ディフェンダー : L v 1 サポーター : L v 0

アクティアブスキル

「剣戟」

敵単体に物理ダメージを与える、APを回復する

「カウンターライトニング」 A P 3

行動を行えなくなる代わりに、敵の次の攻撃をかばい無効化する、中確立で麻痺を与える（全体攻撃と大技は無効化できない）

+ 麻痺の付与確率が上がる（T L v 2~）

+ 麻痺を確定で付与し、追撃を行う（T L v 5）

「雷装」 A P 4
エンチャント

自身の攻撃力と素早さを少し上昇させる

+ 自身の攻撃力と素早さを上昇させる（T L v 2~）

+ 自身の攻撃力と素早さをかなり上昇させる（T L v 5）

カイルの魔法シリーズ、別名作者のネーミングセンスの無さが光る一品シリーズ

手足に雷を纏わせ、移動速度と物理攻撃力を上げる魔法、かなりの速度を出せるが、雷速まで出してしまってカイルの方が衝撃でバラバラになってしまふため、セーブして使つては、10年前の魔法院時代に修得したもの

「デイスチャージ」 A P 10

敵単体に雷属性の魔法ダメージを与える

+ ある程度の防御力貫通効果を付与する（T L v 3~）

+ 防御力貫通効果をさらに上げる（T L v 5）

・カイルの魔法シリーズ、別名作者のネーミングセンスの無さが光る一品シリーズ
直訳で『放電』であり、名前の通り手若しくは武器から雷属性のビームを撃ちだす魔
法、10年前の魔法院時代に修得したもの

イメージは龍玉の○飯の片手でのか○はめ破である

「スラッシュ」

※ノーマルオーダー達成時に発動

敵単体に魔法ダメージを与える

パッシュブスキル

「在りし日の約束」

「夢を探して」

与える魔法ダメージと素早さが上昇する

「お人好し」

ライザ、レント、タオのいずれかがPTにいると、WTが減少する

「師匠」

クラウディアがPTにいると、魔法ダメージが上昇する

「頑強LV1」

最大HPが少し上昇する

「鉄壁LV1」

防御力が少し上昇する

外見

光の加減によつて薄董色にも金色にも見える淡い髪色、髪色とは正反対に深い海を思わせるような藍い瞳、身長は170cm前半程、体は度々よく鍛えてるのか、筋肉質というよりは程よい機能美を感じる、服は海の色を思わせる青色で統一された軽装

○ライザリン・シユタウト

LV——23

武器：「杖」（ヘリオプロクス）

アクティブスキル

「ライザスペシャル」

敵単体に物理ダメージを与える、APを回復する

「コーリングスター」 AP3

敵単体に魔法ダメージを与える、ノックバック量が大きい攻撃

+ ブレイク値が上昇する (TLv2~)

+ ノックバックス量が増加する (TLv4~)

「シャイニートレイル」 AP5

敵単体に魔法ダメージを与える

+ 効果範囲が全体になる (TLv3~)

独自設定：スフィア型の起点を先に上空へと投げて、任意のタイミングで発動する罠

型魔法

「アストラルスファイア」

※アクションオーダー達成時に発動

敵単体に魔法ダメージを与える

パツシブスキル

「ポジティブスタンス」

敵に与えるブレイク値が上昇する

「全力系鍊金術士」

タクティクスレベル3以上だと、与えるダメージが増加する

「頑強LV1」

最大HPが少し上昇する

「鉄壁Lv1」

防御力が少し上昇する

「爆弾魔」

（爆発）を持つ道具の与えるダメージが上がる

○ タオ・モンガルテン

Lv——20

武器：「槌」（クレアエンパシー）

アクティブラジカル

「黒鳥の羽」

敵単体に物理ダメージを与える、APを回復する

「闇夜の帳」 AP4

敵単体に魔法ダメージを与え、中確立で毒を付与する

+毒の付与確率が上昇する（TLv2）

+高確率で呪いを付与する（TLv4）

「操術・絡繰り」

※アクションオーダー達成時に発動

敵単体に物理ダメージを与える、ランダムな異常状態を1個付与する

パッシュブスキル

「追撃の心得」

ブレイク時の敵に与えるダメージが増加する

「プレパレーション」

戦闘開始時、自身に状態異常無効・1回を付与する

「強制LV1」

攻撃力が少し上昇する

「虎視LV1」

クリティカル値が少し上昇する

○ レント・マルスリンク

LV———23

武器：「大剣」（コロツサルエツジ）

アクティブスキル

「マーシャルアーツ」

敵単体に物理ダメージを与える、APを回復する

「ブラツドスラスト」 AP5

敵単体に物理ダメージを与える

+攻撃力を低下させる（TLv2↓）

+与ダメージの一部を回復（TLv4↓）

「タービュランス」

※アクションオーダー達成時に発動

敵単体に風属性の物理ダメージを与える

パッシュスキル

「頼れる兄貴分」

ブレイク耐性が上昇する

「我流の剣術」

タクティクスレベルが2以上だと、与えるダメージが増加する

「頑強Lv1」

最大HPが少し上昇する

「鉄壁LV1」

防御力が少し上昇する

○クラウディア・バレンツ

LV———19

武器：「フルート」（クレップスクルン）

アクティブラッシュキル

「プレリユード」

敵単体に魔法ダメージを与える、APを回復する

独自設定：例によつて独自設定、実際に戦闘中にフルートを吹いてたら音で積極的に狙われちゃうし呼吸とかきつそだなと思つたため改変、シン〇オギアかな？——実際に吹いてるわけではなく、魔力をフルートに乗せて発動してる：手に持つてただけでも使えるが、明確にイメージすることで威力が上がるため口に着ける動作をしてる：と
いう設定

「癒しの旋律」AP8

味方単体のHPを回復する。タクティクスレベルが高いほど、回復量が上昇する

+HP継続回復を付与する（TLV5）

パツシブスキル

「平常心」

タクティクスレベルが2以上だと、受けるダメージを軽減する

「弟子」

カイルがPTにいると、魔法ダメージが上昇する

「直感LV1」

回避率が少し上昇する

初期プロット

(※ネタばれ注意)

○カイル・シュナイダー

原作開始時19歳

序幕で名前だけ出てきた本作の主人公だつたはずのモノ

設定としては島の記者ピーターの息子、ジェナのお兄さんだつた

元々ピーターが首都で記者をしていた頃（という設定にした）に魔法の天才と持て囃され、魔法に精も出すも首都で謎の爆発事故があり偶々現場の近くにいた当時10歳のカイルが犯人として新聞に憶測で掲載されてしまう。

その結果天才と持て囃された頃と打つて変わつていわれのない誹謗中傷を一身に集め、結果軽度の人間不信および魔法不信になる

父、ピーターも記者として、何より父として息子の汚名を払拭しようと紛争するが、當時勤めていた出版社の上司によつてカイルが犯人とする世論を覆すような記事を書くことを固く禁じられてしまつたがために自身の記者としての行いに疑問を差し、結果現実逃避するように記者から身を引こうとしたとき、クーケン島と出会う。

夫婦息子娘共々首都から逃げるよう島へと移住することを決意したのである

島へと移住してからは魔法不信となつてしまつたために魔法を使うことを極度に忌諱しており、しかし持ち前の前向きさから魔法がだめならと片手剣を手に取り武に励むようになる

結果原作開始時にはアガーテ姉さんに次ぐ島2番目の剣の使い手となり、普段の仕事は自作した小舟で漁のお手伝いをしたり対岸に渡り葦草等を摘む、対岸用の便利屋みたいなことをして稼いでいた

ライザがアガーテ姉さんにボーデン地区で鉢合わせなければカイルの舟に乗つて対岸に行けるし、カイルとも合流できるし、多少なりとも対岸を知つてゐる人間と同行できるしでとライザの完璧なプランの予定であつた

――お前記念すべき1話目（続く予定ないけど）でセリフすら貰えなくて恥ずかしくないの？

○ライザリン・シユタウト

御存知自称普通の鍊金術師 アトリエシリーズ一ひどいあだ名が多い子さん

元々カイルが魔法を使える一番の理由がライザが初期からなぞに魔法を使えるとい

う矛盾を解消するためである——お前、本当にただの農家の娘か???

時系列としてはボオスとの一件後の半年後くらいに島に移住してきたカイルにどこからか魔法がすごいと知ったライザがしつこく迫り、嫌々ながらカイルが魔法の基礎の基礎、魔力の放出を教えたことにより、魔法が使えるようになる

なお作者の趣味により爆弾の魅力に取りつかれた少し危ない子になる予定だった、たすかつたなおまえ？

本当は主人公との甘酸っぱい恋愛ルート、友達ルートの二種を書きたいと思つていたが、作者の力量不足によりすべて頓挫した

○ジエナ・シュナイダー

原作開始時12歳くらいの予定だつた

そもそもシユナイダーヒュンデレ性が作者の創作、性を調べても全然出てこなかつたから作つた（小並感

お兄ちゃん大好きっ子、もともと記者に興味持つたのはお父さんの影響もあるが、合法的に兄につきまとつたためつていう少しヤンデレ気味にする予定だつた
ライザ、クラウディア恋愛ルートでは最後の大魔王のポジになる予定だつた

○クラウディア・バレンツ

作者の力量不足により存在すら匂わせられなかつたかわいそうな子
作者の趣味により貧乳設定を付け、無意識にライザあたりが胸に関する話題をはなす
と大魔王降臨なさる予定だつた

一応主人公恋愛ルートとか考えてたけど、言うだけならただよね

○タオ・モンガルテン

いじめられっ子、丸眼鏡

○レント・マルスリンク

常識人粹苦労人気質筋肉

○アンペル・フォルマ

甘党

○リラ・ディザイアス

若干天然が入つたけしからん衣装のお姉さん、ライザが普通つて自称するのはこういう格好の人人がこの世界多いのか?????